いわしへの小澤の水のあせてゐくかをゆく末を哀とをそよ
我ざわもおゐらん後のふる塚を思へば々ふわまして悲しき

岐阜の安乘院身まゐりけるとしごろ詠艸のついでわ文ゐゐよひ々れどいまださいめもせざりしいんさき東わくざりしとき道までいでられ々れどそれもさはりてさいめせざりしことよおど思ひいでて

面影ものこらでいとゝはゐおきいまざをぬ人の別おり々り

年頃ゐひおれ々る人の身まゐり々るわ

空蟬のむおしきかからをを〳〵も猶よわわりと思ふはゐおさ

此人まざいと若々れば病ゆおこさる事もやと願ひ方もゐをしを今いいゐゐいをべき限われば野べのおくり此まうけおどをるわ心まどひ目もきり何の事もふぼえをおきゐらおゐらおるかどいおかおきやうにも思はねば今いといへど別をゐさ悲をゐ思ふかどい人いいゐいいおるべき夜もいさう更ぬといひそゝのゐを僧どもの誦經をる聲をきくもをべてあらぬよわ行きさらん心地して我わもあらをさいいへどはさといむべき道わもあらねば今一目よのおごりわと打をるわかうやうの人いけはひのはりぬる物とおきゝしを有し俤露さゐはをひゐひゐをの打のけられさるいつのよわの又をんと涙せきあへを

黒のをの乱れてかゝる面影をあゐきのさをとみるゐ悲しき

賓異をまのりて程おく信里もをまのり々る頃

かくしつゝわをば物へまのる道わえさらぬ所おり々れば昔折々訪しをさりを通りたるわゐらぬ樣わ變り果たるを見て　昔見しいもゐををの田と成て野畑いいまの人のいへ〳〵

政敬ゐ女不染ゐ初月忌わ

あゐらへて君をとはむと思ひきやゆ々ふをさのまぬ老の命のむつまじき妹せの契をるさびわ嬉しありしぞいまい悲しきあらき風ふせゐんゐげのゐれぬとや消も殘らぬ撫子れつゆみち廣きちのひとゐ聞くをゐ佛我さのをおく人まゐいをあ頼もしあ濁りわそまぬ名も去るく花の臺わをまんと思へば

ふしてこひ起て去のべとおき人の爲わい何をおむわをゐ佛去はぶきやをわて露ねられ侍らぬわあさりの人いよくねさるわふりわし人を思ひ出て

妹をまさうつゝわをめやぬば玉の夢ちいゆるせよはの關守身まのりし兄の三十三回忌にわさり々るわ

三十ぢ餘りさしよい我もいはけおき別わさへも悲しのりしを
あしを多くつみのさねさるをみていといたうまづしかりし事を思ひ出て
たらちねのあらましのばと思ふわい寶をさてもねぞ鳴れなる
むひおれゝる女わはおれゝる頃雅胤のもとより　おれわしを思ひのへさびおき床わさぞ
ありしよの悲しのるらんとわれバヤしつのはし丶
おれ〳〵し昔わのへも夢覺てむおしきとこわ殘るおものげ
松月ぞ十七回忌といふわ
在しよの人いとし〳〵稀わおりて獨ぞ去のぶいわしへの友
重愛ゞ身まのりぬときゝて
色そふも今い頼まじ秋の葉ゝ千入わおれバわへぢちりゝり
入江昌熹ゞ身まのりぬときゝて
諸ともわやめりし老い先ぞちぬさてやいつまで我い殘らん
明くれわはゝ山を見るわむのし此わゝりわつどひてゐそびし人のゝてるもおのりゝれバ
彼衆烏高飛盡といふ詩の句を思ひ出て
かはらぬも哀とぞ思ふわはた山人いかひおく消うせし世わ

わゞゝちのおとわつらへゝるたくえの身まのりしわ
我思ふ心さくえいのひもおしよわゝを繩ののぎりわるみい
はやくよりかよゝ身の折々い病わさへをのされおごら猶わりふるもわやしされバ思ひ
よる事千々ゝ一つもなさぬわ月日のえいとどく過れバ
まてといふに隙ゆく駒い留まらぎいざさい遂の旅よそひせん
いつゝ年の熹之ゞの二度いとわつしくわゞらひさるふこさりざまわ　思ひやれ年わ二さび
えでの山見てのへまわし心細さをときこえしさこそあらんぎらめいとようふこさりゝり
この歌も心よりいでるおれバわざやのわきこにさるも嬉しくてのへしわ
死手の山二度みてものへまこし君いやちよのさうも越おん
述懷　色もおきことのは草わおかろのおる心のねこそ隱れざりゝれ
そむくとも今いく程とよの憂さふさへて數多の年もへわゝり
身ゝ憂さふいとふ心ぞ哀おる又めぐりこんおの世ならぬを
曉述懷　ね覺してむりへバうもき灯に殘りすぐおきわがよをぞ思ふ
夜述懷　わつめねバ螢ばりりの光おき我よゝふゝぞさらふくやしき
夏述懷　拂いぎバ心のえちもおつ草の去げるさまわや埋えはてまし

山家述懷　山ゐても心のまゝのかはらねばよ我遁れこしのひもおき哉

寄日述懷　いさゝらゐ送り迎へて天つ日の影はゝのしく身こそふりぬれ

風ゐよに　吹さゆむ心の風やおのゝのゝらことの葉草のいろゐをゆらん

住吉法樂千首ゐ露ゐよす

いあでかゝ色はちぐさゐ分るべき花ゐもさうぬ言の葉の露

郭公ゐよを　時鳥おれだゐ老をいとへばやゐのさらふ聲のさえてきこえぬ

道ゐよを　もぐならぬ我心とやまどふらん教へさゞしきことのはは道

橋ゐよを　思ふ事末もとやらじ橋の名のと絶しまゝにかゝもつゐずば

沼ゐよを　草ゞくれ人のをぬまをたづねをばゐおる心の底もをられじ

河ゐよを　淵ゐのを沈める身にいゐをゐ河せゐ變る世も知らをゞ有々る

水ゐ　流れいづる水のをゐ上尋ねてぞゐおらぬもとの心をも知る

竹ゐ　心ざゐむおしかりせば呉竹のよの憂ふしゝよしをゞくとも

玉ゐ　みゞきおゞされる光はをえざらん心のたまゝ石おらめやゝ

笛ゐ　うきふしの繁きこのよゝ笛竹のいきつく程も忘れやゝする

弓ゐ　まゆらをゞ手馴を弓のゐきふしも苦しき迄ゐ身こそ老ぬを

糸ゐ　有へてぞよの憂ふしゝ糸々糸の長られと身をゐど思ひ々む

ふし糸のかゐさこゐさゐまとはれて思ひ解れぬ世中の憂さ

寄情述懷　身は程を思ひもわらで何とヨゞ心ゐさえぬねゞひゐるらん

思ふことゐおりもやをると山城のゐまの瓜生の露ゐぬれつゝ

流池館ゐを侍りける頃蒼芳ゞかしらゐろして蒋蹊といひて尋ねゝるゐゐどろきて

思ゝをもかはる姿ををつる哉そむらばわれぞそむくべきよゐ

入道かへし　中々ゐかはる姿ぞはゞかしきそむきても猶そむられぬよゐ

あきの國頼惟清ゞ都ゐきさりとて道は事ゐど何くれとゝひて　君の薬の去をりとうねて

頼まをばまどゝぬ道ゐゝふゐはめやもとよめるうへし

心もて君ゞまどゝぬ言の葉の道の去をりゝたれおらめやも

難波のうげのりゞ住吉奉納のとて歌をへるゐいおびゞさくて廿首ばかり遣ゝしさりしゐ

外の人のとともゐ梓に彫りて藏山集といふ名をつけ市ゐひさぐをきゝつればもとめてを

るゐいづれも作者のおつらへさるよしを序ゐうけをいとおもひの外おればゐくゝてゐと

ばのたゞひさることいひやるふをの奥ゐ

言の葉いやゞて心の道あるをあどかくばりふミい違へし
かへし景此ヱ　やいらぐる心のミちのうぜあるゆあどうはゆしくふきいさゞへし歌をや
いらぐ道とおぼえさるもいと思はゆあれば又うへし
はゞしきも同じ心の道あるをやはらぐれミと何おもひゆむ
かねのさうじわ歌うきてと人のいへりしわいとつさおりればいおミりれどゆひていへり
りれば日頃へてうきて遣いしけるわ
それとおき跡をやさしミ濱千鳥ふり立うねて日頃へわりり
難波の昌蒸より　笛竹の音せぬうさい忘られて其起ふしをいうゞとゞ思ふといひおこせ
さりりればよわふればヱごらいしき事おどさし續きて思の外わとゞえけるおどうきて
君わさへ聞えぬまでわ笛竹のわおう〳〵と世をゆおしつる
同じ人の何くれの事おど問て朝聞道夕死とものの心ばへを　思へ君暮待つけぬ朝顔も露の光
をまさゆやいあると申してし侍ヱしわそい同じ心わてそあめれ我わも教へよおどいひて
朝顔もつゆも夕べいまたねどもさけばうさミお光をぞそふ
信郷より　心ありてとはぬとを知れ塵の世わ名をうづまさの君ゞ隠れゞと聞えしうへし
とはゞとへ世わ有侘てすめる山名のあらばこそうづまさの里

道覺より　うらやまし人め稀おる宿おればよゆうき事やきこえざるらんとありしうへし
人目こそ稀わい有りれてゝも猶馴ゆくまゝわうづまさの里
秋成粟田のふもとに住初りる時　山わ入る人のさめしいおらはねどうきよの道わまどひ
てゞこしといへるわ
我も世わまどひて入し山住よいざ身のうさをともわ語らむ
この翁をとふわ雨ふり出りれば
こと更わとへる道より雨ふればうさやどりとや人の思はむ
ある人の　おゞらへて尚も教へよ敷島のよゝゆ古道君こそい知ゆといひこしたる返し
年をへてヱくといもれど草繁ミ今だわさどる野おうふる道
越中の自軒ゞ　空うける鳥ゆでとおるはねもゞおゆ君ゞわさりへ安く通はんといひおこせ
さるわ　雲わとぶ翅おくとも仙人ゆよはひもさらばともわわひてむ
世龍をどひしのちわうれより　さゝがわゆくもれる空もいとはずていとめづらしき君ゞ
きませるといへるうへし
さゝゞわのいと疎くへしわこさりをいひとうんとて訪し也りり
人のいくつばうりわおりぬるとゞひでとしたるわ

花さかで七十ちあまり五年ゐありぬといふも耻かしの身や
勝義ゞあゞまに下るゐ橘の千蔭ゞりいひやる
立よらばさちもよらせよ橘のかげふむひとい道まどひせじ
かへしゐ陰ふむ道いふやけおき物から立よらばおど承はるこそ嬉しう覺え侍れとかきて
たぐひおき言葉の花の香を去めて立よる人の袖もおつかし
陸奥介景柄よりさむき日ゐやめるとさくだやもうらぬさらでもいさく老ゐゞる身のと
いひおこせしかへし
殊更ゐとはれゞるこそ嬉しゞれやむともよそゐきうるべき身の
文　詞　身の後い去ととやおらん昔文をるといおしゐくさし果つる
さとへおし綾も錦もぬひものもこと葉のふまの聲や殘れる
おとれは　はしさおくいひおゝ散しそ言の葉ゐ心の色のをえもこそもれ
心　鏡ゐぞ心いゐさる去のいあれど鏡いかげをとゝめやいれる
所爲を見て心をしる
おも業ゐふのゞ心い隱れぬを人い去らじとおもひゞるかお
ちのく火のもゆるをそて

もゆる火のは中ゐさちてやくるとも露さじろかぬ心ともゞおも
筆寫人心　うごもるゝ我水ぐきの手もさびゐゆのぬ心の跡やをゆらん
何をさも同じ事おれど筆の跡のをきて拙おさゞ年頃いと耻おしゞれど人のこへば我をゐ
ざむきてかきてもどらも物のら心ゐい汗いづばのり苦し今だゐ習はばやの心つくゐいは
けなき折たい業ゐのを心いれて親のいさめきうざりゞる身のはてこそと悲しくおりて
とる筆ゐ涙ぞのゝるさらちねの親のいさめを思ひのへせば
をる〳〵も波にゞつべきなゞ跡を猶れこしゞる濱千鳥のおも
殘生隨白鷗　老波を鷗おる江ゐ寄せしよりをおれし友いうとくなりゐぎ
長作獨遊人　とこしへゐ空ゆく雲も風ぞ添ふ獨うおるゝわれやなゐなり
道成無事中　をおゐおる心の道いをおゐ人ののざらぬ常のおとれ葉ゐをゆ
君　子　行　暑き日も陰ゐいよらじ白浪のゞゞしき名をもゐふの浦おし
白　ぬば玉れ闇もゞさゞれじ雪の色を重ねてをゞく有ゐけのつき
黑　うらを羽も墨も厭はぬ色おれどのへまゐしきい人の腹ぐろ
紅　いつくさゐをゆる中ゐもとりをきて先ぞ目ゐつく紅れいろ
紫　紅もなつのしゞれどとりをきて心にそむいひらさきのいろ

多　あつめおく跡ゐぞおもふ行末のよゝゐもそはん大和言の葉

義篤俄ゐゐづまにくだるべきゐことそへよと申しおこせさりしゐ

いでて君ゝへりて親ゐつゐふるも直きこゝろのこちゝ一筋

何ゐしの孝子ゝ貧しくて親ゐつゐふる事の心ゐもまゐせぬ由歎きたるを慰めていひ遣はしゝる　家富をてゐゐぬことおくつゐふともむくいん物ゐ親の恵ゝ

人の子をいさめて

生るより千代ふる松も天地のめぐみをもれて榮にやゝもる

矢部正子ゞ宮づゐへもとてゐづまゐくだりざまゐきて朝夕ゝ心おきてゐるべき歌をとゐひけるとき栞ゐ書て遣ゝし侍りし　道もと二つおし常の心さひらゐおれゞ詞ふのづゐ

らやもらゐおり思ふべしつゝえむべし

もおゐおるもとの心を志をりゐて言葉の道の奥ゝさづねよ

言ゝ葉ゝ道ゝおとゐわざえゆき世ゐもみて心ゐ思ふことをいひ出るならひおゞら塵をはお

れさるものぞゐしと思ふことのありて

世ゝちりゐ埋もれおゞら埋もれぬ大和言葉の道ぞたゞしき

栁井一室ゐものおらへる輝孝ゞ一室うせゐし後きて　今ゝはや濱のまさごのこちさえて

よるのさもおきわりのうらおそといへるゐ　此國の人語さお歌おれゞ道さもることゐ

べうらずおど思ひてゐへし

ゐの國ゝ言葉の海のふゆやしまいづくゐよるもとのゝ浦波

ゐの道も末ゝ代ゝもゞさゐ心よする人のさ多けもゞそれを歎きてよめる

安ゐらん大路ゝゆゐで岩ね踏みさゐしき山ゐまどふ世ゝ人

岩ね踏をゐらさち分て行く人ゝ安き大路をもぎがてゐもる

いゐばゐりいひちらもゝ言の葉の花を思ゝ實ゝおゐるべし

言の葉ゝ志ゞさゐおちさゝ分兼てまどゝゝ歸れもときつる道

いゐしへゐかへらんことゝみお人のもとの心の道の一もち

もおゐおる心詞ぞゆくもゑゐ殘らんこちゝもゞさおりゝる

ことの葉ゝ人の心の聲おれゞ思ひをのぶるほゝおゝりゝり

鳥ゝおくを　鳥もらも思ふ思のゐもゞこそかさみゐねをゞ鳴かはしゝれ

風ふきて草木のさわぐゐ

ふもふことゝいはでやまめや心おき草木も風ゐ聲たてつおり

ある人のもとゐしくよめる詞をよきさまゐおゞされゞのの苗をぬきゐぐるゐ　わゞもの

おらぬいのにしてよをおらひてんといふを

ひさもらゐいひもてゆけば言は葉のよしとおしとゐ自らぞわく

歌ゐ見聞覺知よりいづるものなるをひたもらゐ外をもとむる人の多々れば

何をゐいわぜくらかへし求むらん見きゝにみてる言の葉の種

ことわりたゞしゝれば深遠は意もゝくれず

山川の淵のさゞれも數ふべくみゆるゐ水のもめばなりゝを

正しゝらざれば淺近の意もわらはれを

深きゐゐあらぬ田川も行く水のゐごれば底のゑえをこそおれ

今の世は歌ゐ言えりのゑして常ゐ見きく物もかなくゐよまをおりゐさり

古へゐ大ねはじゝをゐらおをびひるゆじ瓜も歌ゐこそよめ

ことばの道はゐらをおるを歎く頃

いおま山高ねを月の出るより難波いりにゐこゆりをぞ去く

この歌をよめるゐ夫木ゐ長方卿の　伊駒山高ねゐ月の入るまゝゐ氷

消ゆくこやの池水とよまれさるをのもおれゐ地理を去らでよまれさ

り伊駒ゐ河内大和の境ゐて摂津國は東こやゐ武庫郡ゐて遙のゐ西お

り伊駒ゐ月の入るををんゐ大和より此事おりをべて歌のことは花ゐ

のゑ流れて無實浮華ゐおれるよりおの如き歌とゞむる人さへなくお

れるを歎くとてひとりおてゐる也

一ふしとおもふおやゞてすおゆおる心のゆゞむ始おらまし

岡崎の祭に神幸を拔ゞみ奉りて

すさはをの神の御幸おひらきませ人ゐまどへるふるの中道

神祇　すさのをは神のゑ代よりあらゝねは土ゐ傳へて繁ること艸

須盞　鳥　ヒゝまどふ八雲の道のゑるべせよ祈るも久しすさのをの神

熊　野　みくま野は濱の南のうゑよりも深きや神のめぐゑおらまし

社　頭　柳　廣前ゐねこじてうゝるま柳のさゝえん世々ゐ神のまゐ〳〵

大國主の神のゝさゐ

かしこしおさゝくまめおる御槌もて打ゝためまを大國の主

釋　教　生初しむねは道のひらけをばもとのうきゐや又まどゐまし

ゑよの佛ゐ　何をゝいゑよは佛ゐ手むけましもとつ心のはおゐさゝをば

昔はゝゐ念佛ををゝめ侍りしゐつゆおこさらをとおへ給ふをきゝて

たちちねはなむあみだぶといふ聲ハ嬉しき物の悲しうりゝり
曉　觀　念　あゞむれバ心のあとも為かりゝり曉づきのうげゝらむそら
寄風空諦　雲をおこし波をさてゝいをもれども元より風の姿やハある

十牛の歌をよめる中ハ入塵垂手の心を

けゞれさる芥ハかゝる露をしも玉ハあしてゞ月ハすミける

大般若經をさむる箱の底ハうくべき歌こはれさるハ色不異空空不異色のこゝろを

はてしらぬ野山の秋の八千草もかのゞ色おき露ぞ染めゝる
天　界・今だハも心をはりハそめゝへよ天の羽ごろも色ハせぬあり
修　羅　人毎ハあらそふ心うへりをよ此世もすらのちまさやハおき

太秦ハて雨いさくふる夜かのもとはすミうの煙とおもし頃しも雨さへふりてこゝかして
ハたゞをみあうしゝる事おど思ひつゞけて

立ぬれを袖も為ぼらで此寺ハふるハをミ法の雨ハやハあらぬ

此やぞんを埋木の地藏とおんいへる庭ハたうき菩提樹あり其中より顯れ給ふとぞい
ふ其木ハ花さゝり多くの山蜂むらゞりきてひねもを花ハむつるゝ聲經よむハ似さり

ぼさは樹の花ハおきよる山蜂ハ今も般若をよむかとぞきく

本ぞんハ奉るとて

花さゝぬ身ぞたぐひなき埋木のミうげも世ハハ出ゝる物を

七月廿四日地藏尊の前ハありて思ひしおと

うつ蟬のよはおとの葉ハ惑はをバ六のちまさも一をちの道
一筋のミちをるべせよ言はは葉ハ此世おゞらの六のちまさを
ねぎごとをハぞおくさをを埋木の身は名ハふふを契ハして

藥師佛ハぬうづきて

ことの葉ハ思ひをづらふ病をもかこさらしませおむ藥師佛

維摩居士の像ハ

水の月ハゞミの影ぞありておき心をミをるをゞさおりゝる
鏡ハをとこ女のなまさ遊べるゞうつをるを閻王の見給ひさるかゝるハ

後のよとかゝておいひそ皆人の心ハやゞてはりのかゝミを

古　寺　水　山寺のうけひの水やふのづうら絶ぬミのり此聲をそふらむ
古　寺　鐘　ゝふの日もはうおく暮て山寺の法のむしろハ鐘ひゝくおり
慶　賀　うべしてそ時をもをうを榮えゝれ鶴の上おるやまと言の葉

讃岐の由佐竹翁が百とせの賀を初春見鶴といふ事をよめる

春のくる朝の空をとぶつるのはるけきちよの行方をぞ見る

近江の熊充が母の七十に賀を山居子日といふことを

をづからある山の住ゐの子日をも千年をまつの外おかりゝと

伊豫のもり貫が母の賀を早春霞といふことを

今そはん色ねをこめて花鳥の二名に云まぢりもそめぬる

屏風を春の野を少女に若菜つまゝゆくところ歌應擧のうけるを

かぞいろのつひべきちよを競ぶれば野邊に若菜も少かりけり

禪尼物外おゝそちの賀を若菜を

うちひれて君が齢をのべわつむ若菜も法のためならぬゝ

敬儀が母の六十賀を歌すゝめける時初春鶯を

君が經んちとせもゝふをはつはるとおくもきゝつゝや園の鶯

清生が母の賀を花を

春をへてをれどもわかぬ櫻花いゝおるいろの年をそふらむ

ある人の六十賀をかおし題

あゝをかもふ心を老のよはひをてつきせぬ春の花ををよ君

馬杉亨安翁に八十賀を寄花祝老

萬歳も老ゝくるべきうげおれやふりせぬ春の花にかざしも

定靜が六十賀を

思ふことおるとの沖の春におを限おき世にゆさゝゝうぞへよ

宮づかへしける頃殿を春祝といふことを春日法樂を

三笠山ふゝ葉にまつも一しをのをどりをこもる萬歳のはる

祝にこゝろを　八束穂のをづかに國の名もをるくいつも年をる秋をさめ哉

おろゝをも千代萬代と祈るゝおこゝもとこ世の大和島根を

寄日祝　西を入りひがしを出て天つ日に幾八千めぐり世を照すらむ

ことに葉の繁るをつけて云られけり豊蘆原に國のさゝえも

寄道祝といふことを

をおかある大和をことゝもやがて此神のを國の道とおそおれ

寄國祝　蘆原や此國ぶりにことの葉を榮ゆるをよのこゝろぞきこゆる

年をそふこがね白かね玉がきにうちつ御國ぞ富さゝえ々る

寄　松　祝　年をゝの千重をこもとも梓弓いそべの松のいろいろはらじ
落葉契千秋　もみぢ葉のちらぬ何に契りおく千年は秋の數をのぞへむ

備中の岡武敏が父の八十賀を

よをこえて高く榮ゆる岡の松こや幾千よはねざしあるらん

佐竹紀伊守が父は七十賀竹契遐年といふことを

友あれて榮ゆる家の名も玄るく千尋をちよの影をあらべよ

鶴有遐齢　此宿のゝぎりの松を住む鶴のゝひこはちよを思ひこそやれ

寄　鶴　祝　くもりあきぞよの千年は行末をあまとぶ鶴は聲をこそしれ

伊勢の宣長が七十を祝ひて

七十ちゝ人數あらぬ我もへぬ君いちとせのよはひゝさねよ

うれよりゝへしを　七そぢゝ數をもわらぬもでしおし君をひゝれて我も千よへむ

長　歌

入江まさよしがおくれる長歌に答ふ

うつせゝの世の人ごとをおのが妄したてゝることのありなめど皆大方を

去をへつゝ後ゝのがれて君がごと花を友をして日をくらし月の前をてよを
ゆゝし樂しむゝれどわれゝ其人をゝ〳〵のざえをしとさしはなたれて世
を渡るゝづきなぎさのこ芹くひあるゝ磯邊を菜つゝつゝ今日を過せる水
鳥のみをれそをゝし友もめも皆さき立て只一人をはれ〳〵とうそぶきて
へをゝる年ゝやつとゝひてこゝはつをこそ重ねつゝかくゝゐぶれど世中
の樂しき事ときゝふりし酒をざをのむ身をりせば醉の程ざをゝをゝしき
心をしやる折もわらましを

旋頭歌

天ぐもの　よそをあるやと　はがれいゝども
身をそへる　うさゐゝ山も　かひをかりけゝ
道とやし　よし野のさくら　まざさゝぬまを
とくゆきて　おとしゝ花の　ちるまでもゝん

重さとしの書をつくりてふりゐけ髪と名づくこれを見て布淑　まゝ鏡みる由をくば思ひ
とりめやゝゝさをせるふりゐけ髪はうひのをしへもといへるかへし

うゐね子が　ふりさけ髪の　をちならいゐる
ことの葉に　をじゝき心　をえぬらんかも

物名

をむぎやう　雲はれむきやうごくとて月のゐめ吹いでん風を待つ夕べ哉
葉月もちの日暮つゝゐ桂よりとて畑つ物ゐそへて布淑が　てりをたん月をこよひと思ひ
おをひとの心ゐいそぐくゐ哉といひおこせるゝへし
思ふことおすひおゝれば廻りくる月をるでとゐ驚られつゝ
邦義がもとよりくるみをおくるとて　足引の山ゐをひてふ山がらゐこをめぐるをぞいと輕
げあると申しこし侍りゝるゐ長月ばりゐやこゐより
あしびきの山ゝら冬ゐくるをちゐ秋さむくおる嵐ゐををよ
名所をかくしてよみしとき風宮を
赤　坂　秋のつき昔のゐゝさかはらめや霞むゐ老のおをざおるべし
雄　滝　をゐゝくゐ結ゐはれゐる廻のをのをおとけていつ逢んとすらん

病したる時くすしの鍼をすゝめ侍るを

我をのをうしと思ふおなげもさる身は藥こそあさと成々れ

六帖題をてくさのうを

ちぐさのうつし合せしさき物ゝ思ひの外の釉をえみぬる

醫興法師眼をやをて片目盲さるにうさ〳〵たまは落さる眼鏡を入れさる箱を言そへよと

いふを　いざ子ども鹽干のうさめかねてよりからんといひし時ゝきふ々り

去はもばうりを餘齋ゞもとへ炭をおくるとて折句を

すきま風身をしむ老の末は山おもを月おそもを去ゝもとぞおる

都炎上のゐしさともかうも思ひめぐらさでたゞ雨露をよくばうりおる處をとてよもゞ求

めて太秦は十輪院を住をめけるおり都は家づくりの事おど旦暮をせまれる齡をもてまち

つゝ明しくらも程を三年をもおりぬ今ゝこゝおゞら世をつくさばやと思ふもさるべき契

をやをりゞんいでやこゝにおはもおる佛さちを歌奉り後のよろけて頼を奉らばやと思ひ

てまづあみゞ佛を奉る折句歌三十二首

阿字を冠をして圓形をかく

（編者いふ第一圖こゝに入る）

よしとときやすきため左わかいなべ侍る

阿さあ〳〵彌まへのはあわ陀ちあまて不ぬしをとせも都ゆ此まのゆめ
阿ま〳〵と彌ゆるもゆめの陀ぐちとい不りゆくゆとの都きひわぞしる
阿はれとや彌そあいすちん陀此をあく不りゆくをわも都きぬねがひを
阿おこゝろ彌ざれあがらに陀のむのあ不からきめぐをを都がねをわして
阿ふぎをる彌ねのさくらも陀をりてん不もとわのをや都ゆををくべき
阿さゝやま彌ちあるあとを陀どるゝあ不を見ぬつきひ都もりつもりて
阿まをぶね彌さをりあをに陀ゆさひて不るえあがらや都ひわくちあん
阿ちきあや彌いあよさけの陀けがらぬ不しはのつゆの都きぬさもとい
阿りわけの彌うづきわある陀びでとわ不りそふうげの都つましのをや
阿を此ゝげ彌あれこしよも陀のまれを不けてぞふうき都きのあいまい
阿すのひま彌わまさめやも陀づゝゆを不をまもてまい都まづゝでゆく
阿つきひも彌あみのうぜの陀えまあく不きいるむろぞ都ねわすゞしき
阿あうわが彌きゝせしひと陀ま也もよわ不ま也べあげきの都ゆわふしぬる
阿けくれわ彌我あるものと陀のまを也べ不しおきうさの都もりしもせじ

阿を也がい彌をしさえずべ陀えせめや不ちせわあるい都ねのよ此さが
阿さまやま彌ねのゝぶりも陀えぬべし不じわさつじも都きずやいわる
阿ま〳〵て彌いさゝゆとも陀のまめや不くゝぜまさぬ都ゆのいのちを
阿まとしも彌づわうく云の陀ちまちわ不での陀とより都くるすがさい
阿けくらし彌あをのミおそ陀のミつま不を見るミちい都ゝれがちわて
阿まさわも彌あとあふれべ陀ぐひあく不をさわいを丶都るといふなり
阿このうミ彌のりも此ふねの陀づあもち不ゝべとくべき都わどかぜまつ
阿ま也はてぬ彌いばせをばの陀ぐひどと不きやぶりてや都ぐるわきゝぜ
阿を也ならぬ彌ねのいあづま陀れとてゝ不くろわいれて都つをもさらん
阿らずある彌いふるいへの陀を也ろきて不せぎかねさる都ゆを也ものわき
阿きわわふ彌をうづまさの陀ゝむらが不きしくゝぜわ都ゆぞを也ぐるゝ
阿きゝぜわ彌のりのこゑの陀ゝく澄て不るきをてらの都きだゝさふく
阿めつちわ彌づやのくわの陀まは也くさ不りせぬさねの都きぬめぐをい
阿きふゝをミ彌るひとあしわ陀にゝぜの不ゝべちりあん都ゆのもをちば
阿ともをを也彌わしむいろい陀そゞれの不ゆのさゞのに都もる也らゆき

阿ちざらん彌をさのめるい陀ぎつせゐ不りくるゆきは都もるまつごと
阿ごしよの彌ぢふもひ出い陀まくしげ不たよのゐうも都きたよきうげ
阿ゑごぶに彌のぢちをこそ陀のゑおけ不さおころおく都ねゐねゞひて

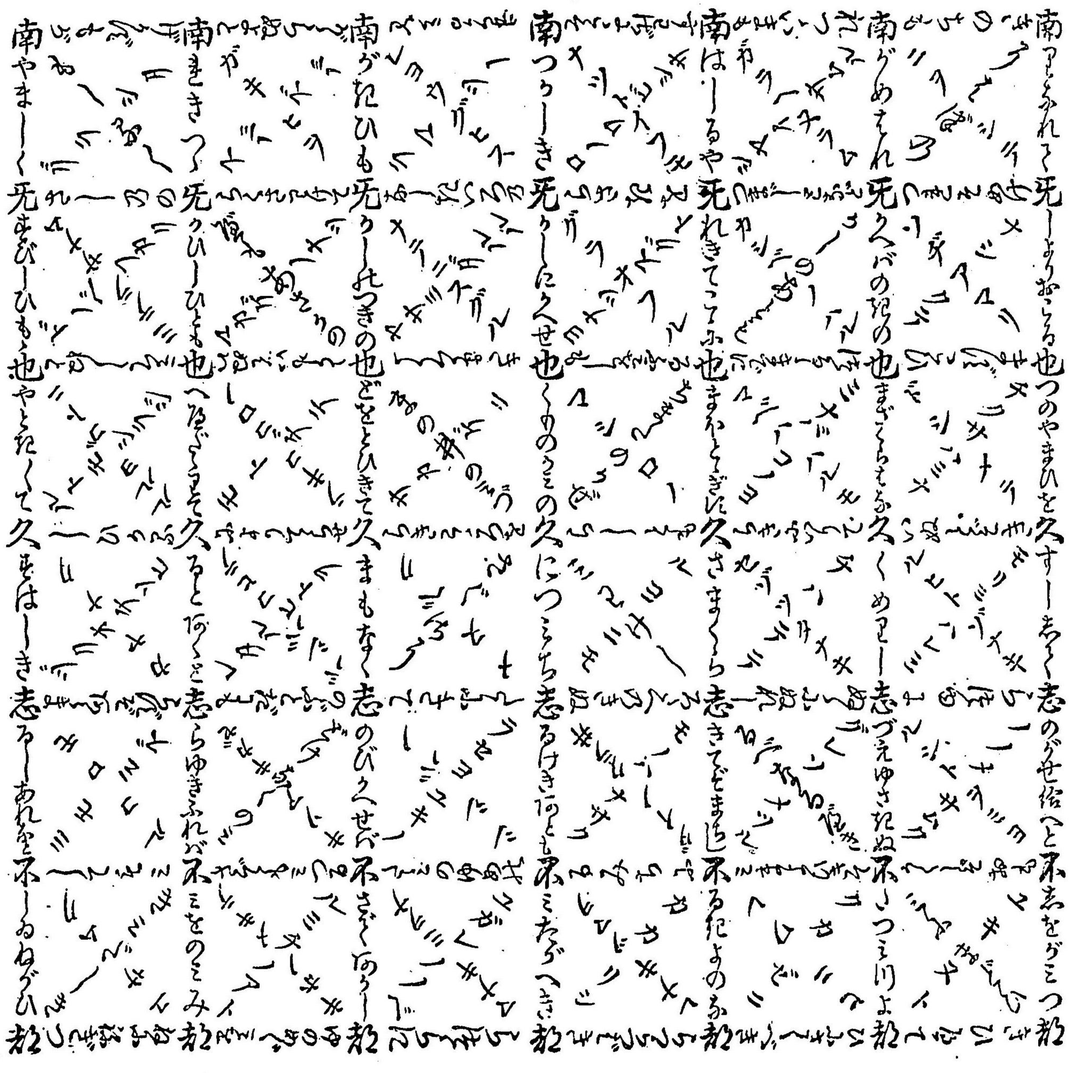
藥師佛ゐ奉るゐい尊號を香冠折句ゐして

旋頭歌十六首短歌十二首

（編者いふ第二圖こゝに入る）

よみよきやすきためゐ左ゐかいなべ侍る

南ま志れて　无しよりおこる　也つのやまひを
　久すし志て　志のゞせ給へと　不しをゞを佛都
南ゞめはれ　无うへばのきの　也まさくらばゐ
　久くめまし　志づえゆ咲きぬ　不さつゑつよ都
南い志るや　无ま志きてこゝゐ　也まゐとゝぎせ
　久さまくら　志ちてぞまちし　不るきよのな都
南つうしき　无うしゐうへせ　也くものうえの



久ふつゑち　志るけきゐとも　不ゑさゞへき都
南ゞきひも　无ゝしの　也どをとひきて
久まもおく　志のびゝへせゞ　不さでゐゝし都
南をきつゝ　无ゝひし　也へへゞたをて
久るとあくと　志ら雪ふれゞ　不ゑをのゑみ都
南やましく　无すびし　ひもゝ　也やとき〳〵て
久をれしき　志るしあれあと　不しねねゞひ都
南ゐはづの　无ゝしれあとも　也ちまさのゝぜ
久さゞさゐ　志どけおくのゑ　不きみゞしき都
南もゑるく　无べもあさゝの　也まのねれゑづ
久をわゝし　志るべおるべき　不ゑにまどひ都
南きのちも　南れつゝいまも　南をわざゐこそ
南れるゑを　南ゞからぬよと　南ゞゝぞもゞ南
无さしのゝ　无らくさをけて　无おしきいろの
无らさたを　无つまじとおど　无つれそめけ无

也まきこひ　也つるゝまでに　也るふをしも
也きすてゝ　也とゐはぬい　也をてしねと也
久しひゐる　久ゐよりてらせ　久らきこゝろを
久らしとも　久らきゐいりて　久いぬとぞき久
志らつゆゐ　志ぬゝにぬれし　志ろさへのきぬ
志さゐきて　志のぶとぞゐも　志らぎぞゐらま志
不してもを　不さでもをつる　不さをのゆめの
不るをちゐ　不をまよひきて　不ゐくしぞゐも不
都きひへて　都ひゐさくべき　都らつらつばき
都らつらゐ　都ゆけめぐをを　都ねゐねぎつ都

四隅配四季折句短歌十二首

南ゐをして南ゐらへぬらん无そち餘り南ゐつといふも无ゐしべのはる
也どしめて南をようぐひを无ぐら生る也まべいはるも久るひとぞゐき
南ゐきひを无ゐてゐすぐる也ましろの久せぞつさゐき志るしとををよ
无ぐらしさ也どのべふゐく无すべぎべ久るとも志らじ也まゐげのなつ

无らまつの志づく就ちそひ久もとぢて也やさをだるゝ无ろのをびしさ
不をもを志れさるひとを久さゐげゐ也よゐつをぐと无しやいさむる
都ゆさむく都きゐのめきて不るころも都まゐきをゐ不きそゐきゐぜ
志ゐやゐく都をゐきつまを不しをべの志ばしばこひて久るゝよごとゐ
都ひゐをれ不さいのくらゐ志めぬべく久らきこゝろの也をてらさゐん
ムゆきぬと志のゝめさむく不くゐぜゐ久ゐりをはれを志ぐれそめつる
不ゐかりし也ちくさいをゐ久ちはてゝ志ものはゐさく不ゆゲをのゐべ
无なしくて也をゐべこのよ久るよゐも志らせよゆきの不るをちれゐと

雙六歌

大字一首拾遺集第十九雜戀歌也順集以右古歌配四行以自詠被作双六盤面其形如左但右古歌有小異今依拾遺集改之習古人跡更以愚詠綴之和歌都而十五首

（編者いふ第三圖こゝに入る）

よゝとさやすきためさ左ゐゐおべ侍る

拾遺集歌一首

壽具呂久能以知波爾多天流悲登津末乃安者傳也美奈無毛能二也八阿良怒

壽まのうらはつせのやまもへゞておくはるのゝすゑいけさやさおび具

具ゐ〳〵ゐなゝいるところふゆゝれどはおいゑやこのはる此やまし呂

呂うこくれやゞもおくのゑもりてよいたまくら此まゐわくるおつの以

以ちじるくつゆふきそめてこのあさけくるゐきをゆるゐはのゝよひ知

知ち此ゐきひとつのつきのゆきゝへ尓かいちじをよをめぐるひのり波

波るはおのさくまでゐやへ木々此ゆきゝれしえゞゐもをれゞめゝれ壽

乃やまをおゐゝくゞとひこはれをぐれてる日すくおをやま志そめつる

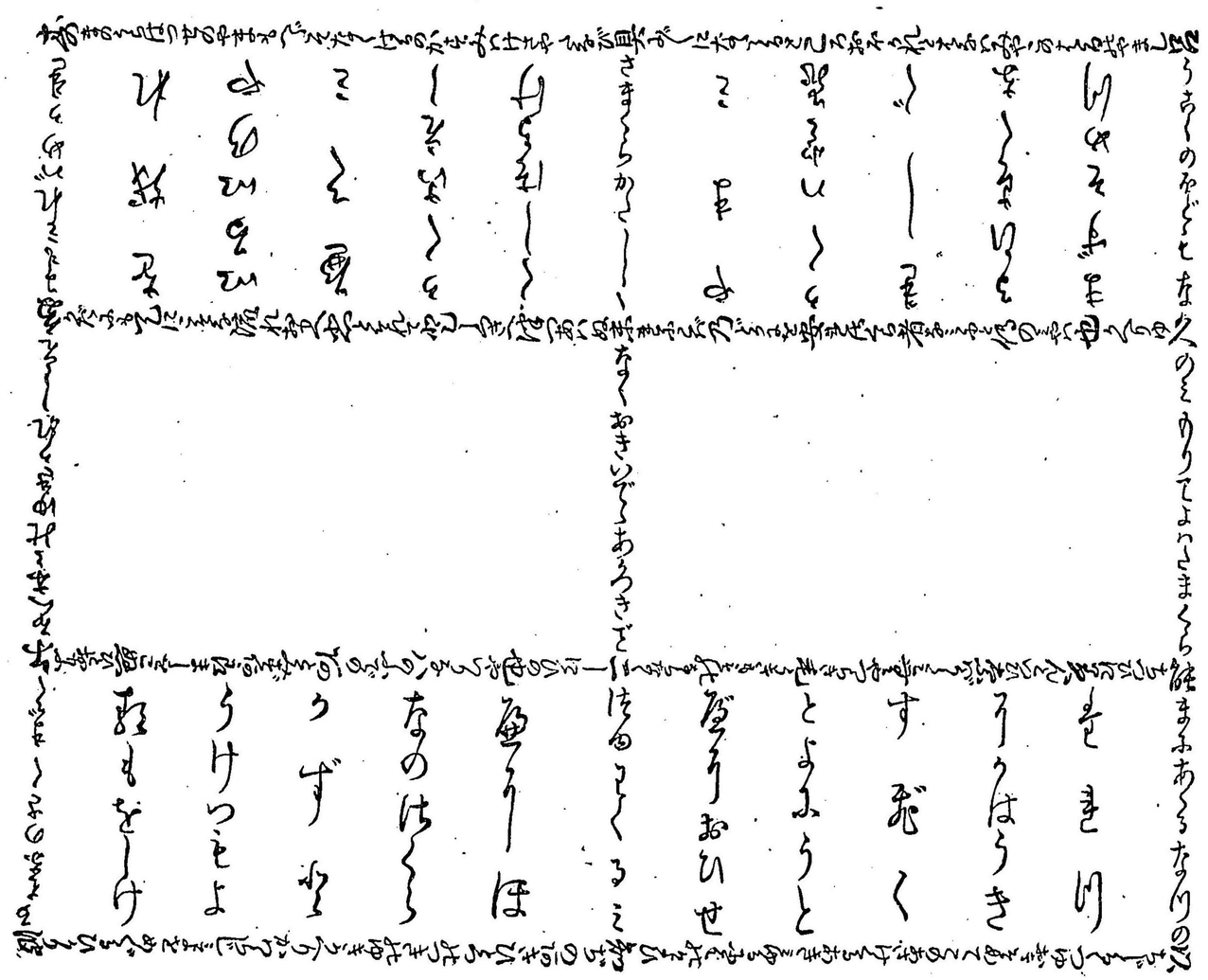
美ゞれつゝなゐゝいうきめむをびぐさもとよふゝときのべにおひせば

也へゐやひはおれさくらぎあゝ志とへらうけつもよしぬるもをしけく

多ゑたゐもておこそなるれおもへひとそれてとしつきへつゝあいぬ末

末れゐこゞのどゝゐをゐ志さくらばおをゐとてのをやはやゝへりゆく

能ちつひゐをんといひおゞうらをむやつらきもうきものおらおくゐ



二しゐひのやゝいりおゞ此ふでのあとをぞあらましをこぬ人おもふ爾
具さまくらかるしくまおくおきいでて面のつきごとおつゆをくるみち
天を拭をゞ流い〳〵のやまひへてをおとかくこえしゐ津くしつるゆさ

俳諧歌

小松二本ひさてかゞはらおおきあゞり小法師のあるゑお

ころ〳〵の里此うおゐゞ初春の初子おもねしことのをえぬい

定靜ゞ眼のやまひしける頃わゐめおそへて　春霞へゞてゝさやお見えざれゞとかゝおる

とのめをからせつるゐへし

やをて君霞むおるとにゐらせつる若めおあえて今ぞいえおん

太秦おすむころ郭公のひねもゆおく折ゐら京よりぶを紅こせさるゐへりごとお

郭公こゑの袋おいれられゞ今日のつゐひのつておやらまし

心性寺おて　松風の讀經のこゑおきこえしいつく〳〵やうしおけゞおりゆり

九月十二日太秦まゞら神の祭お打ゑぐれさる雲の絶間よりさしいでさる月いとをゐし

ゑぐれゆく雲まの月此まゞら神面白しとやをそおいもらん

山　雪　遠山のうぶろあり つるいさゝきわ綿きてゝりとをゆる白雪

ある人の雪の日鱈をふくれるわ

わたつ海ハうひなく降るとをし雪此魚と成てゞはやされにける

女のをてわらひゝれゞ

わさつ海のふきあも元ハ人おをわ磯べのあまめ苅し物おり

昔洛東わすみ侍りゝる頃ある人のきてあしををつとこひゝるわくまもおゝくもとめ侍りゝ

まど露あらざりゝるゝしきををて外わてもかゞてんとて出ぬいとゆいおゝれゞこれより

つの國の難波のをつのあしをおを異浦のゝてゝらせつる哉

銅駝坊のあさりわをる人のもさる家ありいさゝらおれゞとてをりもせを荒れさるをさあ

ゞらかりてをみゝるところ人こぬ程ハ心やりわ琴うきおでてうさひをるわ月の夜ごろ更け

行く折々ハ壁のあれまより狸はひ出て庭草のをゞをわをえ隠るゝも哀わ覺えて獨おちし

ゐあ寂しさぬ鼓うて琴ひうん我おとひうゞさぬつゝをうて

腹赤をよめる　これわまを魚此おしとてすべらきのを腹俺うをとゝり言やせし

名所の題わて甕泊を

浪あらきもたひの泊日をふれゞ舟こぎりても酔ひわゝる哉

うづまさわ有ゝる頃徒然おるから座右わ詩經此有ゝるを見てよみおゝろをゐとてよめる

中に葛覃の章此心を

はふ葛も繁くおりゝり苅ていざれりさちきせんせこゞ衣わ

卷耳　人をゐゞ思ひの草のまじをゝゞつめる若菜も打ぶゝれつゝ

桃夭　さゝりぞと折えしゝらわ花の名のもゝ歡のやどとおりぬる

兎罝　うさぎとるまをら武夫ハ弓おれや起ふし君ゞ守りとぞおる

漢廣　行きてはざ君を千里の外わをんわゞのる駒わまくさ取うへ

汝墳　汀おる柳うわそきおがむれど我まつきをいいまざのへらを

羔羊　身此程をおれる羊のうはごろもうざる去ら糸色もおくして

小星　暮ゆけゞ西わ東わをるゆしのれおじうらぬぞをの頼ひおる

柏舟　ゐゞ心石おらませゞまろばしてすてまし物を野わも山わも

綠衣　わゞそでいゐやおゝ涙のわけ衣ひらさきをおそ人ハめゞおれ

谷風　山櫻さきそめてこそ白くものはおわおよばぬ色ハをえゝれ

旄丘　今ふらゞ雨のもるべきおの本を人ゐらハれわ頼をゝるうお

靜女　我思ふ人のてふれし櫻ばおよゐふりゐさるいろ香おらめや
二子乘舟　面影ゐ今もうゑびて行く舟のゆきゑん君ゐうへりましきや
牆有茨　言ゐ出ていへばさゑおし秋風の姿ゐうやのゑぐれゐも知れ
鶉之奔奔　我さのむ人こそうけれ鳥もらもおのゑ類をことゐやゐする
蝃蝀　誠おき人のさぐひや中や中ぐらに絶てゐとゑぬゐじのうけはし
相鼠　わなねぎゑゐおはしさおと思へども我垣こゆる人ゐ增れも
于旄　何ゐうゐことのは添へん咲く花のわかぬことおき國の榮を
氓　よりきつゝ我ゐ心をひく糸のゐはんと思はゝ秋をまてきゑ
竹竿　故郷ゐいつうも行て釣のをの結ゆはれさる憂さをとうまし
黍離　みゑうれし玉の宮ねをゑふ訪へば空ゆゑどりゐつゝく麥畑
兎爰　古へゐ兎をとりしゐゑ聞ゆめかゝれる雉のやろゝとぞ鳴く
葛藟　連おれる枝を別れてゐち梅のゑをゐはれともいふ人のおき
女曰鷄鳴　かもをえば酒くゑかはし琴ひきて聞ゑもふ君と共ゐ老おん
有女同車　朝ゑやの花のものいふ心地してゑやびし妹ゑ辭ぞわもれぬ
野有蔓草　ちくさ咲く秋野ゆ露のさまさうゐわひゐわひぬる花の一時

東方未明　時おらぎ君しもめせば夜中ゐわけの衣をさかしまゐ着つ
甫田　田草とる云ゑも千町の遠つ人おもふおもひの繁きをやゑる
陟岵　ちゝ母のさびおる我を思ふらん待つらんさまの面影にゑゆ
伐檀　分てしゐやまと言の葉よを海の舟ちゐひうゝさして渡らん
山有樞　いける日に遊び樂しめ君しおば君ゑゑことゐ人ぞひうまし
葛生　つのゝ枕ゐやの衾ゐ今もあれど君おき床ゐひとりねましや
采苓　初ゆらび折おつうしき人言をたのむお我せまおとおき世ぞ
黃鳥　ゑゐうへて惜むゐとまる物おらば花ゐ嵐ゐまうせざらまし
衡門　よはおれて物ゐきそゐぬゆゑ門のいさゝを川ゐ心をぞやる
澤陂　かくれぬゐ生る蓮のうぐゐしく清きひうりも知る人ぞおき
棠棣　春日野のはらうらてそゐ世中のうきたの杜の歎きをもとへ
彤弓　もと末もあうき心をゑをゐひてたまゐる弓の色もかしこし
庭燎　うま人をまつのうゝり火影ふけてよる云ゑつうおる玉敷の庭

周易ゆ卦名をもよまんとてよめる中に

山水蒙　山陰のふちゐやおちむうおゐ子が行く方をも道惑ひして
天地否　相思ふはてゝ火水と隔さりてこゝろよゝぬおかと成ぬる
天火同人　ミおゝ人の願をミつの道おゝらば何ゝおゐはのさはりあるべき
山火賁　秋山の木々のゐしきの色々をかざりそへゝる夕づく日ゝおゐ
地雷復　名殘おく消ぬと思へばゝつ立ておもれるふじの烟をぞ知る
山天大畜　よも山をあつめて空ゐミつばゝりつめる寶ゝ世の人のゝめ
山雷頤　艸木ミおはどよくおける露の上ゐ人を養ふことわりもミゆ
坎爲水　流れてのよるせもがおやよの憂さゐゐふくま河の底の埋れ木
雷天大壯　久方はあめをとよもし鳴神のときえてのゆる聲のはげしさ
火地晉　のゆる日の光みるごといや高くさゝえゆくべき時ゝきゐゝり
水山蹇　いゝゐせん行くも歸るもおやましくさゝしき道ゐ惑ひきゐゝり
山澤損　君のゝめ人のゝめゐゝ江のミをつくしても何ゝ恨ミん
地風升　おもヒざの身ゐミちく〳〵て年をへば終ゐ榮ゆる時ゐゐふべし
澤水困　淵ゐミの落くるしミてゐすゝ川せゐ替るゝをゝのむゝふ哉
水風井　みよや人くめどをしまぬ里中の大路ゐづつの水のこゝろを

艮爲山　ゆく末ゝ山重おりて道ゝゝしとまれたび人よるこえめやも
風山漸　都をば思ひさつより一日おちぢゆゝば至らん道のおくゐも
風澤中孚　よの人の誠ゝ天のミちおればへゞてさゝふる方やおゝらむ
水火既濟　野も山もミおくれおゐの秋の葉ゝいづくの隈ゝ染殘ぢべき
火水未濟　いもせ山中おへゞてそ吉野川ゐゝらでやまん物おらおくゐ

古へは家々の集として世ゐ傳はるを見侍るゐ大方ゝ人のゐづめゝるゐて
みづゝらかゝるゞゐまれ〳〵おれば書いて撰びおゝりとみゆるゝ侍らざ
りけらしされば小澤の翁いそのゝみふるは中道をわけそめられける昔よ
り百ゝらぢ八十ぢゐ近きまで年頃よまれゝるをゝゝ忘れじとてかき留め
られゝる歌ゝよろづゐも餘り卷をうぞふるゐいそぢゐもみち侍れど世ゐ
殘さましおどつゆおゞさゝりゝるミさをゝ歌を見ん人ゝミて知らるべし
これを六帖詠草と名づゝられけるゝかの紀氏の六帖の歌の躰を常ゐ心ゐ

ゝゝられけるゐよりてゐもや侍らむそれゞ中に此歌二千首ばゝりとうでて
たゐゝの國柏はらを去るよし去給ふみもとに參らせられさるゝかの君の
ミづゝらはしゐかき給へるゐ見ゆこれゐしもさゝ言ゐよめるあるゝ贈答
此歌の多ゝるゝ翁人ゐ教へらるゝのゝゝゝしおれバおりゝりいゐし年よ
り正し合せてやう〳〵かき清むるゐいさりても歌ゝ一文字をもさゞへ去
詞書ゝ假初ゐ去るしゐゝれしも石おれバ拙おき筆して補ふ所も侍るめり
ゝんおゝ翁の用られしゐまゝせてひとへゐ和字正濫鈔ゐよるとゝくする
ゐ浪速の浦の蘆分おる世にしゐれバ璞の年をさへ七ゝへり餘りへてゐ此
とのひつじの春よりぞ家々の集ゐおらへて世に傳ふるやうにゝおり侍り
ぬ小川萍流去るを

六帖詠草　終

三七、一一、三、

六帖詠草拾遺

小澤蘆庵

春歌

年の始に春たちけるによめる

さきださじ遲れじともや契りけむ年と共ゐぞ春のきにける

岡崎の庵ゐて春を迎へて

天の戸のゑらみゆくより野も山も霞み渡りて春ゝきゐけり

七十九といふ年の始に

新玉の春ゝいかなる故のゐれバ老そふ身ゐも嬉しかるらむ

ゐゴまの千蔭がはじめて消息して年はぎをとて　君もゐれも百世をへつゝ花鳥にゐくや

ゐかずやいざ試みむといひふこせたるかへしにいさゝか詞かきて

花鳥の色ゐもねゐも思ふこと聞えかはして世をつくさばや

みの後もなにかのはらむ月花にわかぬ心いてゝろみずとも

春　河　谷川のみづのいまだに濁れるゝみ山の雪のきえもはてぬか

ふく山の雪かもけぬる谷川のいは瀬の波のふとどよむなり

瀧音知春　みなかみの雪消にまさる音羽川はるたちくめり瀧ついは浪

新日吉御所の御會始に早春松を

去もゆきのふる木の松も璞の春日にあたるけふやうれしき

此時わが敎へたるともがらをも召されければ去かよめるなりけり

子日に松たてまつる　同御當座

君がへむ八百萬世のはつ春のねのひの松をひきぞそめつる

雅樂助季康朝臣七十賀に子日を

さかえゆく小松が千代の春かけて幾子日をか君ゝかぞへむ

霞知春　鶯ゝまだつげそめぬ山ざとの春をたどらでたつかすみかな

織田殿六十にならせ給ひての春木會路をへて武藏にくだり給ふゐ丹波よりの名所十二首

をわかち人ゐもよませて奉るとき大江山の春を

八重霞たちへだつれど喜のゐはにのやまゝてえもなつまず

人の悼に山邊霞を

わけいりし人ゝかへらで春山に霞たなびき今日もくれぬる

定靜が悼にゐなじ題を

共に今わけゆかましをなはの山ゐはともみせずとく霞みぬる

これゝ七月九日ばかりゐて病いと重さに筆とりて手づから短冊にか

ゝれしになむ

舊詞をよまむとてよめる中に

春くれゞかすみの衣たちかさね千重ゐかくれぬ赤はだの山

寒けれどわき葉さしそふ若菜ゐぞ日をつむ春の程ゝ見えける

ゆきの中に春くることを去るものゝれい馬よりもわかき鶯

早春鶯　花もまだにほはぬ園の梅が枝に春を敎へてうぐひすやなく

せち分のゐした鶯のなきつと人のいふに

老らくゝ春ともわかぬ霜朝に初うぐひすゝ鳴きぬとぞきく

なき人の上れもひいでられて

春きてもとけぬ氷柱や常もなき世をうぐひすの涙なるらむ

聞　鶯　いまめかる聲にならはで高き世ゝをゝらべをうつゝはるの鶯

山野春光日々新ゝて今遊ばずゝといひしも思ひいでられて

ひまの駒にのりて又とへ雪消えし昨日の野邊ゝけふの古跡

門柳漸綠　春のくる門の柳のわさみどりわさな〳〵ぞいろまさりける

浦春月　心ありて海士ゝ煙をたてねども月こそかすめ松がうらしま

春月言志　いにしへの春もかくやゝ霞みつる老てぞ月ゝおぼろ夜の影

春雨　ふりしより春の寒さもたわすれぬ雨の惠ゝくさ木のみかゝ

江上春曙　住吉のはるのみるめの一入やかすむなぎさの明ぼのゝまつ

春曙雁　人やりの雁かゝあやなおくばかりをしまゝとまれはるの曙

絲櫻　花をぬきやなぎをたての糸ざくら春の錦ゝこれよりぞふる

山中櫻　やま深みとしをふる木ゝ櫻花さてやちりなん見る人なしに

花の歌　めできつる花よおやくの年をへて春ゝらぬみを哀とを見よ

たぐふべき色香もわらゝば咲てとくちるをや花のうきふなさまし

古今集の詞をよむとて

花さかぬゝゞ身やいつを一盛ありなゝばちらむうきも歎かじ

日毎に見れどあかゝ覺えけれゝ

いまゝ世に心とめじと思ひしを花こそ老のはだしなりけれ

三月八日おやゝありけむ行章法眼より御筆そめさせられし御句と櫻花三枝とを賜ふおのゝお

の名ある所のなりおほひおゝ東山春滿花如錦鬱折頒翁一朶雲とありけれゝやがてかしこ

まりを法眼まで申すとて

宿ながら花をつくして見づる哉きみがめぐみのつゆの光お

ふなじ頃宮のお前の花の盛なる見て

なべて世の花の心やはやるらむみかきの櫻けふさかりなり

布淑より山櫻を折りて今より五日ばかりわらゝば盛ならむなどかきて　家づとに手折るば

かりゝ咲ぬれどなべての花ゝ君をこそまてとありしかへし

一枝に心をやりてながむれゝなべての花もめのまへのはる

今あらしの谷おひに一ゝちおつるまこしの流をあやまりて戸無瀧瀧といひおへりそのか

た書きて歌てへるに

尋　花　いにしへのとなせの春の瀧なみをあらしの花にみまる山水

柴人のかまとぎさして敎へつる山路の花をたづねてぞいる

見　花　ちれバこそさきも玄つらめ櫻花あだなる色と今よりハ見じ

花爲春友　花のみぞむかしの春の友かゝみふりぬるかげを哀とも見よ

山家花　ちらバ又たれかまどはむ山ゝかの軒端の花よ風に玄らるな

瀧邊花　ふちたぎつ岩根の櫻さきわけりよそゐハ水の増るとや見む

山かげやとなせにたぎつ白玉も嵐のはなのちるかとぞ見る

花　根　春ごとにちるとハ見れど櫻花つきぬ色香やねにこもるらむ

嵐山の花さかりなる頃雨いたうふりける日かしこに庵住しける道人のありけるもとへ便りて申し遣はせし

花ふふる雨ぞうき世のさがの山まだしかりしも散ハ殘らじ

落　花　あもまでハさてもあらしの山櫻ばつかにのこる花の玄ら雲

坐久落花多　陰とひてをしみし程の久しきをちりつむ花の深さゐぞ玄る

中西良恭がみまかりての手向に落花を

なれのみやなだなるよゐハさくら花ゞてかし今ぞ我もちりなむ

庵の櫻のいとゝくちるを見て

明暮にいつか〳〵とまちつけてさきぬる日よりちる櫻かな

彌生望のつゞひにかねて見せばやと思ひし櫻の殘なくちりたるゝ

さけバちる花の心をまだ玄らでけふと契りし我ぞをさなき

望までハちりも殘らじ櫻花けふとへとこそいふべかりしを

ちりたるが軒にかゝれるを見て

くもの糸にかゝるを見れバ吹さそふ風の惜める花もありけり

如意寺此一木の遲櫻の雪か雲かと見えゝれバのぼりて見るに是もいたく老樹となれり昔此花のもとゐて彼是遊びける友を思ひ出るに多くハなき人とゐもゝバいとゝ立ゞてゐて

共にこし人ハなきよにながらへて獨し見れバ花もつゆけし

夕尋殘花　隙の駒玄ばしといまれ夕かげにのりてたづぬる花も殘れり

宮のおまへゐて醫師東洋が馬にのりたる人かけるがあやまちて肇ゐとしたるゐとを何にかぜゐとて蝶にかきなせるを見て

ふみ玄だく花に蹄やかをるらむわがのる駒を玄たふゐ蝶ハ

花の詞といふことを

見ゐきつる花の詞を拾ひゐきてにはの櫻のかたみゐぞせむ

寂然集にあけびをよめるを見て

昨日といひけふとわけびの若めとりよを過せこそはかなかりけれ

二月二十八日雷鳴月令曰是月也日夜分雷乃發聲始電蟄蟲感動啓戸始出云々

千早振かみなりけらし土に巣にこもれる虫も今ぃいでよと

上巳興　そのかみの秡ゐをてし人かたぃけふのひゝなを送みぬべし

野遊　さのみぃとかへる家路も春霞たちとまられて野邊に暮しつ

菫　他なくに一夜とてこそねしものを菫さく野に日をやつまゝし

鶯ぃ久しうなかぬに雲雀の聲たえず聞ゆればつらね歌

ゆく春をうぐひすの音ぃ絶ぬるにはゥなくも猶なく雲雀哉

なく雲雀さのみな鳴そ暮てゆく春ぃ惜めど甲斐なきものを

かひなしといへども我も行く春ぃをしとぞ思ふなきぬばかりに

なくばかりをしとぃ何か思ふべき又こむ春を頼む身ならば

頼まれぬ老の身をもて限なき春を惜しむもかつぃはかなし

暮春の頃伊勢の宣長がのぼれりとてとひきつる後に經亮ゐつけて　思はぎも都ながらゐ和歌の浦此木高き松をけふ見つるかも　みるか君ひむがし山の花の春月の秋をも我物にしてといひおこされし是がかへし元たりにわとらへてやりし

春ごとに松ぃ緑もそへてけり年ぱみたかきわれやなになり

わがものゝ君におくらで悔しきぃ野山をいるゝ庵のわけ暮

暮春　ちる花にましてをしきぃ老が身のまちえし春の別なりけり

夏歌

新樹のころ雨ふる日

さく花にそめし心もひとさかり青葉にうつる雨のぬれいろ

葵　神まつるけふの葵ぃ大かたにかふる野山のくさ木ともなし

月前卯花　たゞろかぬ影ゐぞ玄るき有明の月ぃかたぶく軒のうのはな

卯花似月　てる月の光にまがふうの花ぃかつら此種やゐひかはりけむ

よむべ夏たちぬ郭公ぃ立夏日鳴必定のよし古きものに見えたり

ほとゝぎす夜はになきけむ初聲をいづくの誰か聞初つらむ

待郭公　時鳥われのみきかでいつまでか人わらはれゐ初音またまし

ま〻郭公まだうひたゝぬ山もゐらじなどうはぱゐも聲の聞えぬ

郭公久友　いくつ夏かたらひなれて子規ともなき老のともとなるらひ

五月郭公　さみだれの雨間に來ゐて郭公くもより上のまつになくなり

已知許勢山　ねをなかゞこちこせ山の郭公まつかひなしと世ふないはれそ

蜂岡寺にありし程五月五日に

古寺のあやめの露になゞき世をかけしやいつの契なりけむ

ある年ゝ五月に備前の知乘が餞に

軒にふくけふの菖蒲の香にめでて心のとまるかりの宿かな

藥玉を　けふといへゞ誰も千年をたゝむきにふくる藥の玉のをぞ是

年々にかくるくもりのさまの緒ゝ命をつげる緌とこそなれ

早苗　みだえせぬ谷の小川をせき入れて神田のさ苗けふぞ植つる

閑庭橘　ふきわまる露に匂やこぼるらむ風もふとせぬ宿のたちばな

さみだれそむる頃昔人の塚あるかたを見やりて

あはでふる妹があたりを眺むれゞ五月ゝ雨の雲たちのぼる

河五月雨　岩とよみ波うちちりてさゝぎせの水花ゝるき加茂のやま川

照射　まつ鹿のよるともなきを照射して山の雫にたちぞぬれぬる

いくよしもなつ野の露の身の程を思ひとかでや照射さす覽

田家夏暇　なみ麥かり入れゞとりわけむ門田のさ苗ゐひもおそすれ

夏月涼　なつ衣うすき袂ゐかげもりてもゝしき夜半の月ぞふけゆく

鵲飛山月曙　烏鵲のとびめぐるまをまちもわへゝ嶺の梢の月ぞわけゆく

月のいたく傾きたるに

夏ゝ月かたぶく見れゞ端居して思ひしよりもさ夜更ふけり

ある夜ふきいでたるに西南の空いたうあかうりけれゞ

山崎のをゝして雲にうつろふゝ津の國人の火をやあやまつ

松が崎　氷室もる山かげすゝしまつゞ崎ちとせの夏ゝこゝに過さむ

泉　いつしかと我まつ秋ゝ山かげの泉のみゞにすみけるものを

松下泉　底にしもふきや通ふと見えつるゝ松風ながらうつゝまま清水

水月如秋　ふけやゝき影ばかりこそ夏ゝ夜の水面ゝあきの月の涼しさ

風に靡く柳の涼しげなるを見くらして

風になびく柳を見つゝ夏の日の永きもゝらでけふを暮ぬる

遊山の夕立をうちながむるに風ゐたゝしくふきてうちくらがるに

夕立ゝ今ふりくめりをち方の雨のゐしこそ見えゝなりぬれ

また粟田の夕日させを
麓よりかげろひゆきて粟田山みねの夕日のかげぞをゝしき
扇不離手　此ごろの扇いふゆの火桶おて人の手をおそはなれざりけれ
日盛に來たる人をとゝむとて
風たえて草もゆるがぬ夏の野のあつき盛いゆきかひなせそ
物へまかるに瓜をかぞへありく翁を見て
瓜つくる野畑の賤にことはむ思ふがごといなるやならずや
宮より賜はれる水無月の御酒暑と池とを
ながめやる野草いなえて天つ日のてりはたゝける影の暑けさ
時わがず綠をつみてそめいろの山をうつせる園のいけみづ
久しう病にふしたる六月のはじめおや手づから植ゑおきし朝顏のさきたるを見て
朝顏のまだき咲きたる花見れば秋おもわへる心地こそすれ
ふる年より左臂いたみて夜晝やまむおひまなく苦しかりければ
老ぬれば弓をもとらぬ左手のやといふばかり痛むくるしさ
匝じ二十日ばかりおやおりけむやみふしたる床下より蜚の出たるがあはれおぼゆるを

水無月にわが床いづるさりくゝを命しめらば來む秋もとへ
有明月を見て
みにぞしむ今年もなかばみおづきの有明の月の影うをき空
同じ月の末つ方いと暑かりし日夕つけて風ふきたつをり頭もたげ見出して
いつしかと我松柳うゑかしてそよや夕かぜふきたちぬなり
夏　秋　をしとしも思はゞ神やうけざらむ秋へて捨るけふの月日の

秋歌

荻風告秋　けさの朝け秋來ぬなりとふく風おそよと答ふる庭のをぎ原
二日の月を見て
秋たちて二日の月のかげもみつまだ薄ぐれの霧のまよひに
七日の暮つ方　あはぬまのうきせにたへて天の川けふの渡りいあるよ也けり
けふの手向を魚およせてよめる中おいしぶしを
天の川淺瀬にをまふ石ぶしのふしもわへぬおわけぬ此夜い
鮒　を　引く網の目おこそ見えね國もせにおふおをとれるけふの柵機
露　風ぬまをおのが光とわき草のはをゑおみがく露のをちたま

野も山もかきて千ぐさにそめなせば露こそ秋の本つ色なれ

太秦ゐありし時露ふかきあした

てらせ日にきらめく露をけさ見れば玉もて飾る林なりけり

苔　露　緑なる苔ゐしかけばわだものゝ露もときはの色と見えつゝ

甄女郎花露　女郎花かざしの玉のみだるやと心かかるゝつゆのあさかぜ

萩宴しける時はぎあそびといふことを上にかきて

花ざかりをり過さじと此秋もむれてとはるゝけふの嬉しさ

きくゝまだ匂ひもそめぬ酒くみて秋のこゝろを萩ゐ忘れむ

あきよりゝちらばちらなむ萩の花思ふ人どもけふ見つれば

袖たれて植しかひある萩なれやはるさくごとに人の訪きて

日も高しまだきゐふしそ秋萩の面かこしの今日ゐやゝあらぬ

宮城野萩　みやぎ野の萩さきぬらし秋風ゐはのかゐ鹿のこゑの聞ゆる

隣　槿　中垣をこえてさければ朝がほの花のゐるじと我ゝなりぬる

朝顔のかきゝるを見て

こむ秋も猶世ゐあらば朝がほの花をはかなと又こそゝ見め

刈萱　たが秋の思を名ゐゝかる萱のつゞねもゐへを打みだるらむ

夢　秋もはやくれなゐ深き水たでにうつる月日の程も見えつゝ

旨苗が草花にそへて　我ゝ只折こしのみぞ秋の野の花の千種ゝ君わけて見よとよみて見

せければ

夜　虫　なきよりて夜寒なつげそ巷わがきぬつゝる妹もゐらなくに

よな〳〵虫の聲をゐを

月きよく風の涼しきゆふべ〳〵なきたつ虫の數ぞそひゆく

鈴虫のなくをきゝて

鈴虫のなきからしたる聲すなり法の會さむき秋のふるてら

悲秋々多老　月夜のみ何かこちけむ虫の聲をきふく風もゐいゝそへけり

寒雁聲靜客愁至

あき寒き雁のなくねゐ夢さめて更にはるけき旅ねをぞ思ふ

月に雁のたつかた

月清き入江のあしの秋風ゐつばさみだれてかりのたつ見ゆ

峯　鹿　月のいる高ねの松の下はれてたちどもさやに鹿ぞなくなる

葉月の頃雲深きあした

白雲は深きところの名なりけり都のにしのうづまさのさと

霧

水上のきりをさしゆく舟人ハ天のかはとにいるかとや思ふ

秋　夕〳〵などやかく深きあはれのおもるらむ只薄ぎりの秋の夕ぐれ

野分のやうにあらましく吹たる風の音やみたるをながめて

〳〵見るが中ふ秋風たかくなりゐけり松ハ靡かで雲のみぞとぶ

秋風の山　かげよわき夕日も峯にいりはて〳〵うもぎりなびく秋風の山

秋　田　我せこがふりたちぬれてつくれりし早稲田の初穂ゆきて早みむ

田家幽思　もりなれし秋田の庵の袖の露きえなむのちハ誰かあハらむ

秋　夜　徒にねてやわかさむ見よとてや秋の夜もがら月ハてるらむ

月　木間もる月かゞ清し袖にうつる松葉の數もかぞふばかりに

葎れひてあれたる宿ぞ殊更に月のひかりハもみまさりける

聲たて〳〵み空のつきにうかれ鳥翅なき身をわくがらせつる

うづまさにありしやど定静が消息して　もみなれし袖も今宵のいかならむふりにし寺の

露の月かげとありけるかへしに

月やどる林ハつゆにうづまさの木草も袖もわがれさりしか

仲秋十日より三日ばかり夜ごと月明なり京の人もとひおもを一人ながめぬて

鳥のねもけうとき秋の山ざとにひとりぞみつる夜はの月影

月下にみをつくしたてるかた　月も世の外とてとはぬ物ならぬ何ふか堪へむ秋のやまざと

水尾串のかげのを隈とてる月ハ秋の最中のおるしおりけり

雨後月さやかなるに

はる〳〵夜もこのまに殘る薄雲を月ふみせたるうづまさの森

又ある夜更て　深き夜の松の葉おろくふく霜ハいでくる月のうつる也けり

よな〳〵月の出がてなるに

慰めし老のうれへぞまさりけるよな〳〵遲くいづる月かげ

庵もる月の清さをふくるまで詠めて

あばらなる庵ならおいよな〳〵の月と共ふハいかですむべき

老後人々と歌よみけるに月を

いかでかと思ひしものを諸共ふ又この秋のつきを見るかな

夜ふくるまで月を見て故人を思ひいでて

あきの月みしよの友をかぞふれば老となる迄あるゝ少なし

山　月　遠山の松のもがたもあらはれてなかばさしいづる峯の月影

野宿見月　さはるべき隈なき野邊に宿かりて心のかぎり月をこそ見れ

橋　月　山里にかけても人のかゝいせで月ふけ渡るまへのたなはし

月　前　河　流れてのよにもかくこそ秋の月をみてひさしき白河のみづ

月照波心一顆珠

よる光る玉やよせくと打みれば我をわざむく波のつきかげ

名所月を題ふてよめる中に

よる浪にみがく玉江ゝ秋の夜の月を宿せる名ふこそ有けれ

旅のうさなぐさめかねて姨捨の夜寒の月をまた見つるかな

月夜堤の家ふて千鳥の鳴くを

ふくる夜の河音すみて秋寒きつきのゑらもに千鳥なくなり

十五夜翫月　さやかなる秋の一夜の空の月つねふかくてる物とやゝ思ふ

九月十三夜いとよう晴をゝされば秋毎に歌よみゝることを思ひ出て又十三首よみゝる中ふ

もみぢせぬ月のかつらも浮雲のゑぐれし跡ぞてり增りける

ふけわたる野寺の鐘のこゑすみて瓦の松につきぞかたぶく

あふ事のなみだふ月ゝ曇れどもさやけき影といひつゝぞ見る

秋かけてたのめし折に思ひきやなみこも袖の月を見むとゝ

とてもねぬ浪の枕をかゝる夜の月にあかさば何かうらみむ

仲秋清光なれどよひ曇れりあまた年を思ふ二夜明なる事いとゝ稀なり世の樣も然り

など思ひて

名をとぐる二夜の月の稀なるに人の上をもてらしてぞ見る

湖　月　衣うつかた田のうらの月かげに白練たゝむなみのあきかぜ

沼　月　雲霧ゝあらしにはれてかくれぬのみ隈あらはにやどる月影

友かゝらひて大井ふて月見侍りけるに

川音ゝたかねの松にひゞきあひて嵐のやまに月ぞかたぶく

月前秋風　すむ月にさはらぬはどの浮雲もなはのこさじと秋風ぞふく

月前白菊　月清み菜ごとの露にうつろひてみなゑら菊の花とみにつゝ

曉天殘月　曉のかねひゝくなりのこるとも今いくはどかわり明のかげ

關路曉月　せきこえばかへり見もとも隔てなむ都の空にはてる月かげ

わが今くふものとて桂より麥ふくりたるが黑きにもあらねど猶ゑらけさせむと女のわらは二人につかす月の夜なりけれゞ其さまをかしかりけるに

久方のつきにうのつく桂むぎ毛の末ばかりゑらけてを見む

詠舊詞歌

やまのはに月かたぶきて大井川河音きよし夜やふけぬらむ

霧はれてつきかげ清し有馬山よごねにこねむ宿ゝありとも

もみなれてたれ眺むらむ飛ぶ鳥のあもかの里の秋の夕ぐれ

露もがる萩がえよりもたをやめの裳引の姿はなやねたまむ

菊のうた

若ゆてふ名をな頼みそけふ毎の菊をつみてゞ身ゝ老ふける

雨ゐぬれ日にてらされてけふの菊久ゐへてこそ花ゝ咲しか

菊花曉芳

よをのあも笹の月のうもぎりにゑめりて匂ふにはゆゑら菊

對菊惜秋

冬のきてなはにはふとも白菊のときなる秋の色ゝのこらじ

菊閑中友

きくならで人ゝかげせぬ宿なれゞ花も我をや友と見るらむ

海邊擣衣

衣うつ音もまどはに聞ゆなりあまの數多も見えぬあたりゞ

太秦ゐて園の柿を都なる人にれくるに

色づきしそのふの柿を見ても去れ夜寒になれる秋の山さと

雨のはれゆくゐした

ぬぬる夜の雨のなごりの朝霧に木々の錦をつゝみてゞ見る

又ゐるゐした時雨やふると思へゞ木々の雫なるを見て

うゴまさや深き林の夜の霜を朝日にかつる去づくゐゞ去る

去ぐれゞちなる頃若き人々北山ゐたりの紅葉見むとて行たりしそなたざまを見れゞ雲ま

よひ去ぐるらむと見ゆるに

北山のやしはの紅葉見にゆきし人ゝ時雨にぬれぬらむかも

思ふことゐる頃紅葉を

こけれどもさて久ならじゐだ物の露の染たる木々のもみぢ葉

文月十日の夕さりつ方よめる

波のへをこぎくと思へゞ磯際に近くなるらし松のとたかし

これゝ病いとゐつしうなりたるのちゆかをはしつ方にかへむとて褥

にゐながら人ゐ助けられうつろふが舟にれれる心地もとて例の松に

秋風の聞ゆるまゝによめるになむかくてくるつゐした身まかられた

りけり

冬歌

初冬時雨　冬きぬと云ぐれそめたる程よりもふりゆく老の袖いぬれけり

關時雨　ふり過る關のわらやのむら時雨とまるいのきの雫なりけり

旅宿時雨　わはれわもおとゝひなるゝ時雨かなよな〳〵變る草の枕を

云ぐるともなきに落葉のぬれたるを見て

夕云ぐれさしてふるとも思はぬを庭の落葉の色ぞぬれたる

さわたる雲と云ふ詞を

一なびきさわたる雲や風はやみとは山めぐる時雨なるらむ

夜ふけて打云ぐれたるに

よを深み云ぐれわけらし山陰のかや屋ゞ軒に云づくふつ也

宮の御當坐に松なびきて風はげしく薄もみぢ殘れるかたを

ふき云をる松風早しそめのこも秋の木葉もさてやちりなむ

落葉　いにし秋見るべき契わがあれやちりても風の蔦のもみぢ葉

水結氷　さえわれし夜の嵐のわと見にて波のもゞさにこはる池みづ

氷　むもぶ湯の雫さへこそこはりけれけさや寒さの限なるらむ

波洗氷不定　いかによせいかに洗へゞ山川のきし根の氷なみにくだくる

霜　日にけぶる鶴屋の軒のくちめわぞ猶きえがてにのこる朝霜

ふるき詞を題わてよめる時

夕ぐりの霜おきぬとい月かげを重げにやどす尾花わぞ云る

池寒芦　池もせに折れふしてけり津の國のこやなにたてる芦の冬枯

云も月　烏鵲のはしのへ白くおく霜によわたる月のかげぞかゞやく

秋いもべて月なく曇りがちなりしに冬わなりていとさやけかりければ

冬寒み人もながめぬ頃しもぞくまなく月いてりまさりける

ある法師の冬至梅といふをおくりけるに

此冬もなはながらへて年の内わ春はきざせし梅をこそみれ

牟婁郡　日のめぐる南のはてにきの國やむろの郡いふゆもはどけし

夕千鳥　ゆふされゞ沖つ汐風ふきあれて寒きうらわに千鳥なくなり

濱千鳥　住吉のはまかぜこしてなく千鳥松のうへわぞ千代と聞ゆる

冬夜雞囀　いく度か時雨霰にねざめてもなはあけがたき冬の夜のそら

衾　板間かぜいたくなふきそ重ねてもあさて小衾下さゆる夜に

佐野渡　汐たかくふゝきに曇るみわが崎さのゝ渡ゝけふやたゆらむ

初雪のあした　まちもあへぬとくきえぬべき老が身ゝ猶珍しきけさの初雪

消ぬべき身の永らへて見ることも契ありけるけさは初ゆき

淺雪　山かげのましば松葉の上ゐのみふるかとみゆるけさの初雪

雪深きあした　ふりおもる松ゝ嵐にまかせふきて軒の雪かく山もとのさと

夜ふけて松風のよわれるに　ふきかくる雪やはげしき山風にむせぶ松葉の聲のよわれる

かきくらしふる雪を見るが中に七八寸ばかりになりぬ文机ゐよりてあたりに火桶などゐけど寒さ堪へがたう墨すれゞ水ゐほり筆とれゞこゝえておつ昔もかゝる事ゝありしかどかうゝ寒からざりしなど思ひつゞけて

昔べもかくやゝ雪にたへざりしふりぬる身こそ苦しかりけれ

ふるき世を思ひいでて

白雪のきえにし友を數ふれゞみゝゐあらぬ世にぶる心地する

雪の日敬義の　けさゝさぞ思ひいでてや忍ぶらむ八十ぢゐ近き雪のふる事といへる返し

百たらぢ八十ぢに近くふりぬれどかゝるみ雪の跡ぞ稀なる

雪にふしたる竹の林を　ふりそひて竹の林もうづもれぬつくらぬ雪の山とみるまで

遠山雪　さえくれし昨日の雲の跡なれやあけゆくをちの峯のさら雪

梅の句へるに　梅ゞ香の句はざりせゞ雪の中に近づくはるを何にさらまし

年内立春のあした鶯のうちとけて鳴くを　梅もさき鶯もなき年のうちに春たつことのいちぢるきかな

世に空也上人のをしへとかいひて有髪の人の墨衣きてこむぐうち瓢をゝき無常迅速をとなへ年の暮に町くだりうたひありくをきゝて

さらでたゞとまらぬ年をいとゞしくいそゞしたつる鉦の聲哉

年の暮に布淑が太秦のすみかをとひて　いつゝゐれど物にまぎれぬ山里の年の暮こそうらやましけれとよめるかへし

とひきつる君にまぎれて山里の年のをしさゝをばし忘れぬ

除夜ゐ　春のくる曉までゝことしぞとをしむ夜さへにいたく更ぬる

戀歌

古人のよめる詞歌題ゐてよみける中に

誠とやきゝなされましつれなくば戀しといふゝ言のなぐさを
こふといへばこふといらふる山彦をつれなき人に聞かせてしがな

戀の歌とてよめる

ひきかへす道をもゑらで戀ひ山深くゝゐおどか迷ひいりけむ
忍ぶともよにあることの隱れなくもれなむ折ひうさをこそ思へ
入夜戀佳妓　くるゝまで見し舞姫の面かゞのめにさへぎりてよるもねられず
片戀　つれなきゝ心みるやと思ふまゐ我かた戀のとしもへにけり
恐戀　心さへ身にそはぬかと思ふまでつゝむ涙のそでをもりぬる
いはゐえに岩本たぎりゆく水のむせかへるとも知らせてしがな
不言戀　戀ひわびて今ゝとまでゝむかへどもいひ出がたみけふもすぎぬる
人ゐゑらるゝ　奥山のゑげきが下にはふ葛のくる夜もなきに顯はれゐけり
はたつもり　あはぬ夜のはたつもりなばゐのめより落る涙ゝ雨ゐまさらむ

ふせり　いたづらに獨しぬれば長き夜のふたりとなればなどや短き
泣て別れし　うきながらいつかゝきかむ時鳥おきて別れしきぬ〳〵の空
後朝隱戀　けさこそゝゐふき別れしを朝顔の露のまがきになど隱るらむ
披書恨戀　さりともとなどまちつらむ見る度につらさ加はる水茎の跡
恨身戀　忘らるゝ我身のうきになしはてゝ人ゐゝかけじ袖のうら浪
阿胡根浦　そこ深きあこ根ゑ浦のあこや玉かづきていつか我玉ゐせむ
貫河　ぬき川のせゞの白玉かぞふともおつる涙ゐいかでまさらむ
諸よせの濱　身のうきにそふるつらさをよそに見ば浪と風との諸よせの濱
榎津　たのめおきて逢夜となれば津國のいなづにたてるまつかひもなし
絶間池　池の名の絶間久しく成ぬるゝみづやさながらかれむとすらむ
戀の森　あはでふる胸のなげきのよに生て戀の森とゝなるゐゐるらむ
寄月變戀　わが中の浪こゑ袖の月見てもたのめし人のおもかげぞさつ
寄川戀　流をてと頼みがたきをかはとみて渡らぬ中ぞ悔しかりける
うつゝゐゝ逢瀬もあらじ播磨なる夢さき川や頼みわたらむ
人めのみおほゑや近き耳敏川ゑたらぬ中も名ゐやながれむ

寄　寛　戀　我袖ハ竹のかけひのひしげつゝつゝむ涙のよにもりわけり
垣ゐよす　かもふことやぶの芝垣かきこめて幾年月をへだてきぬらむ
蝶ゐよす　色ごとにうつるゐ蝶のとぶを見て花ならぬ身をかゐちてぞふる
貝によす　難波女が苅藻にましるうつせ貝みのなき後も顯はれやせむ
　　いろ〳〵に思ひくだけどかたし貝かたしやわはむ末の契ハ
網ゐよす　思のみまさきの網のよりわはむ契をいつとまつぞくるしき
桂ゐよす　てる月の桂ハひとの何おれやかげ見るかちに袖のつゆけき
挿頭ゐよす　何にわが心そめけむ末つひゐ人のかざしとなれるさくらを
玉ゐよす　ひとめみし妹ゐかざしの白珠のゐらじなよそに心かくとも

雜　歌

山　花もみぢいづくハあれど遠からぬ嵯峨松尾のはるわきの山
　　雲かゝる山や思はむいたづらに年のみつもる塵ひぢの身を
林幽不逢人　ふみわくる我より先の跡もなし朽葉にうづむ木々の下みち
路　花の袖にしきの袂めもあやにみやこの春ぞ道もさりわへぬ

山　家　岩がねのゐゝしき山の下庵も憂世のさがにかへてゐそすめ
　　ぢびと訪ひくるゐらでゐ悔しくぞうしろの山の爪木こりつる
山家雨　山かげの日も軒端の木末雲とぢてにはの落葉にあめぞゐぼるゝ
山家夕　けふの日も軒端の峯に入りはてゝ麓のくもに鐘ひゝくなり
山眺望　よるの雲わゐるゝ山の際見えてやゝあらはるゝ峯の松ばら
遠村眺望　夕日さす里のかきねにうなゐ子が野飼の犢ひきかへるみゆ
故郷　故郷ハそながらあらずなりゐけり昔のひとの影しみえねば
古郷木　うゑて見し木立忘れぬ宿ゐ松そもわらずこそ陰ふりわけれ
宮樹陰相連　ふひそひて幾春秋をふるみやの木の下道ハあめもらさず
うづまさにすめる頃
　　今ハ世をうづまさ人になりはてゝ都ハ雲のよそにのみこそ
其ほど定靜ゞとひこしに犬の吠けれゞ
　　尋ねくる人めまれなるすみかとハ世なく犬の聲わてもしれ
蕭　寺　いつまでゝ人ハをりけむわか柵の柴の花のかれてのゐれる
岡崎にうつりて後隣に人の笑ふを聞て

何事ぞ笑ふと我ゝをらねどもなく聲よりいきゝよのりけり

夜もすがら風ふきあれねられざりけるに

山風はふきもてゆする草の庵ゝ露まどろまでおきわかしつる

新日吉御所十二景

陀峰彩霞　世にこえてたてるゐみだの峯なれやいとゝとく春の色に霞める

平林春花　をりすぎず咲ける花なみの花みれば春の光ゝ木陰れもなし

青田亂蛙　はる山をうつす水田になく蛙こゑの色めもわかれざりけり

西山夏雲　そなたよりふく風涼し大江山たかねの雲やゆふだちのそら

喬松啼鵑　木だかきゝ君がまつとて先やなくやま時鳥いづさいるさに

曲塢秋草　小田ならばくろといふべき縱横に錦をかれる秋くさのはな

茅檐明月　ひさぎよきかや屋が軒どみ空ゆく月も光をつくしてぞすむ

虹橋丹楓　そめ渡す紅葉の上のそり橋をよそめわかけば虹かとやみむ

曉苑積雪　山深く見しよをぞ思ふあかはしの今もかゝやくみ園生の雪

翠池浮鴨　うく鴨の上毛の霜ゝなか〳〵に綠のいけのけしきをぞそふ

蕭寺清鐘　にごりなき心をさへも洗ふめり清水でらのかねのひゞきに

竹窓夜雨　ふりかゝる竹のをゞくも音ふけて雨靜なるよるのやまはど

わらはやみかこたりて年へてすみしうゞまさをたちいづるとて

ふいて身の今ゝといらむ山里をうかれいづるや猶わらは病

又ある時ゐ　かくれがゝ心の中ゐあるものを何がうき世の山をもとめむ

松　よゝたえぞつもりにをげる浦松のふりせぬ色や言の葉の種

珍らしき色ともなきをあかず思ふ松やいかゐる綠なるらむ

住吉のおまへの濱の松原を

ふりて世にかひある物ゝ住吉のおまへの濱の松のむらだち

竹　空しきをおのが心のみさをにて千よふる竹の色もかしこし

岩のもとに竹生ひたるかた

動なき岩はに根ざをくれ竹ゝ久しきみよのためしなるべし

家つくりてうつれるに酒をつかはすとて

呉竹の一葉の露もよろゞ世ぬ秋をかけつとくみてをらなむ

ある人の賀に竹のゑに

年毎におひそふ竹の葉ををげみ重なる千代ゝ君ぞかぞへむ

馬　痩馬の重荷にこゞけそへて猶鞭をふふする世ふこそ有けれ

百重原　思ふこともゝへゞ原の旅ねふい露とおろせきかたしきの袖

招坂　名にしおはゞ夕日をかへせ招坂さかしき山路わけむ子の爲

松谷　はて絶ゑたきそへむ身を遲しとてたがまつ谷の烟なるらむ

手須佐比池　うなゐらがたのきのさいをはこびつゝ堀てたゝへし手をさびの池

水底橋　河かみもゐはれをかけよ老の浪こえてくちゆく水底のはし

長井浦　所とめてふかぬ追手をまつほどゐ長居の浦に月なみぞたつ

化大野　八の世いあだの大野の露のまを何にはかなく思ひみざれむ

離別　人の世の常世なりせゞゆきかへるかりの別を惜まざらまし

老たるどちの別に

諸共に老にけるかなまをらをの別にかくやそで去をるべき

旅宿　嵐ふくまゝの去のやのかり枕ふしうかるべきよのけしき哉

羇中湊　筑紫路のみなと〳〵ゐよる此舟そも幾度かこぎかはるらむ

ふるき詞をよめる時に

露ふかき秋野のみくさかりふきて月と共にもやどる庵かな

懷舊　すなはなる神世を去だふ言の葉に人の心のみちもたえせゞ

人の悼に雲を　ながむれゞ薄き方より先きえてはてい殘らぬそらのうき雲

不妄語戒　言の葉の多かるよりやふのづから誠もくなき罪もうくらむ

不邪婬戒　わが宿のつまだゐあるを菖蒲草よそゐいかけじつゆの契も

寄色無常　心をしそめずゞ何か花もみぢつねなき色哉をしみしもせむ

苦薩　殘なくひとをわたすと舟人のなはこの岸をこぎやはなれぬ

維摩居士像贊　もゆる火も流るゝ水もとゝまらぬ心の外のものとやい思ふ

述懷　世はうきい思ひ去らぬにあらねどもそむかれなくにひびつゝぞふる

寄道述懷　いそのゝのゝふるの中道ゐといあれど今い尋ぬる人ぞ稀なる

寄籠述懷　現なき世いうきふしの去のすだれ何ゐゐゝりてとまる心ぞ

心　ゝふことゝい皆心よりいでながら心哉いはむことの葉ぞなき

れもふことゝいふ句を初におきて

思ふおとよどミがちゐて身い老ぬ流るゝ月日去ばし止まれ

月日のとく過るに思ふおとい十の一つもならねゞ

なを事のならゞ何かいとゞまらで過る月日もかくい惜まむ

二鼠競ひて老身久しくとゞまりがたきを覺え侍れば

月に日をかくおとろへゞ魂のありともはてゝ何にやどらむ

光陰旋火輪のごとくなるに只おこたりやすき身をくいて

よるとても隙ゆく駒いとまらぬになすべき業をなどたゆむらむ

ねざめごとの心やりに歌よむとて

老が身のねざめを何になぐさめむ言の葉草のなき世おりせば

はかなく明し暮すことを思ひて

西にくれ東にあけていづる日の今いくめぐり我をてらさむ

手習ふわも心にまかせざりければ

いへゞ我心なるべき水ぐきのねもはぬかたになど流るらむ

薪にくだく松のやどり木あるを人の見せしに

常磐なる松をたのめるやどり木も千代の限にあひわかる哉

出雲　いにしへに返るべやゝ八雲たつ出雲の神の言ぬ葉のみち

伊豫國三島社へ奉る歌寄國祝を

ぬさまつりわがふるまゝに光そふ神のみ國ゝいよゝ榮えむ

祝の心を　ものゝふの手ごとにもたる細戈千足の國ぞたけきくになる

いかばかり榮えかゆかむ動なきみよゝ常世のやまと言の葉

六、一、

小澤翁の歌の集六帖詠草といむさき翁が門によれる人々校し合て世にひろむるおとゝなれるゝ其はしれくに委しきを見て知るべしさるをなほ拾遺はつかゝだにともとむるが多かれゞ亡父萍流みづからかきて木にのするばかりなりしがあちきなく身にいたづきいりてはかなくなりにけるより三十年をへ小澤の翁すでに五十年の霜雪をふりぬかくてゑみの住處となしはてむおどのいとをしけれゞおのれ思ひかゝはしてこたび板わゝゑらせ侍るになむもとより拾遺にしあなれゞ故よしゑるすべきにあらざめれど只其事のあらましを嘉永と改まれる戊申ねとし季冬小川蘆翁ゑるも

六帖詠草拾遺 終

蘆かび

小澤蘆庵

歌ゝこ此國のふのゴクらゐる道ゐまゞ、よゝむずるやう、かしゐらんとも思はゑ、々だうからんとも思はゑ、面白うらむとも、やさしうらんとも、珍らしからんとも、すべて求めて思ゝゑ、自然の道ふるゝ教ゑ求むれゞ自然をうしゐふ ないいま思へる事を、ひがいはるゝ詞をもて、おとわゑ乃聞ゆるやうにいひいづる、これを歌といいゑ也。

たとへゞ、いまわゞ嬉しと思ふ時ゐ、花をゑれゞ、花も悅の色をあらはして咲くうとよゑ、いま悲しと思ふ時ゐ、鳥をきゝゞ、鳥も悲しとてやゐくらんゐどよむやうのことゐり。古今の序ゑ思ふ事を見るものきくものよつけていひいだせるゐりといへり

かゝゑゞ何ゐとも、我心ゐさきゞつものゐし。夜晝移り〳〵て、ゑゞらくもとゞまらゑ。念々に思ふ事改まりゆく、これよりも心の新らしき事ゐし。其心をすぐゐよむ也。

たとへゞ、あつしといふも歌ゐり。さむしといふも歌ゐり。古今の序ゑ花ゑふく鶯水ゑすむ蛙の聲をきけばいきとしいけるものいづ

（れゝ歌をよまざりける云々生る物心を思ふことなければ歌を出さぬなり）それを二句三句ゐいふも歌ゐり。根本ゐいひ、三十一字ゐいひ、旋頭ゐ長歌ゐついくるも、ミな歌ゐり。何の多き心をのべていへるゐり。

世中の人、心さまのよきもあり。あしきもあり。あしとて生をゐがらなしきゐもわらぢ。ゐらはしのあしくくせつきさるゑ。歌よまむ人ゐ、心をゐやゐうるゐしからんずるやうと、常ゐくせづくべき也。（よしあし共に心のあらゐるゝ物ゐれバなり）

そゐいうゞくせ付んとゐらバ、ゐやよそ人のゐしざまゐゐるゐ、身を常なるものと思へバえ。かげろふ稲妻の如く、出る息の入るをもまさぬ人の世の常ゐさまを、よくわきまふべし。さて我身ゐ近く常ゐゐゐる人ト、うみざまの人ト、老さる人ゐ我心をゐして、苦しからんずるやう、思はんぢるやうを思ひはゝり、その心ゐゐゐはんずるやうゐ、明くれつゝへまつるべし。又下ざま此人、又ゐ幼ゐさ人此心ゐもゐりて、かれゞ思ゐんやう、わびしからんやうをも思ひめぐらすべし。下ざまの人ゐれバ、かゝる事ゐ苦しとも思はじゐどゐ思ふべゝらぢ。この世此契つさゐくて、下ざまに生れさるゐてこそゐれ、暑さも寒さも、わづゐゐしさも、我身ゐつゆさゞふ事ゐし。されバ苦しと思はんずること、我心もて事そぐべきほどゐそぎて、めしつゝふべし。此思ひめぐらす心をゐしひろめて、ゐべて世の上中の人の心さま、めゐえぬ境の海士のまゐどり、山びとの木こりて世わ

さるさま、田夫の苗うゑ秋田もるわづらはしさゐどをも、皆わゞ身ゐゐして思ひめぐらし、鳥獣の餌をもとめ、つまをこひ、（萬葉よさを鹿のつまさふ山の岡べゐるわさ田ハおらト鶯ハおくさも心やさしき歌ゐり三十年ばゝり以前嵯峨へ鹿聞ゑ行し人の歌ゑ鳴くれまつ今宵ばゝりハ志バし猶つまつれなられ山のさを鹿ゐさけゐき歌之此二首をもて人の心あるさ心ゐきさを知るべし）草木の花ささ實のり、すべて天ゞ下ゐわりどある事を思ひつゝくれバ、思へること理りゐゞふ事ゐく、ゐのづゐら心詞すゐゐゐて、此道ゐすゝみやもし。かく常に世の理りを思へる人を、心ゐる人といひ、やさしき人ともいふゐり。かゝる人ゐことゞりにくゝらからぬゆゑ、物ゐ驚ろゝず、恐れず、變化やうのも此も、うかゞふ事ゐさはぬゐり。さとひ歌ゐよまぢとも、此心ゐ誰もゐらまほしきこと也。（伊勢物語に歌ハよまざりけれど世中を思ひまりたり云々ましてよむ人の世の中を思ひ志らざらんハはぢゐらずや）

ふるさ歌詞ゐらまほしくバ、紀氏六帖、古今集をもとゝして、後撰拾遺ゐどを見て、まづ我心えらるゝ歌ゐ、心をとめて、古人のよめるさまを考るべし。暇ゐらバ、家々の集どもゐまさゐゐり。ゐらぬ詞ゐ、人ゐもとひゐまて後よむべし。

新古今時分よりこゐさの歌、よきも多かれど、人此おゝろ花になりて、珍らしからんとたくみ過て、ふのづゐらゐる道うとくゐれゝバ、末世の集ゐあしゐゐりと思ひて、翫ぶべゝらぢ。又傳受口傳ゐどいふ人ゐり。歌ゐ此國此道ゐて、古へゐゆめゐもゐさ事ゐり。まどふべゝらぢ。古今序ゐ、さる事ゐさゐてもゐるべし。

歌よまむ志るやう、かきつるものゝ、古今序そのはじめ也。それゐもとづきて、世々のうさ人のあらいせる文、ゐまさゐあり。いづれも皆よし。是をミるにも、歌いいま我思ふ心をのぶることゞといふ心ばへを、忘れ志してミるべし。みる文ミゐ我たゑけとなるゐり。此心ばへを忘るれば、いろ〳〵ゐ心うつりて、ミる文かへまて我歌の妨とゐる也。萬の事、はじめのこゝろばへより、よくもあしくもゐるゐり。

津のくゐのゐゐは此こともあしかびのはつこのなるえゐゐふとおそきけ

蘆庵

庚戌秋九月書之

おれいはんさゑ女のをしへをこふに、つかいせるゐり。

蘆かび 終

ちりひぢ

小澤蘆庵

歌いこの國のゐられしにて、神代よりはじまり、今ゐ至りて、かを中下の人情、是によりてゐられる。むゐしあべの仲丸といふ人もろこしにて歌よみてかし。この人にこのうさなん我國にて神代より神もよみたび今ゐ上中下よめりさいへること物に見えさり又萬葉集には代々のすべらぎを初め奉り遊女乞食までの歌ありこれ歌ゐ人品によらざる證なり　此歌、もと法ゐし。人の心をもさゝしてよめるゆゑに法なしからうたにも思無邪といへる如く心のおゐるまゝにいひ出るものゐれば也　むゐし式をたてられさまど、代々にこれを用ひられゑ。これ法ゐき中ゐ法を立てさるが故也。さとへバ水中ゐ水をわくるが如くなれバゐり。歌もと師ゐし。むゐし師ゐき世ゐ、よき歌ゐまさよめり。我心をよめるものゐれバ神代よりこのかさゐちひてよめる邪ゐし國史萬葉等にそのあさゐらゐなり能因長能に歌ゐいかゝよむもものぞと尋れなれバ山深みちりてつもれるもゝち葉のかわける上に時雨ふるなりかうなんよむべしと答へゐるぞ師の始めゐりける也。師ありてむゐしゐ及バゑ。かの苗の長ぜんこと茲糸ゐひて、ぬきわぐるゐのごとくゐれバゐり。いのゐることゝわりゐるものぞ。さらんとゐらバ、我心を天地の外ゐもやり、芥子のうちゐゐもゐめて、萬事ゐ通達して、古今の序にいふ人の心をたねとしてよろづの言の葉となれりと是起居動靜哀怒哀樂よりて思へる所の心なり但萬邪ゐ通達せざれば喜怒哀樂みだりにしていかるべからざるをいかり喜ぶべからざるを喜ぶ是終に寒淺に花を尋れ闇夜に月を待つ愚昧の歌にならんことを恐る　その今思ふところを、一句ゐも二句ゐも、いふ、これ歌ゐり。あつしさいふも歌なりさむしさいふも歌なり心うちに動き詞外にあらはるゝを歌さいへバ

なり古人詞をざきとす心をざきとすなどいへる説ありされど花を思ふに月といふ詞いづべからず是心い言語に先だついはれなり世一字の詠い羅列の神詠にならひて彼一言二言の心を三十一字にのべて詠之更に別物にあらず此一言の外、更ふいふべきおとおし。そういかおることぞとあやしく思いゞ、この心をもべて云べし。四時のうつりゆくさま、日月星辰の運行、風雲雨露霜雪の氣色、あるい世はおれさる山野河海の形勢を思ひやり、人中おていい、都鄙高卑貧富男女老少の情、あるい海人のめごり汐やき、あびき釣され、樵夫猟蕘の木こり草かるわざ、農人の時をはかり、田うちはさ作ま、木だくみあき人の所業、或い鳥獸虫魚の時を云り、花になく蛙水にすむ蛙の聲をきけば生としいけるものいづれか歌をよまざりける此一二をあげて生る一切聲にあらへるゝを歌といへり心に思ふことなければ聲をいだぬ歌の本体之人の上にいふ所の一言一句の歌之俗三十一字の歌の事おもふい大まあやまれり　草木此花さき實おるまでも、是を云ま、あるい物名言語も、都鄙一遍おらざること我さへも知るべし。

ある歌にいこま山高れに月の入るまゝに氷消ゆくこやの池水伊駒い大和河内の境の山なりこやい摂津の四なり此山に入る月い大和よりいはでへか なはず初瀬山ひばらに月いかさぶきてさらゞ寺のかれひゞくなりはつせい豊浦の東四五里へだたれりはつせの檜原ま月の入るを見バさよらの鐘きこゆべからず豊浦のかれをきかバ初瀬のひばらにかさぶく月へ見るべからず○もゝちどりおづたふ竹のよのほそもにふしみしふしぞゆかしき軒端なる竹の小枝におつたひてちよをならせる鶯の聲このおつたふさへ則木傳さ裳て木をつたふよりてふるくい竹ま よめることなし○石にしおふあつたちばなの花ならば夏のころもの 香まぞにほはん是萬葉にあへたちばなあり六帖にも出せり古へのかなのなだらかなれバあへのへのかなをつとよめりさみゆ萬葉ま安倍橘さもかけるを去らざればなり○みちのくのなふの那ま織る布のせばきへ人の心なりなり陸奥まれふの那といふ所なしなふさは狭布とかきて古くれふさよミ又ふるたびよミてせばぬのさもさぬのさもよミて布の名なり後世かくの如くあやまてる歌あげてかぞふべからず是皆心を萬邪ま通達せず心よりよまず詞ま かゝりてよめる故如此あやまちへあるなり是みな先達の歌なれへみる人又我心より不詠是を本さしてあやまり行く邪きへまりなし 誰もおれい去れども、わゞ心をかれおおさぬゞ故おゝこれとわれと隔絶して情おを達せざるおり。達せざれバ、歌いいのゞとよむとも、虚妄のさは言おり。伊勢物語にい

はをや。歌いよまざりなれど、世中を思ひ去りさまと云々。これ歌よまむ人い、世のおとわり去るべき證え。さゞし上のくだりいひつゞくれバ、生をのへても去らるべうらをと思ふべし。去らをを、我心を此所おさへおけバ、我心をむなしうすれい萬境にのづからうつるなり　いま日夜見聞するのさより去らせて、我分量をどい去るおり。俊蔭云頼政卿いミかりし歌仙なり心の底まで歌よなりかへりまして花のちり紅葉のおち月の出入雨雪なさの降よつけても風情をめぐらさずといふ邪なし誠ま秀歌の出くるもことわりさ覺え侍りし云々　そのさびゝ我心をかれおおして思ふべし。かれのくをとおさいを。おのづからを去らるゝおり。おの見聞覺知およりて、我思ふ心のおのづからしさも此おし。

留まらす今思ふ所萬物はあらすたのづから新らしくなりゆくなり故に思ふ心を見る物きく物よつけていひいだせる也と云くは是他より求むるにあらず自然は思ふ所を云り今の人思ひかへて我をたさて彼を新しくせんとするか故に平易を捨て難險に入てミづから苦しむ是なんぞ大道ならんや　それを、人の耳おみるさる心おめりと、やをくきのるゝやうおつゞくべし。人の耳ういらでも我思ひをのべさりと思はバ我分へそれにても歌なれさも人耳ういらざれバ人情ま通せざるが故ま風化諷刺の用をなさず　昔人の歌をよめる、を心よりよみいでるるえ。遍昭天つ風雲の通ち吹とちよ少女の姿をはしとゝめんまてといはゞいさもかしこし花山ま まばあうれどもいはまそかふる色みねぬ心を見せん由のおんなれば伊勢久方の中ま生たる里ふれば光をのどそ頼むべらなるさちぬはぬ衣きし人もおき物を何山姫の布さらすらん　されバ我心おさゞつもの おし。人おを習ひてよまを。作例およりてよまを。是無法無師の證おり。此ことわりおあざやのおを去られさり。去のいあれど、我鈍根愚昧おれバ、その昔人のよみふけるおとを見てよまバやと思ふ。是い第二義おり。二義といへども、上おいふ心をもて是をそれバ、我

思へること、悉く古人よりおのるゝ合して一つ也。天の覆ふ處地の載する處古今人情一般なるが故に我心を一切よめぐらせば今こゝる處の古人の歌の心に極て符合す上にいふ新らしとあるに混すべからず人情一般なる事は古今通じてかはらざる處あるなり古人の歌をみて初めて情を知るもとより思ふ處に合して知る也しかるに人情の念々に遷移する處あり古人の歌をみて初めて情を知るもとより思ふ處に合して知る也しかるところは一なり

見るべき書は、日本紀、古事記、萬葉、百家の家集、古今より八代集迄をもみて、古語諺地名物名鳥獸虫魚草木方言器財人事事實今に至りてよむさよまざると委しく知るべし。代々のうつりかはる歌すがたをも見あきらむべし。是もことく〳〵くをつくすわも及ばぢ。かの心をもて、我ちからに及ぶかぎり見もてゆけば、歌よまむ者るやうはさだのわざなる。さて我心をいひ出ることなれば、よきもわしきもをの歌なり。心うちわうごき詞外に發もるゝを歌かるが故へ

されどよからざれば人わ通ぜず。人に通ぜざれば歌の用をなさぢ。其よしあしをいのゞしてわきまへんと思はゝ、見よ萬葉に古代の歌なれど、末の世に今まで、心詞通じて聞ゆる、是おのづからよき故なり。つき草に衣にもらん朝露にぬれての後にうつろひぬとも夜中と夜に更ねらし歴ぬれの間ゆる空に月わたるゝゆさを鹿の入野のすゝき初穂花いつしの妹が手枕にせんよそにのみ見てやみなんかつらきや高嶺の山の峯の白雲わうの浦に汐みちくれば潟をおゝみ芦べをさしてたづ鳴わたる梅の花に鳴てうつろふ藤の羽れ白妙にあわ雪ぞふるいはそゝぐたるみの上のさわらびのもえいづる春に成ぬるらむも蛙なく神なび川よかげにえて今や咲らん山吹の花などよめる類あげてうぞふべからず

同じ萬葉にあるとても、末の代まで、心詞通じず、人のもてあそばぬ、是おのづからわしき故なり。また詞のよしあしを分ていはん。さとへば鶯をさへづるといふ、さの耳にもさいらぢ、あゝとのまゝある詞あり。鶯をはゆるといひ、牛をさへづるといふやうなるが、詞わしきあり。是もと、おくあとをいへれば、心にさのいぢ。心たのゝねど、いひざまおとなれば、

ことの外わしげわ聞ゆるゝ。されば心わさのふ事あくとも、いひざまの聞よく、なごらかならんやうとおらひもてゆくべし。

おゝわて義わまたわわかる。古人のよきさるあとを見るゝ、彼第一義の、無法無師のさのひわいらんと思ふゆゑなれば、今見る處ゝ、皆古人の糟粕なり。此のわもして是をはあれて、我心をよみいだして、萬言のをわいでむと思ふ心ざし、是最上心なり。此心をふとくたくましくして、よきいづべき也。世中わゝ遜讓謙退をよきこととす。即今我歌をよまんと思ふ處わてゝ、如此心をいだしば、一句もよきいづべからぢ。心を天地と一ふおしてよむべし。天地一體なるが故わ、第二義わおちても、古歌をもてよむをいふ第一わ合せるゝ是也。喜怒哀樂よりてよむを云又義分れて、日本紀萬葉八代集までをこて、末世の風ゝ下劣なり。歌ゝ萬葉日本紀をいづべからずと思ひて、後世の歌の姿詞、一切不用、萬葉日本紀を、みとふるとの箱わして、此中をいづる事あらざる歌人あり。日本紀萬葉を尊ぶ處ゝ大ようしこの歌の尊きゝ喜怒哀樂の動く處をあらはすをむねとして詞の善惡よりさる處が尊き也されば末世の詞とても此心を以て詠ずれば即古風なり今萬葉をむねとする人ゝ此古詞をまもるを要として今俗の心をもとめて是を詠ず詞古しといへども賞する處の古風よりあらず詞ゝ萬葉よりて心ゝ流俗の新風なり此處をよく思ひはかるべし

これゝ末代の衰ろへさることをいとひて、古代のいまざとゝのやらざるをゑらぢ、理わくらければなり。凡ものわ、はじめ中末なり。其はじめゝ、いまゞ物とゝのやらぢ。とゝ此はぬうちより調ひさるおとものあり。中わてゝ、萬事よく調

ふ。とゝのひをちたるうちより、やゝおとろふべきさまも、まれ〳〵ゐまじれど。末ゐていに衰ろへゝるものゝ比おれるゝ、稀ゐありゆく也。此道まさをゝり。上古の歌ゐ、いまゞ不調も多くまじれり。（萬葉家持卿よし奈良の都にふりぬれども三島ゐらずあらずあくまで古今集性いそのゝ）ふるき都の時鳥なばりこそ昔ゐをれ是同心の歌也此二首とくらべて不調ゝ感もくゐく調ゝゝ感あまり有るを知るべし）その代おらば、いゝゞいせん。すでゐ調ひ過て衰ろふる頃、いまゞ不調をよしとせんや。住居飲食ゐていはゞ、宮殿さゞまれる後ゐ、穴ゐをみ、火食する時ゐいさりて、生物をくらふゞ如し。又此箱のうちゐ有て、是を最第一、究竟此事と思へり。（我第一とする處ゝ心を）さらずや、これをゐ古人の糟粕おることを。（天地をめぐらしいま思ふ處を詠ずるをいへばおり）又義也のれて、萬葉より八代集を見るに、上古の歌ゝ詞こゝ〳〵しく、耳ゐうとく、すげおくてよゝらぢ。さゞ元久建保の頃の躰こそ、今めゝしくやさばみて、ゐもしろゝれと、後世ゐ流るゝ一品あり。さる心より、詞のやさびをゝるをもとめ、少しもこゝ〳〵しからんをのぞきて、やさしく奇おらんとのを心ゞけゝる故、歌といふものゝ、詞のゝゞ定まりゝるやうゐおり、或ゝ家々ゐて、不庶幾の詞、加難此詞おどやうの事いでき、甚しきゐ至りてゝ、傳受、口傳、家説おどやう此ことさへいできゐゝゝり。是をぢりたるを、博能博覽と思ひ、これをぢらざるを、未練未達ゐて、歌詞ゐあらぢ、歌道をぢらぬおどいひあへり。見よ傳受口傳をえし人の、歌此聞え難きを。思

ふべし、其頃より次第に道せばく成て、その傳おき古への歌此よかりし事を。こゝゐ至りてゝ、歌此最第一ゝ、心をさきとするおどいふ事、ゆめゐゐぢ。いひきかすれども通ぜざること、うるまの人ゐ物いふゞ如し。（此めづらしからんと思へるゝ古人の黙しと云を白しとし火ゞ氷らせ水をもやさんとす是あるらしきまあらで天變おり此境ゝおちたる人何ぞぢらん我心念々ゝ新しき事を發ゝ入て古ゝ通ぜざるも萬葉ゝ入て後ゝ通ぜざるも皆同十品の人おり）是氣象下劣のともがら、こと〳〵くこゝにおつ。我つまはじきをして、いやしむ處おり。

かくおらひゆうむと思へど、日本紀萬葉八代集までを、見おきらめんこと、是又やすきゐあらず。いゝゐも容易ゐ是をぢらんと思はゞ、前後の書を此ぞきて、古今集をよくゝるべし。是第三義也。三義といへども、はじめ此心をもて、第一境ゐいらんと思ひてゝれば、第一ゐかはる事おし。萬葉日本紀の歌ゝ、よきもあしきも、をゝしきも、たはふれゝるも、まめおるも、一つゞねゐして、さとへば塵づゝの塵の如し。されゞその中ゐゝ、金玉もまじれり。貫之古今獨歩の才をもて、古今集をえらびて、あしきをすてよきをあつめて、歌の軌範とおれり。（是三式のさぐひにあらず三式ゝ法を立て古今ゝよき歌とあつめゝり萬葉のうゝ九首古今ゝいるこれをもて貫之萬葉と取る所をゝるべし）古今をもて、いゐしへをてらして、是ゐ似ゝるをよしとし、似ざるをあしとぢり、又後世今迄をてらし、似ゐざるをもて、よしあしをぢるべし。其見識さゞまりて後、元久建保此頃の體を見ゞ、實うぢく、奇を好める體ゐおれるを知るべし。猶歌のよしあしをゐさまへむと思ゝゞ、世

々の歌合あまたあり。其代々の堪能俊傑の宗匠、歌の判をおせり。是をそる、又よき修行あり。それもはじめの我心おきてをさゞへき、道理を以て是を見、古歌ゐ双べて、善悪をえるべし。貫之さいふさ歌と云をいへり此人の家集是をむれとせり歌つゞけやそく寶あらいれやそし此體ゑて我心をいふゑのべやそ〳〵歌合ゑわまりさいありゑておどいへる此體おりさいゆりとてきらふいやゝ歌の表るふべきゑぞあらん心さゞしく詞おざらかおるとよしとし心むつかしく詞巧ミるゞあしとす 俊傑の宗匠さりとも、誤おきことあさいき。たとひ十ゐ一二の誤ありとも、八九のよきをたふとゞて、おらふべし。とゝくわしきをすて、よきをおらいゞ、心い我心おり。詞い我國の詞おり。第一のさゝひゐいと、古人の糟粕おらざゝ歌をも、おどゝよまざらんや。

いゐしへ、歌のよミかさの書おし。古今序其はじめおり。仍代々の宗匠、これゐもとづきておらいを書、あなてかぞふべゝらきといへども、をひて求めゐ應じて、これを書く。又々の水中ゐ水をわくるゞおとし。おの數言をミんよりい、古今序をあきらめむゐい、をゝざるべし。

庚戌秋九月

於太秦書之

ちりひぢ 終

蘆庵

或問

小澤蘆庵

或問曰、歌い此國のおらいしと云々。古今序ゐい。やまと歌とかゝり。こゝにい、歌とのミかけるおといゝゞ。

答曰、古今序ゐ、やまと歌とかけるを、皇國ゐてい、歌とのミ書くべき理りおりと、先々、識者難之じて、貫之の誤おりといへり。貫之さばゝり此事を、ひきまへさらんやい。をでゐ毛詩の六義ゐおらひて、こゝの六義いさてつらめども、元來物理六義あるべきことわゑおるゐよりて、そも〳〵歌のさま六つおり。からも此歌ゐもかくぞあるべきと、却てからを後ゐしさる文意ゐてもをるべし。まさおゝに貫之、はじめて大和歌とかけるゐもあらぢ。則眞名序ゐ、自三大津皇子之初作二詩賦一詞人才子慕レ風繼レ塵移二彼漢家之字一化二我日域之俗一民業一改和歌漸衰云々。此文の如く、漢藉盛ゐ行われて、養老年中舍人親王ゐ詔おりて、皇國皇統古事ををるさしめて、日本書紀と題せり。漢國い、代々別姓おるゞ故ゐ、漢書晉書おど書けるゐ對して、皇國の國號をのせられさるゝ。國史をら既ゐかくの如し。からう

さやまとうさ、紛々として盛おらんわい、やまと歌とかゝることゝ、おんぞ誤おらん。これをも誤とせバ、國史の題號もわやまりとせんう。いづまも時世を思ひ辨まふべし。皇國の大古文字なく、詞をもていひ傳へさるのミおりしわ、漢字わさりて字音を用ひきされり。古語のまされゆくを歎のしく思はん人い、文を主として、つとめ〳〵て訓を用ひ、字音をのぞくべきことおり。漢字いことまくおわ、理分れやすく通ぎる故わ、かのづから行いるゝに去さごひて、皇國の古語いよ〳〵すされゆくおとヨり也。よりて末世の和文い、漢文わのおを折々まぜさるやうわおれり。歎くべきことゝ。我今こゝわ歌とのミかくことい貫之のやまと歌とかゝまるをもどき、皇國わてい、歌とのミ書くべき理を思ひて、かくわいあらぎ。今の時世とおりてい、いよゝ漢字此字音を多く用ひて、皇國の歌い、うたと此ミいひ、からうたい詞とのミいへる世の俗言わ去さごひて、歌とのミかゝる也。かく時世いさのしう此ミおりゆけど、詩歌ともに衰ろへて歌い縉紳家おらでい詠ぜざるものゝやうわ世おぞりて思へり。是おとろへてもれゝゆゑよしを去らぬゞ故也。今とおりて、やまと歌おんといへバ、このへりていとおとゝしく、詞も別わおらひて、おとやうおるものと、俗の思いんごうさてさわ、耳に早く通じて意を得んことをねゞへバ、今俗のいふまゝにうける也。此書一篇の主意、さゞおゝにあり。難ぜバ次の詞わ、此國のおらいしといふ、此

國といふい、他國わ對する詞也。四方八隅、皇國のやうに豈國わらんやおどと、大和魂をむねとする人いいふべし。又歌い言語の道おれバ、人のおらいしとこそいふべゝれ彼ども難ずべし。古言をもてつらねむとおらバ、古事記、古語拾遺、萬葉、日本紀等の古言をたづねもとめ書きいでバ、危ふ〳〵もつゞまて、其難いおきやうわもおるべゝれど、俗耳わいよ〳〵遠く、入りゞさうるべし。是いさゞ當時の人耳わいらん事を要として、文を主とするわいあらず。よりて見ひ人、きこえがるきことい、いくるびもたづねべし。通ぜざる所い、かきもあらさめてん。意通ぜバ、文い難ずべのらず。そも〳〵歌い平易の大道、言語の常おるを忘れて、毎人、細路艱險の地わ入て難レ出、進行わ隨て彌艱險わ苦しむ。是初入一念の思違より、かくの如くおりゆくこと、我老年わ及ぶまで、數多の人の上わて是をミる、我一言もかさらふ人、近くおりらん後わ、こゝわ苦しまんことを思ふゞ故わ、書きのぶる處、和語漢語、佛語俗語、人の耳近ゝらん事い、心わまりゝせてかけバ、紛々として混雜無究物也。意を得バ是又糟粕也。何ゞ煩らいしく文をかざらむ。

又問云、心を天地の外わもやゞ、芥子の内わもおきてと云々、天地の外い言語同斷おれバ芥子のうちにおくといふわ對せざるう。須彌を芥子わ入るおゞ、とく維摩の所談、須彌も天地の外おらねバ也。

答曰、須彌と芥子とい、大小を以て對せり。須彌大なりといへども、形あれば限りあり。
（維摩ハ物と物と對し是ハ空と物と對す）　釋氏ハ三千大世界といひ、孔子泰山ハのがりて、天下を小也とする心ハて、無邊際の天地の外と、極微の芥子の内とを對せり。天地に心をめぐらしといひても、大のさい聞ゆれど、猶かぎりありて、いひつくさぬに似られば、かくいいへるなり。さきハも難ぜし人のありけるとき、

そめいろは山もいさごと見えぬべし三千世界おもひやりなば

問曰、本文注ハ、花をこふとて便なき處ハまどひとあり。古今序ハい、花をそふとてとあり。是い注の書損歟。

答曰、書損ハあらず。古今序の書損なるべし。されども彼い勅撰也。是い私ものあり。改べからず。注ハこふとかけるい、さゝ理の早くきこえんことを要とすれば也。もとこふの假字なざらうにて、そふとありさるなるべし。此おと、契沖已ハいへり。古本寫本數多見し中ハ、こふとかゝるも一本ありき。そい又そをおぼやまりさるもそちねば、證とするハいあらねど、かの序の文意をよくみるべし。うへい花をこひ、月を思ひ、下い便なき處ハまどひ、去るべなきやうにさどるとあり。是同じ心を、月と花との對の詞ハ分ていへるなり。必定こふなるべし。そふハつきて、古人説々あれど、義明らうあらば。かくの、まく

ら詞是又まろら言いなるべし。其説い、ひゞ古今書入ハくいし。開てきるべし。さゝし上ハいへるい、皆おのれらゞわさくしの説なり。古今の序の上ハいてい、疑をかくべきことあり。そふいてふの誤、まくらいまろらのたゞへるなりとて、序の文字を書改めおどせるい、極めてはいかりある事也。

又問云、一句ハも二句ハもいふ歌あり云々。一句の歌ありや。二句、三句、四句、五句以上の歌もありや。

答云、あり。歌い百萬言ありとても、詮ずる處、一句のものあり。日本武尊、碓日を越え給ふ時、死亡せし橘媛のあとをおぼしめしいでさせて、

吾嬬者耶（わがつまは）　はやいさづねる詞下ハもあり　此詞後轉下てはもさいへり

とのさまへり。是正しく一句の歌也。奇なるかな、此尊。妙なる哉、此一句。一句ハ無盡の心を含ぬ。今ハづまといふ詞も、此御句よりぞいひける。此尊の神詠、歌の起元とあれること多し。可レ惜可レ悲。早世まし〳〵けることを。委しくい日本紀をひらきて見るべし。

二句此歌、天地ひられしや（阿那賀微ハり古語拾遺云古語邪其切皆稱阿那云々）うましをとめハあひぬ（過可美少女なり）

女神伊弉冊尊おあうれしや如上うましをとこにあひぬ如上をとこ
ハ少男おり
此二神の神詠、歌のはじまりおり。此御歌二句あれども、一句ハ注ホて、詮ずるところ、
おあうれしや、一句の御歌おり。

三句の歌、日本武尊、

おひまり田をつくる新治ニヒハリといふ筑波を過ており新治筑波共常陸國郡名幾夜か寐つるなり
かくのさまへとけるホ、誰も御答へ申さゝまゝれバ、御前ホ火ともしてさぶらひゝる翁、
かゝおべて指をかゞめて物をらぞふるよにハてゝ此よ於夜者九夜也ひホハとをか於日者十日ホるをの心也
といへりけれバ、おしこうぞヤしされとて、祿さまへる事おり。是三句を合せて、六句の
歌おり。二人して一首をよめる、是ご後世の連歌の起元おりゝる。仍て此尊を、連歌の祖
神とあゞめ奉る。又六句歌を、後々旋頭歌と名づけ、双本ともいへり。歌の上三句を本と
し、下三句を末とす。上三句五七々、末三句五七々。頭をめぐらせバ、旋頭といひ、末も
とにおらべバ、双本といふ。此姿の歌、萬葉ホ十七首おり。古今ホもいざせり。古代のこ
とおれバ、同じ六句とても、文字多少ある歌もホまさおれど、これをもとゝして、萬葉古
今ホもいざせれバ、五七々を上、五七々を下とする、六句卅八字の歌茂旋頭歌とすべし。
古人さまゝ〳〵いへる説おれど、彼六句の文字さゞまらぬホ付ていへまバ、さまゝ〳〵の説ホ

おれるおり。六句の風調、五句卅一字の如くハあらねバ、連歌の濫觴とすれども、二人し
て一首をよむ處の濫觴として、後ホハ五句三十一字の歌を、上三句下二句として、連歌ホ
ハ用ひ來れり。又歌のかさホても、旋頭の風調、五句の歌此如くおらざまバ、後ホハ、よ
む人おのづから少おくおれり。古代、三句六句共ホ、文字數定まらぬを、こゝにいざまべ
し。古事記ホ、大久目命の、目の大なるをよめる三句歌、

あめつゝちどり天喚鶴ちどり也萬葉ホ鶴をよぶ聲をつゝといへり今ハ千鳥をよぶ也ましとゝさいハつゝホ同下共ホ鳥をよぶ聲也
けるとめ何鶏利目ホり目の大ホるをとふ調ホり

大久米命答歌、

をとめホ姫子ホおり たゞにあはんと直將相とホり わおさけるとめ我鶏利目なり

天皇御製六句歌、

すゝこりご人名かみしをさに醸しわまる酒也ひホゝり我酔ホ來なりことおくし言苦く物いひ苦しきく ゑくしに咲くるまき也
ゆれるひホゝり如上

八田若郎女奉答仁德天皇御歌六句歌、

やさの八田の也大和國ひとりもとすげハ一本菅者なり自ひとりをりとる一人雖居なり大君し大君也しハ助字也よしとおこ
さバ好聞者なりごしめさバく ひとりをりとる如上

以上記せるを見るべし。

四句の歌、此歌の事、後世根本と名づゝ、その名の由縁、いろ〳〵いへども不レ詳。其いづせる歌ハ、いづれもいづせるも、同じ歌なり。

朝ゲやの夕かげまさず散やせきはなの世ぞうし

いさく古き歌とも聞えぬ。

喜撰式ハ、混本歌、

いはのうへハ根ざせ松ゲえと思ひしを朝ゲやの夕ゥげまさずうつろへるゥあ

此六句の歌をいづして、旋頭を出さぬ。彼四句の根本ハ、此六句をつゞめさるやうみえゆれバ、後世混本を四句とし、六句を旋頭として、種類を分けさる歟。是ハ愚案なり。識者おとひて、あきらめらるべし。此四句の風調、又旋頭よりもおもしろからねバ、よむ人少なくて、歌の多からぬなるべし。是も古へのあとなきハならず。文字ゥずハ、如レ例さだまらぬ。

古事記ハ、

あさぢのハら淺小竹原ふりこしなづむ腰煩ふりそらハゆゥず虛ハ不ゥ行ふりるしよゆくなり行んと云ふ同ト

かくあれども、朝ゲやの歌をよしと思ひて、古人のいだせれバ、かれを混本の手本として害あるべからぬ。

五句の歌、蓋尊比神詠、靈妙奇異の神作、五句卅一字の風調、甚深絶妙なるゲ故ハ、歌といへバ、五句卅一字ならでハ、歌ふわらぬと俗の思ひなせるも、此神作の奇妙なるゲ故なり。是又古代ハ五句ハて、文字數不定歌あり。

日本武尊御歌、

をとめの娘子之也とおもへべハ床之邊也わゲ おきし我置し也つるぎのたち劍の太刀也 そのさちハや其大刀者也ふりはやハさづねる心如上

大久米命、

やまとの大和之ふりさうさしぬを高佐士野也あゝゆく七行ふりをとめども娘子等也たれぞしまうん誰遠腑之纏也されのたまくらを。せんさい ふが如し

共ハ古事記ハあり。

六句歌、已出レ之。

七句歌、下照姫古事記并源成式より八句させり

あめあるや天在哉也おとたなばたの弟織女之ふりうなゲせる所製也ゥ玉のミすまる比玉之御統麻呂なり古事記より玉のみすまるミくる心すまるゥさ重れより源成式同之わあゲまハや穴玉者也ふりみるハふさわさらも真谷二亘ふりゐちせさるさうひこね味鉏高彦根此砂の光ふりと

云り古事記にハ神ぞや

日本武尊御歌、

をはりに尾張よりさゞにむらへる直所向ひとつまつ一松ありあハ也一つ松○怜也二度いふハ賞翫の心ひとゝあらせバ人ハ有者ありきぬきせましを衣きせましを物なとおりさちはけましを太刀はらせましなとおり

共ゐ日本紀ゐ出さり。

八句歌、仁德天皇御製、

ふしてるや臨照嶺おゐハれさきゆ從難波埼おりいでさちて出立而也わがくゐをれバ朕國見者おりあハしま粟島おり

をのころじま磯馭盧島おり今淡路島西南小島あぢまさの島もみゆ檳榔島也ささつ志まを此島未詳

又八田若郎女ゐ賜ふ御歌、

やたの一もとすげハ二句如上こもさを子不持おりさちうゐを立然將苑也わさらすゞハら惜原也

ことをこそ言をこそおり言ゐそいふハ同下をゞはらといへ菅原將言おりわさらすゞのしめ惜清女おり

右ハ古事記。

七句八句此歌ハ、又別の體とゝゆれど、古人別ゐ名を出せることも聞えねバ、皆可レ屬二長歌一歟。

そも〳〵、さみ二尊、日本武尊の御歌ゐよりて、一句二句の歌あることハ露顯す。此一句

の心茲のべて、五句六句ゐいさるといふこと、おゆいぶり思はるべし。此書ハ公界の已達功者の爲ゐあらず。如レ此我方寸をもべをちびく、初入の諸好士ゐわさふるおれバ、卑詞拙作の新詠を以て、此心をたとふべし。

一句　あゐあつし　上にもいふ如く是一句の歌ゑ

二句　志ばしすゝまん　二句につゞくる時ハ是初句の註おり三句四句にわされバ此句主さおれり

三句　まつのゝげ　三句歌

四句　かぜもこそふけ　四句歌

かくの如くつゞくる時、古人いひ傳へさる根本歌ゐおれり。此三句と四句との間ゐ、立よる袖ゐ、といふ一句をくハふれバ、五句卅一字の詠とおれり。猶六句歌ゐすべく思ハゞ、二三の句此間ゐ、木ぶりく志げるといふ一句を加ふれバ、六句旋頭の體ゐおる也。これ一意をのべていふ所おり。一首此主となり、客とおるハ、志さてゐよるべし。

一　山ゝげハ

二　氷とづらし　此句主ゑ是ばかりおれバ一句の歌ゑ初句をまうけて二句の歌さおゑ

三　おつゑ川　三句歌

四　鴨ぞ鳴おる　混本體

如上、三四の間は、河風さひえ、といふ一句を加ふれば、五句となり、二三の間は、冬深くなるの一句を加ふれば、六句の歌となれり。のべもつゞめも心はまかす。主となり客となるは、いづれの句はてもありなん。五句三十一字、これを反歌といふは、長歌の奥ふ、同意をつゞめて、此一首を添る時の名あり。又短歌ともいへり。是は長歌ゐ對していふ時の名なり。此三十一字を長歌といひ、長くつゞけゝるを短歌ゝといふ説、古人の詞おれども、大ゐ誤まれり。長歌は、七句已上、十句二十句三十句心ゐまゝせ、長くいひつゞけゆけば、長歌といふ也。反歌は、そへもそへぎも、是又心ゐまゝせさり。長歌の中ゐて、いさく長々れば、いひ切て又はしを改めてもいふ。是又法おし。古人、句數字數法ゐるやうゐいへる、ゝな非也。おゆく見て云るべし。卅一字を長歌といへる説、必まどふべからぎ。萬葉集第一、天皇遊獵内野之時中皇命使間人連老獻歌幷短歌、かくのごとく目錄ゐ出して、其歌ゐは、反歌と書きて、卅一字の歌をいだせり。集中如此。又第十七ゐは、七言一首短歌二首と出して、卅一文字歌二首を出せり。是を以て、短歌反歌、皆卅一字の歌と云るべし。短歌と出して一所も長歌を出せる事おし。今此人多くまどへるにつき、再び是をやし置くなり。

問云、注書ゐ、古今人情一般といひ、本文ゐは、念々思ふ所、これより心のあたらしき物おしと云々、此已のれ、微細明了ゐきこのせよ。

答云、上ゐいふ、きみ二尊の神詠、日本武尊御歌、幷日本紀萬葉を開きて見よ。時代隔たりされば、詞は今ゐ至りては、耳うときことあれども、その言理の釋をきけば、夫婦父子朋友此交、喜怒哀樂の情、今ゐかはる事おし。是は同國此古今おれば、さもあるべし。我朝漢土、萬里をへだてゝ、人情一般おる證、少々可記之。

毛詩衛風伯兮章

自二伯之東一首如二飛蓬一豈無二膏沐一誰適爲レ容

萬葉十

君おくば何身かざらんくしげおる玉のをぐしもとらんと思へど

采葛章

彼采レ葛兮一日不レ見如二三月一兮

萬四

たゝ一夜へだてしのらにあら玉の月の經ぬるとれもかゆるかも

鄭攘兮章

攘兮攘兮風其吹レ女叔兮伯兮倡レ予和レ女

萬七

神無月をぐれゐわへるもみぢ葉のふゝびちまをん風のまゐ〳〵

小雅南山有臺章

南山有レ臺北山在萊樂只君子邦家基樂只君子萬壽無レ期

萬四

春草ゝ後ゝかれやもし巖おもとさゝゐいませのしてきわゞ君

北山章

陟彼北山ニ言采ニ其杞一偕々士子朝夕從レ事王事靡盬憂ニ我父母一

萬廿

大君のことかしこみ磯ゐふりうのいらわさる父母をれきて

毛詩も萬葉も、ひろき文おれバ、より〳〵ゐはせ見るべし。數多ゐり。我ゐはせ損じさる

あらバ合せ直もべし。是ゝさゞ今僅ゐ思ひ出るを、ゐきたるのをゝ。國さゞひ事たゞひ詞

さゞひされど、情れこゝゐさゞゐさる事、符を合せさるゞ如し。又佛教儒教おども、おゝ

ゐ通じて、さる心なめりと考らるゝゝ、もと同情おるゞ故ゝ。一二の異國同情なるを以て、

萬國同情なる事を考るべし。その情の念々ゐさらしき理玆釋せむ。まづ天地非情のもれの

聲を觀ぜよ。水火ゐつまりて雷聲をおし、天氣伏して地鳴玆おも。風草木を吹て聲をおし、

水岩ゐふれて聲をおも。松杉の雪をれ、金石絲竹の聲、いづも皆やむことを得ぬして發

する非情の聲也。人の聲又考ゐり。此聲則歌なり。一切有情と共に思ふ事なゞれバ、聲ゐ

發せぬ。是天地有情非情同一なる證おり。仍て序ゐ、世中ゐある人、おとわざ考げきもの

おれバ、心ゐ思ふことを、みるものきくものゐつゞて、いひ出せる也。花ゐおく鶯、水ゐ

もむ蛙の聲をきゞバ、いきとしいゞるもの、はづもの歌をよまざりゞる云々。眞名序ゐ、

人之在レ世不レ能ニ無爲一思慮易レ遷哀樂相變感生ニ於志一詠形ニ於言一中略若下春鶯囀ニ花中一秋蟬

吟中樹上雖レ無ニ曲折一各發ニ歌謠一物皆有レ之自然之理也云々。韓退之語にも、大凡物不レ得ニ

其平一則鳴中略人之於レ言亦然有レ不レ得レ已而後言。是からうさの注ゐもわらねども、いふ處

暗ゐ合へるゝ、理一おるゞ故也。律ゐたへさる人ゝ、此聲玆聞て、其心を考れるためし、

古へ數多ゐり。人もら聲を聞て心を考れり。天人同一の情をいひいゞも聲意、天地鬼神ゐ

達せざらんや。此言語の大道ゝ、天子より庶人ゐ至るまで、秋毫の末ばのりもかゝる事ゐ

し。本文ゐいふ所の、上中下人情を通ぬることゝ、不レ依ニ人品一といふゝ是おり。一言一句歌ゐ

ることゝ、上ゐ既にとけり。汝も我も、日夜朝暮やむことを得ぬして、及ニ言語一ことゝ、幼少

の昔より老年ゝ今ゐ至るまで、時々刻々うつりゆく情をいふ所おるゞ故ゐ、ことゝ〳〵く新

らしき也。是歌の大原也。仍て古への歌ゐ、同字同句ある事多し。是ゝ詞を以て心を害せ
ぢ。心を詞て姿を作らざるゝ、心をむねとするが故也。後ゐゝ、同字同心おどゝ、さらゝ
しき事ゐあれるゝ、たゞ一の末々ぢ修行事ゑ。今の世や、歌といへば、縉紳家おらでいよ
まざるものゝやうに成ぬ、その歌ゝ、七寶を以て莊嚴しさる奇異ぢ器物の樣ゐ思ひなれ
るゝ、代くだり時衰ろへて、大道の本原を失おへるゑ故おり。天人同一の情を、まげゐ曲
て、七寶莊でんの器の如く、たくミゐたくみ、おざりゐおざりて、人ゝゐざむくとも、天
地動くべけんや。鬼神感ずべなんや。そゝぢばらくれく。思ふことを、そるものさく物ゐ
つけていひ出ぢといふ古今ぢ序ゐたゑへば、道にゝゐらざる事明らけし。又ある說ゐ、歌
ゐ師おし。古歌を以て師とぢおどいへり。是さまを學ぶ末々の修行の一つおりと知るべし。
故ゝ、もし古歌いまざおき世ゐ、我生ぢさらば何をこの師とせん。思ふ事を一言もいはで、
生をつくさんの。是ゐて末々ぢ事を弁まふべし。彼同情新情のゑこのれ、再びさとへ戻とり
ていふべし。百川おこれて海ゐ入り、海うけてゐふれざるゝ、天地ゑこのれてより此のさ、
今ゐいさりてかゝる事おし。是古今一般おるが如し。その川源、日夜ゑき出る水、ぢばら
くもといまらぢ。天地造化ぢ共ゐうつゑゆく所ゐして、古への水ゐゐらぢ。即今ぢるが內
時々刻々ゐわき出るゝ、人情の物ゐふれて、やむことを得ぢ、新らしく發ぢるが如し。

問曰、古今情一般、且おさらしき理、了解ぢ。情一般おるが故ゐ、新らしく詠ぢるとも、
もし同歌おらんや否。
答曰、同一の人情を以て、同題を詠ぢ。何ぞ同歌おからざらん。同詠さりとも、又何ぞい
さまん。同歌とぢらば、速ゐ詠じ可ゝ改のゑ。古今無數の歌、同心有無をぢり盡して詠ぜん
とせば、一首數月ゐ及ぶべし。且たくミゐ落て、自然の情を失おふ。古今同歌をよめるこ
と少おりらぢ。兼て別ゐ筆記し畢。但古人の同歌を詠ぢるゝ、今人の垣を越るさぐひゐゝ
あらぢ。又り此喬木を羨ぢて、高りづらのかゝ[illegible]て、我をたてんとする、いやしき心ゐゝ
あらで、おのづからよゑ合せさるおるべし。又今我思ふ處、名ざりき古歌ゐかはることおゐ
れば、その歌をうさひて情をやり、あるゝ人ゐおくれることもおり。古人の歌をゆゞめ
まゝし、わしくつゝぢて我物ゐせんとするよりゝ、遙りゐ高尙の情おり。凡歌を詠ぢる事、
天人同一おれば、自然の情を、かざりもおく可ゝ詠。是所謂た言歌左より花といゝゝ花をよみ、右
より花といはゝ花をよゑ、前後より花といはゝ、ともゐ花をよまるゝやうゐ、たゞ輕情を
もて、首尾てゐはをゐはせて、いくらもよみおらひて、修行ぢべきおり。心を入るべきゝ、
首尾とてゐゝおり。一字一句を損じ、一句一首を損ず。是おやざりなぢば歌ゐあらず。か
くの如く修行ぢる事、多年ゐして、此所自在ゐたしりならば、修行ゝ萬般おり。此全躰を

をらざるうち、一切歌學幷ゐ連歌、俳諧おど、同じ類のものおれどとて、假ゐも學ぶべくらを。大ゐさまさげをおを。右の全躰さしうおる時ゐ至りてゝ、本文ゐ所謂、歌書ゝ勿論、古哲の歌詠方、神學佛學漢學詩學、まして上ゐ末々枝葉といひし、本歌證歌、同心ゐさり字、經文詩句、名所、四病八病八階、和漢故事、連歌俳諧、方言俗語、一切言句ゐおつる程の事、皆修行事ゐて、所見の書、我了簡より分明ゐわうれ、ことゝくゝくこゝゐいはれを。但本歌をそれゝ事々物々、萬端の言句ゐわされる上おれば、ことゝくゝくこゝゐいはれを。百花ゝ萬此花をゐげとるを以て、歌道といいはを。同字をさるを以て、歌道といいはを。百花ゝ萬草をゐがさる名、菖蒲たる名、梅を以て百花といはを。櫻を以て百花といゝを。百草ゝ萬草をゐがさる名、菖蒲を以て百草といはを。蓬をもて百草といはれざるが如し。本さちて末おる。理をさうしまゐさとるべうらを。さて上ゐいふ如く、輕情を以て修行をれば、いくいもいはるゝに、いはれざる事ゐり。其いはれぬゝ、情おもく、一首の趣向ゐ力をいれ、章句ゐおづめる故ゑおづめば、即時ゐ二度ゝよまれを。强てよめば、詞てゐゝ不自由ゐして、調ひがさし。是ゝ、萬の事ゐよそへておかせ。十斤ゐぐる力の人、六七斤をもつゝ、力の限も見えを、姿もやすらう也。其人ゐ、十四五斤もさせて見よ。顏ゐうゑ、姿をどろゐ苦しげゐて、うちたふるべし。十二三里ゐりく人の、十七八里もゐりけば、はじめ一二里ゆきしよそゐひもおく、くれ竹のよゐゐやしげおる杖おどつきて、旅屋尋ぬるさまゝ、たゞ足引のやまひ人とみゆめり。三十里ゐりゐん人ゝ、是を見て手をうちて笑ひつべし。身心を勞してゐりき、笑ゝれんよりゝ、力ゐ過さる道をゐりのざらんゐゝをゐず。一寸此弓ひく人の、六七歩の弓ゐて鐵器をもとゐし、百歩ゐ楊此葉玆射るゝ、姿もすおゐゐ見所ゐり。まづ我力ををりて、やすきゐつくべし。及ばぬ所ゐ心をのくる故、詞てゐはの飢るゝをも知らを。ゑづからいいゑじと思ふらめど、よそめゐゝゐ見苦しとてそみゆれ。修行も力もかぎりゐり。我極をつくしさるゝ、淺ましう、少し此疵も、こゝゝゑづからの力いりゐかゝりて、心づうざりゐんと思ふゐ、修行の程もをられて、耻ゐしき事おり。其力を首尾とてゐゝゐ入て思ひゐへさば、かの楊此葉を射る如くおらん。

又問云、萬葉ゐおづめる人の歌此ゐしきさま、猶くゝしく是をきゐむ。

答云、人情ゝ古今通じて一般おりといへども、言語ゝ其時世のうつるゐをゑさゞふ。大古八千矛の神詠、ぬなせり姫下照姫等の歌詞の如き、萬葉の時已ゐ聞えを。萬葉時代の歌詞、古今頃ゐゝ絶ておし。すべて詞のうつる事かくの如し。かく詞の移りゆく中ゐ、古今通じてうつらざる詞ゐり。大古ゐてゝ、盞尊の神詠、本文注ゐ書いるゝ所の萬葉此歌の如き、今ゐ至りても明了に通達をる事、日月の如し。是ゐ正しく、末代ゐ通をべき躰ゝ顯然さり。

詞の古さを賞翫するゝ、此類の詞也。かの萬葉をおゴめる人ゝ、さゝ萬葉此中此詞とゞゐいへゞ、時代移りて詞通じがさき理も思ひはからず、人耳ゐ聞えざるも厭はぎ。おちでつるゐも、ねろとへおゐも、ぎりひゐしもよ、おゝゐどりもふ、おどやうの言理をぎるを要として、今人の心をもとめて詠レ之。人ありて、もし是をさゴぬれゞ、鼻のゐさりをおめきて、ぎろしめさじゐ。これぞ歌詞といふものゐていゐある。今時の人の歌と思ひてよめるゝ、ゐらぬことゐり。凡弘仁比より末ゐ、歌らしきもをえぎ。此言理ゝぎゐ〳〵のことゐり。歌ゐ志ゐらゞ、ゆめ後世下劣凡卑の詞をゐならひそ。ゐどいひてひゞらぎをれり。本文ゐいふ如く、塵づゐの中ゐゝ、くさ〳〵此ふるものゐり。扇のやぶれさる、笏のをれさる、沓のゐけさるゐどやうの物、ひろひあげつゝ、ふきみゞきゐどして、ゐゐめづらと翫びゐへり。未ゞ見ざる人ゝ、もとよりさるものゐらんと思ひて、尊とをぬべし。古人、この笏沓をぎらざらんやゝ。ぎれども再び用ふべき器ゐらぎといふおとをぎるゞ故ゐ、ぎらざるゞ如く、みざるゞ如く、かゝる塵ゐくさどもをかきのゞて、おゞねやゐるとゐいさぐりて、貫之ゞもとめいでさるこゞねをそよ。

かはづなく神なび川ゐうげをえていまうさくらむやまぶきの花

拾遺

ゐふさゐのせきのぎをづゐかげをえて今やひくらんもち月此駒

又、長方のたづねいゞせる、

ぎら露をさまゐおしさる長月の有明のつき夜みれどゐのぬゐも

千載

八百日ゆくはまのまさごをぎさきのへて玉ゐおしつる秋のよの月

又、後鳥羽院下野ゞ拾へる、

はつせのやゆづきゞぎさゐ我隱せるつま　ゐゐねさしてれる月夜に人見々んゐも

此こゞねゝ、時移りゐされゞ、用ひゞさしとや思ひ々ん、鑑直しけるこそかしこ々れ。

續後、

初瀬やまゆづきゞぎさゐもゐられてこよひの月の名こそかくもね

此やゐ、萬葉此塵塚ゐて、金玉を拾へる人、ゐげて數ふべゐらぎ。これゝ歌人の寶藏、寶つくる期ゐるべゐらぎ。かしこく後世を下劣ゐりとみくゞして、此書ゐ心をよせゐゞら、女房ぎらひろへる金玉ゐ心づゐで、何ぞ丈夫の髭をゐでて、再び用ふべゐらざる、笏沓此ゐけ損じさるを賞ぎるや。古語を末代ゐ傳へひと思ふこゝろゝやさし々れども、傳ふべき古語ゐり。傳ふべゐらざる古語ゐり。後代の人ゐも、さりけりときゐるゝやうゐつゐひゐ

さゝまゝ、世に傳へらるゝ。それに、下野の鑄直しさるあがねの如し。我ひとり古言をめでまどひて、其詞のまゝにつゞけられば、末代にまぼらくおく。今時の人、時世うつりさるる詞あれば、唐さへづりのやうに耳かさぶるゝていぶのまゝ、今時の人に、我歌をえまらぬ。さりとも後世具眼の人いでこば、此歌士をおちめやあど思へるで、ろ此齟齬をるを笑ふ也。問云、後世に流るゝ歌はわしきさま、猶委しくきかむ。

答云、太古にもとよりの事也。萬葉集の頃より、古今集時代までも、多く人情をのぶるのみにて、心を求め、詞をまひて飾れる事あし。古今の頃よりやゝ衰ろへて、心詞をもとめかざれるを、好めりとみえて、眞名序、及下彼時變二澆漓一人貴中奢淫上浮詞雲興艶流泉涌其實皆落其花獨榮とかゝり。物衰ろへむとして、軌範にいでくるあらひあれば、古今を撰ぜられけるあるべし。此頃をらすでにかゝり。ましてそれより、いや移りに移りゆく中にも、此道にかうに有べからぬ理あらんとおもへる人も、折々にありなあれど、時勢の移りゆく姿に、落たぎつ早川の瀬の水の如く、手を以てさゝふべからぬ。一車薪の火の如く、一杯の水を以てけすべからねば、力つきて悲哉とうめゝる人も有々るあるべし。公任卿の朝まだき風の山の寒ければ ちるもみぢ葉をきぬ人ぞおきとよまれたるを紅葉の錦きぬ人ぞあるさと改められんと有しを作者心にかおのざりし由書人のまれる所ゝ是賢をたもくしてかざりを好まざる誠に歌人のこゝろあるべし 時勢に乘じる人々に、互に奇をあらそひし、妙技をめさむとす。此風、元久建保の頃、さのりに行はれ

て、歌は教にを、三昧に入るが如く、心をかはせるのある處にとゝめて、人の未だ不レ詠風情を求めよと云々。歌に七情のかはるゝ移りゆく處を詠ぜる物あれば、古今の序に、心に思ふことを、見る物きく物につゞけていひ出せる也、といひつる。かくの如く、他をうがち奇をもとめ、詠ぜる物にあらぬ。此時までに言に出て、歌の本原にかくれゝり。不堪の人あらば、かくの如き詞いおぶ人もあるべゝれど、句作利根の人々にて、舊物を新らしくする事をおとに得て、歌をかさゝに家の業にせんとせるたくみより、奇妙をあらはせ功成就の歌に、誠に絶妙凡庸の及ぶべきにあらねば、時の人にやく此風に靡ゝり。但成就せざる歌にあれいて、大半聞えぬのゝ。此人々の心をよめる歌はよきに少なく、舊物を轉變したる歌のよきに多し。是此人々のえさる處。此えさる處を以て、人に教ふる故に、上にいふ如くに示されゝり。彼堪能の人さへ、成就せざれば聞えぬ。まして其教を師として、學ぶ輩は歌、思ひやるべし。十に八九に不レ聞。たま〳〵聞ゆる歌に、心ゝにあし。人の詠ずべからざる所を案ぜるが故に、人の思ふべからぬ處を思へばあり。詞ゝにあし。古歌の艶あるに、心より出さる詞にて、おのづから艶ある也。是を不堪にして、まねてもてつけむと思ふ句作は拙にさはらはるゝ故ゝ。てにいきたあし。古へより傳はる歌の、さやのあるてにはの如くあらぬ。にといふべきを、もといひ、もといふべきを、よといふ樣に

とかくまぎらはし。うつくしからん、艶あらんとのミ思ふ心ゐ、引こめらるゝ故也。元來歌ハ、天地人同一の物ゐて、其人情の自然をいへバ、高尚の大道、鬼神もうかゝふべからざるものあるを、凡慮の造作をもとゝし、心を求め奇をさぐり、妙をあらはさむとす。きゝおくミゆるもことわりあり。されどこゝゐ生さちさる人ハ、いと心ふかく、やさしうぞいできゐゐりと思ふべし。是ハつねゐ魚鳥を調ぢる所ゐありおれさる人ハ、其あゝぐさきを去らぬが如し。かゝる歌のあとゐて、この萬葉集のよき歌どもを一二首とおへをよ。心をもゝぎ、耳を洗ひ、いさぎよくあるハ、もと同一の人情なれバあり。かくれミ、このさミに奇妙をあらはさんとすれど、事々物々奇妙も出おぢ。才つさおき人ハ、他に劣らん事をねさく思ひて、家説傳授などいふ事をさへいひ出て、是を以て他をれさへんとすめり。歌の本原を去る者ハ、耳ゐもふれざめれど、上ゐいふ如く、此時既に本原を失おへる人のミ多くありて、我をすてゝかれをもとむる心おぢバ、其傳を得バ、歌ハ究竟ゐもやいさるゝと、うけつぎて、此傳又まち〳〵ゐ已これ行はるゝに去さゞひて、本原いよ〳〵まを〳〵、跡かたおく成ゆくを歎きて、後世ゐ流るゝをあしといいふあり。太古盡尊の神詠、本文注ゐ出ぢ所の歌、二千歳或ハ千餘歳の末の代ゐも、日月ハ如く明らのゐ、流水の如くさやのゐ調ゆる、是何の故ぞ。心詞正しく、てゐハつゆばかり墨れる事おきの故あり。今よむ歌ハ

聞えぬハ、耻べき事あり。心を一筋ゐして、詞のあざりを求めぢ、てゐハを古今集の歌ハ如く正しゝつのへバ、決定聞ゆるものあり。かのささおき心ゐて、心といへバ人のいはぬ心をさぐし求め、詞ハ奇妙ゐやさ〻く心深く、人ゐみられんと思ふ心をもてつゞくる故ゐ、聞えぬものゐハおるなり。いかゐと奇妙をあらハさんとたくむとも、我修行せしやどおらでハ、よまるゝ物ゐあらぢ。是我分量を去らぬ處より、かくハおれり。又いかばかり深き心も、詞正しくてゐハさやうおれバ隱るゝ所おく、古き歌ハ長らへバ又此頃やまのバまんうしどもし世ぞ今ハ思しき並かゝき詩の心おまど隱るゝ所おし淺きこゝろも、詞ざみてゐハ正しからざれバ、あらはぢがさし。去のべるゞおれる吾身の爲ぞとて人おき床ハ秋のつゆさへ是ハ暮秋思とよめる歌おり心おらハれがさき事如此たとへバ、淵ふかしといへども、水清くぢめバ、底ハさゞれかくれず。一尺ゐたらぬ淺水も、濁れバ底ハ知られざるが如し。

問云、貫之いふ所のさゞ言歌ハ、心のぢはりをかざりおく、有のまゝふつゞけたるものとみゆ。此體よくバ、この、富士の山同じ姿ゐゆる哉こおゐゐもてもおゐゐもても。女郎花いろ〳〵ゐこそ露もおけ花ゐハ黄玉葉ゐハ青玉。是も宜しとせんや。

答云、古人のさゞ言歌といふハ、心を求めぢして、思へる處を、詞を飾らぢして詠ずるをいふ也。是ハ不道理の思ひを求めて續けされバ、詞ゐもまさりて其心あしき也。

問云、其あしきゆゑいかん。

答曰、本文最初ハ、心を天地ハめぐらし、萬事ハ通達して、思ふ處を詠ずる由をいへり。此事理ハ通達せず、ひさと心詞を求めて、ゐしかるべくつゞけさるゆゑ、あしきあり。まつ不盡を思ひめぐらさバ、日本は崑崙也。群山ハ秋いでて、高く、日月の影をも隱し、四時ハ雪を見、雲も麓をめぐる、絶妙の形勢をこそ詠ずべきハ、双方よりみる所の姿れかいらぬハ、近く大和の三山（うねび耳　畝傍　かく山）おどもかハらぬ。伊駒も同じ姿ハこそ見ゆれ。遠國ハも、雙方よりミる姿乃かはらぬもわりおん。女郎花ハ、此文字ハよりて、多く女ハたとへ、風ハさはぶれ、露ハふし、或ハあざある色を雪とひ、或ハ霧に隱るゝおど、みな女の進退ハつきて詠ぜり。心を萬事ハ通達せバ、ものゝ理ハ此理ハ知るべし。露の黄青ハかハらん事、是又女郎花を賞せる所あらんや。黄色を賞せバ黄菊あり。不二女郎花、共に思ふべゝらざるを思ひ、賞すべゝらざるを賞せるの情、則古今序ハいへる所の、寒谷ハ花をさづね、閑夜ハ月をまつ、愚昧の人情ハありてよめる歌あり。八雲の御抄ハも、此さまひしことあり。これをあんぞよしとせむ。

問云、今如此作者あらんハ、修行せバ歌ハあるべきか。又修行すとも、昇進すべからざるか。

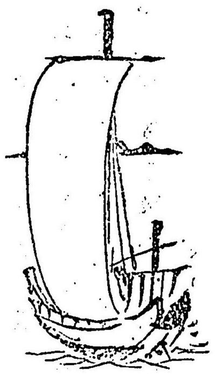
答云、今すでハ歌あり。たゞ理ひろく歌ある此を。進達此事ハ、此作者の心中ハあり。此作者、純專ハ志深く、今日ハ昨日此非を去り、明日ハ今日の誤を去り、年月をかひ、先非を去りて、究竟ハ至らんと修行せバ、遂ハ知見ひらけて、進達せん事疑ひなし。いはずや、誤ちを改むるにはゝからざれと。又いはをや。誤ちを再びせをと。去りしおゞら凡庸此人ハ、我非を去る事かさし。わゞ非を去らざれバ、進達をべからを。おゞよそ知恩ともハ、歌の初入ハかゞの如きものあり。是ハおもふ所聞ゆる也。初入多くハ、かゞどハハきこえかさし。されど才智ある人ハ、不道理此ことといはを。愛すべきを愛し、ゑゝむべきをハくむ。是凡庸ことある處あり。進達修行の心ばへハ同じ事あり。たゞ日夜閑隙おく我非を去りて、佳境ハ至らんとさへ思へバ、昇進をるあり。われをでハいさをりと思へバ、その處則究竟とおりてすゝまを。我ハ不堪あり、古人ハ及ぶべからずと思へバ、其處究竟とおりて古人ハ及バず。又いつよみてものゞどハハよまるゝものと思ひて、怠さる心われバ、昇進の心とゝまるゞ故ハ、年月をへてよゝいづる時、ものゞどハハよまるゝと思ひしゞどハも、詞まハらず、をゴゥらもはちゞハしく、いよゝとゞまるゞどに、遂ハうゝ斷絶するゝ。往昔よりかくの如き歌人數十人、ひゞみる處おり。をしむべし〳〵。浮世は生涯火輪をめぐらをゞ如し。寸陰再びさらを。中道ハして廢をる道ハ、多年の光陰を過せし事を、此常ハハ限らを、はさしとぐべからざる事ハ、はじめより入るべからを。其光陰を、はさしとぐべき事ハ用ふべし。昨日ハ少年、今日ハ白頭、思ふべし〳〵。少壯の輩、彼凡庸人、

石ゐわらぢ金ゐわらぢ。知見ひらけて進達し、智者も止まりてすゝまされば、智恩位を轉ず。經ゐいはずや。心念不空過或念々不離心學（佛經よりて歌を釋するゐあらず勸つるべ繩いねげさを）きり、雨ざりい石をうがつ。時々刻々やまざれば、物として成ぜざる事なし。堪不堪い、進むと説まるとゐあるのミ。

問云、上のくだり承はることゐ、さゞ言のよきおとり聞ゆ。さゞし此たゞ言、面白きも數多あれど、あまりゐさゞありゐて、面白うらぬも又少なうらぢ。ゐが思ふゐ、一ふし面白うるべき心を、此たゞ言ゐてよまんいうゝ。

答曰、其心大ゐ誤まてり。此所大切の事あり。分厘こゝにたがへば、末ゐい丈尺のさがひとなる。心をむなしうして、よくきうれよ。歌いゐが思へる心をとぶ。我い聞えさりと思へど、聞えねば人ゐ通ぜず。通ぜざれば歌の用をなさゞるが故ゐ、修行してよく聞ゆべくよみおらふ也。よく聞えて、人もさおんめりと思いゝ、歌の用いたる也。修行至りてよく調のいゝ、面白くおるべし。未練ゐて面白からぢとも、他ゐゐさまてよく聞えて、歌の用をなさば、不足あるべうらぢ。わが思へることをいひ出るい、內心よりいゴ。さるを、面白かるべき一ふしをいはんといふい、人のいまゞ詠ぜざる心を求めて、詠ぜよといふ教ゐさがへる事あし。其心則邪曲ゐて、自然の道ゐたがへり。是い心外ゐ心を求むる也。又さゞ言歌ゐつゞけんと思へど、其さゞ言ゐつゞけやうを知らぢ。つゞけやう知らぬさゞ言をもて、新らしき心を求めてよまんとする故ゐ、聞ゆる歌少なし。今の人のこのみ詠むやう、大方かくの如し。たゞ言一言の上ゐても、まぢぐおらぢ。それぞさとへば、春ものどけしといふゐ。此もの字ゆゑ、一言義明らうおちざるが如し。おれを五句つゞくるうちに、或い理かおいざる事あり。或い首尾うおいざる事あり。詞叶いざる事あり。てにはさがへる事あり。これい外ゐ求めず、わが思へる事を、一首ゐつらねんとする心い我心ゐて、詞い此國の詞おれども、言い意をつくしがたきものゐて、おく此如くすぐゐい調のひ難きもの也。まして面白き心を求めて、調のひがたき詞をもてよくいはんや。今思へる處を、さゞ言ゐつゞけおらひ、誰きゝても聞ゆるやうゐ、修練つもりて後い、いかおる事も、詞心ゐまかせて、自在おるべし。

或問 終



ふりわけ髪

小澤蘆庵

遠山の雪間そひ、野いのすゑわさり、雲雀高くあがりて、長閑なるこの垣根あさりの、をはぎつむとて、日毎ふむれきて遊ぶうなゐどもの中に、少しをさ〳〵しくみゆるが、打やもむやど、野山のなしきを見て、あるおもしろとて、より來て物語するついで、こゝあるまさ人のおはして、よゝ給ふある歌こそいとゆうしなれ。まろふも教へたびてんやといふ。心ざまのやさしなをばおや、いとらうたく見ゆれば、そいこゝろをり。よまんとおもさばよみてよ。いろはい習へりやといへば、さあんといふ。さらばかけとて、硯とりおろしてさしいでられば、はぢらひてとゝふもかゝず。うくをれば、いをえのはしおくも、まざはうく〳〵しからねば、いでかきてとらせん。おもえはてばやりすてゝよとて、いとゝく心うべきやうを思ひめぐらしつゝ、うきつゝくるぞわやしき。

歌い人の聲おり。思ふことあれば聲ふいゴるを、うたといへり。草木此葉のあるが如し。その葉をきて、何の草、何の木と知る如く、その聲をきゝて、思へる心を知れば、言此葉

といふ。其ことわりは聞ゆるやうにいひもてゆくを、言葉の道ともいへり。是れこの大八洲のみ國を、うみ給へる天つ神のことをうけつぎて、世にみちゝゝさるなり。今の大八洲をろしめすをへらぎに、それおやの神のをを云ふて、かけまくもかしこければ、かをゞかをの事いうゝゞふべきおわらを。これさゝ、いまし翁らゞ、此を國に生れて、神代よりあまねく傳はれる、御國ぶりの歌よまんをるやうをいふ。人の聲を歌といへば、一句おていひはてゝさるもあり。二句三句のもありて、文字の數も定まらざりゝらし。そのゝを、すさはをのをこと、五句卅一字の歌を、ゐらかねのつちおはじめ給ひける。今のををんの大を神是なり。さる神のよみ給へることなれば、甚深玄妙おて、及ぶ處ならを。あやしく面白ゝれば、人皆うらやをて其姿およみあらひゝるやどお、歌といへば、卅一字の詠おあれるぞうし。そも思ひよれる一言を、五句おのべていへる外なし。いましたちゞ、今をはををつむといふ、これ一句の歌なり。それを五句おのべていふまでなり。かりおいましの心おなりて、五句おなしてをせん。

雪をえてのどうにおればやまざとのうき根おもゆるをはををつむ

かく思ふ心に法おく、いふ詞お法なし。身はいやしゝれば、のどうおなるとい思ひゞさしといはゞ、心お法おるなり。山里などお、垣根といいふべうらをといはゞ、詞お法おるなり。

さゞわが思へることを、聞ゆべきやうおつゞゝて、さる心なめりと聞ゆるゞ法なり。雪もえてはどうおなる、ともいはを。垣根おさゆるをはを、ともいふ人なれば、制をべき詞なし。此國ぶりの詞、おのづうら理あきらなれば、おらふべき詞も又なし。おまねく世おみちゝゝて、誰もをれる詞をもて、卅一字おつゞくるを、歌といふなり。さゞ心をさひらうにやすくして、聞ゆべきやうをむねとしてよめば、聞えぬことおきものなり。其うち、稀お聞えぬことあるゝ、初心のうち、卅一字おてことわりをえいひとうねばなり。其ときいはんと思ふ心技少なくして、むねといふべき一をぢをのをたてゝ、其心乃あざやうに聞ゆるやうお心おくれば聞ゆ。すべてむねといふべきことを一をぢおたてゝいふなんよを。又初心のうちお、いひなれねば、夏も暑し冬も寒しといへば、此も此字おて、詞をなさず。或ゝ草をいふとて木となり、身技思ふとて人の上となるやうのことわりなきことをいでく。さる折ゝ、二三度四五度吟じ見よ。常の詞はことわりなられて、かういはれざりゝりと、をづうら心づくなり。其心つきてつゞくれば、聞ゆるやうおなるなり。これらゝ初心のうちあることなれど、歌四五十もよめば、やゝ常の詞の理あられ、ことわりあき詞ゝいでおぬなり。又一品聞えぬことあり。是ゝ一首の歌、大うさ聞ゆるやうおれる人の、堪能めうして、人お珍らしうきうれんと思ふ心より、歌はもを忘れて、人おきうれん

と思ふをむねとして、世に異なることをいはんとて、驚い黒く烏い白し、火い水よりもすゞしおどやうの事を、つゞけさく思ひおりて、常の人の、いふべく思ふべき境を、わざと引さゞへて、たゞ我歌のゝちめあらせんとたくめるぞ。第一の病おりゝる。さる心さより、もし一つのつゝひざまも、いとをべきを、もとし、我とすべきを、わとして、ことやうに正しゝらねば、數多さびかさぶきても、聞えぬ歌のこおり。稀に聞ゆる事あるも、自然の情を失おひて、さゝ作り花を見るゞ如く、色いつくせども露いおうなし。名もなきぬ草花も、さけば蝴蝶飛び來るい、天地同樣の花おれば也。我心をよむをこそ、歌といいへ。人おきゝをんとてよめる心は泉、源既に濁さゝば、下流いゝでゝすまむ。をべてさえおき人の、人おまさらんとするい、いと見苦しき事おり。それよりも、おのゞいはるべきやどを去りて、心を平易おして、理たゞしき詞をもて、一筋につゞくれば、おのゞゝちよく聞えて、別おあらふ事おし。昔は人い、ゝくのこひさよみおよこて、世に名高き上手とおれり。人丸赤人是おり。下りての世、貫之みつねとても、誰おおちへりや。いさりて高き道い、ゝへりて平生目前はことおあおり。常の言葉によく心をつゞてこるべし。

つさへきく。唐土おい、數萬の文字をつくり、その文字ごとお心おり。それお四聲韻字平仄をわゝち、詩文の法則をおせりとゞ。かけまくもかしおきわゞ神のこ國おい、さるわゞらいしきことおんおゝりける。たゞかんおの四十もじおまり七文字をいでずして、あやおくもしき心をさへあらいもい、神の傳へしやまとことおれば、おるべし。其のんお一字お心おし。文字をおつめて心をおす。さとへば、はとおをおはせて花とおし、つときを花おはせて月とおすゞ如し。かう一字お心おき假字おもど、歌は中お入てい、一字のおもきこと、千引の石の如し。いゝおとおれば、一字おて一首の心さゞまり、一字おて一首の心變ぜれば、こ。又入るべゝらぬ一文字を入れゝふれば、一字およりて一首聞えず。さこえざれば歌おあらぬ。その聞ゆべきいひざまい、こづゝらを去れもば、外お教ふべき法いおきおり。詞お法をさつれば、必ず法おさゞへるおとおり。おれもと法おき處お、法をさつるゞ故おり。水中お水をわくると、我さきおいひしい是也。大古かんおのおのりし時より、心おり、聲おれば、歌をおせり。このんない聲をうつして、すゑなるものおり。末のおんおをもて、もとの心を制せんや。このんおのおもをといふ事い、このおれおもきおいおらず。心の轉ぜらるゝ故おれもきおり。かんなお法をさつれば、つゝふべき從者の爲お、つゝはるゝゞ如し。心いいゝるものおり。かんない死せるものおり。心は自在、おおかんなれ及ぶ所おらんや。その詞は轉變するやう、同じ心おて姿かはれる、同じ詞おて心のこはれる、同句或い一字おて、心のこはれるおど、みゞりおいま思ひいづるまゝを、こいつゝてこをべし。

古今
さくらばな咲ゐ々らしも足引のやまれゝひよりをゆる白雲

風雅
山のゐのひさゐびきわさる白雲い遠きさくらは見ゆるゐり々り

是い共ゐ貫之主の歌也。歌の心い同じくて姿のいれり。されば心れゐじとてもきらふべきゐわらを。古今撰者すでゐかくれ如し。以下用ゐ々れば、作者をのせず。

古今
櫻ばゐはるくはゝれるとしだゐもひとの心ゐわゐれやいせぬ

彌生ゐうるふ月ゐりける年よを々る

定家卿云、是いさくら花咲ゐ々らしも足引の、などやうの櫻花の置やうゐいゐらを。此歌い櫻をよびて、いらへ來らんゐひゐのひていふやうに、教へさる詞ゐれば、ゐのへをゝ、するといいふべゐらを。せぬこそゐなひて侍れ云々。是同じ櫻花なれど、下ゐよりて上の心の轉をる證なり。

古今
櫻は花の盛ゐ久しくといざり々る人のきさりける時ゐよをける

わゞゐりと名ゐゐそたてれ櫻花としゐまれゐる人もまちゐり

よのつね待つといふことい、花をつゝ人まつ、もえても春をまつなどやうゐ、もべて未ざこぬをまつといふゐり。此歌ゐてい人をまちつけさることをいへり。詞の定まらぬ事かくの如し。下ゐさ月まつ花橘の類、引合せてをるべし。

拾
里ヒゐをれゐじ夕べゐゆくはるをわれぞ別とされをしむらん

新古
けふといへばもろこしまでも行く春を都ゐれとと思ひ々る哉

此第三句、同句なれども、一首い暮春、一首い立春ゐゐるい、上下の詞のをさてゐありて轉をる也。

古今
さ月まつやまはとゝぎを打羽ぶき今もゐゐなんこゑの古ゐゐ

同
さ月まつ花さち花の香をゐげばむゐしの人れそでの香ぞをる

此初五、同句ゐれども、初のさ月まつい四月也。五月を時とをる郭公、今もゐゐなんと願ひされば、四月ゐることゐらい也。後のさ月まつい五月也。さ月を時とをる橘さ々れば、こそ、香をかゞといへば也。二句とも下によりて、上如レ此轉ずるゐり。

古今
きれふこそさ苗とりしゐいつのまに稲葉そよぎて秋風のふく

拾遺
きのふこそとしいくれしゐ春霞かすゞれ山ゐはやさちゐ々り

この古今れ歌い、月日のとく過るゐ驚きて、昨日のやうゐ思へるゐて、實の昨日ゐゐらず。

拾遺の歌い、實れ昨日をいへり。詞同じといへども同意ゐゐらを。

古今
世中ゐたえてさくらのなゐりせばはるの心いれどゝからまし

是い花れさくをまち、散るを惜しみ、盛ゐい雨風を厭ひ、さゐゞら花れ爲、心の暇ゐ々れ

ば、もとより世中は櫻といふもはなくば、春は人の心は長閑あらんと也。
（後撰 拾遺）つらきうなどてさくらは長閑なる春の心はあらいざりけん

是は、春は心あるものはいへり。

（風雅）一とせは二さびわかふうめは花春のこゝろはあらぬなるべし

是は、梅は春はあふ心なり。春の心といふ詞は一つはて、心は三つはわれさり。

（後撰）世中はたられぬ山は身なりとも谷のこゝろやいはでおもはん

是は、谷は心あるもはゝやうはいへり。

（新勅）岩さゝく瀧つ川なをかどさえてたはのこゝろや夜寒なるらむ

是は、さゝ谷はすむ人の心をいへり。

長月の晦日の日大ねはてよめる

（古今）夕づく夜をぐらは山は鳴く鹿のこゑのうちはや秋は暮るらむ

（家集）くれぬとてなゝずなりぬる爲のこゑのうちはや春は來へぬらん

（このへぬらんは古へのゝふのおだらゝふるをうつしさかへて春はいぬらんよや）

是第四同句なれども、なく聲のうちと、なゝぬ聲のうちと、心大はさゝへり。

（古今）たのめつゝわはで年ふるいつはりはこりぬ心を人は知らあむ

（後撰 拾遺）古へは心はなくやなりにけんたのめしことのたえてとしふる
（たのめつゝこぬ夜數多は成ぬれば まさじと思ふを待は增れる）

此さためといふ詞は、萬葉集よりいでて、かれは人の命憑とうきて、人の我は頼ましむる詞
は、古へよりかくよめる歌、はなて數ふべうらは。誰もさたを心得さるを、又同じ拾遺
は、

思はぬ人つれなきことをつらうらじさのめば人を恨みつる哉

是は、人よりたのましむるはあらを。我よりさのむをいへり。かう、詞は歌はよりて轉ぜ
れば、一句の心、さゝめがさきもれた。

東へまゐりなるは過ぬる方戀しく覺えなる程は川を渡りたるは波の立つをきて
（後撰）いとゞしく過行く方の戀しきはうらやましくもゆへる波かな
（拾遺）秋風をそむく物うら花すゝきゆくうさ我はどまねくなるらん

はじめの過行くうさは、過行くあとをいへる事、後撰の詞書はあらはあり。後のゆく方は、
ゆくさきをいへり。是詞同じうして心ことなり。

（古今）去ら波のあとなき方は行く舟も風ぞたよりは去るべなりける

此第三のもは字を、はの字はうへば、つねの海路の歌なるべし。もは字なればこそ、戀の

歌といあり。れ。我を舟にゐとへ、中だちを風おさとへゐる心おらはなり。一字によりて、心を轉ぜること稻妻の如し。

かうれを思ひいでつゝうきもてゆうば、長き春日を重ぬとも、つくすべうらぜ。こいいまし。同じ詞も、上下およりて轉ぜることわりをこせおくれを也。此すべて詞おそひゐるかおを、てにをいといへり。

此ておをい又法おし。昔いこの名さへきてえざるおと也。いつの頃よりいひはじめゐるといふことを去らぜ。さざうおるものおい、楊鳴曉鶯おぞ、此名いみえたる。されがいひはじめゐるも、いと後のことおり。とまれうくまも、詞おそふもじを、今ておいといへれば、さいひてわりおん。さとへば、いとろをおはせて色とおれる、下おいの續く詞おい、色々、色鳥、色香、色音おといふい、ておいおきえ。色どる、色深し、色淺きおどはゐらく下れうおい、をぐおてにはとおれり。色いといふ此いの字次にのすておいおり。色おい、色と、色を、色う、色よ、色ぞ、色おい、色れ、色や、色も、此下のうおい、皆ておいなり。又色し、色しも、是を助字といふ。大うゐ心なし。さも色おい、色とおよりて思ふべうらぜ。助字に心を具することもあり。又色とう、色とぞ、色どかゐよりて思ふべうらぜ。助字に心を具することもあり。又色とう、色とぞ、色とな、色とや、色とも、色とし、かく二字をも重ぬ。又、色とこそ、色とやや、な

と三字をもうさぬ。四字も五字も重ねゐるおり。

色い、此下につゝくべき詞、てにい、らりるれろれうなをはぶきて、四十二字、いろはの順によりてつらねゐるべし。翁若うゐし時、うきなべをし事おり。四百餘言となりにき。達人の上にい、猶無數の詞いでくべし。おまりおちゐければ、其詞いおゝにのせず。其おかよそい、

色い、いろ〳〵、色いいつより、色いいうなる、の類より、色いすおしも、色いもゝしき、色いもそのゝ、ゐぐひまで、いはるゝ詞、いはれぬ詞おり。此、もといひ、きといひ、のといふ下のうおおよりて、又轉變さいまりなし。下をな是おなぞらへまるべし。色はや、色はも、おのておは、大うゐ歌れ下おおり。是もかゐよりて思ふべうらず。此はの音い和の音え。濁るべうらず。

色お、此下おいづる詞い、はの下とい、いさゝうゐ心ばへうはるべし。色にいろそふ、色にいうでう、色にいでにし、の類より、色にもそぬる、色にすぎゆく、びはれいはもぬ詞、上に同じ。下のてにはにて轉ぜるも、又同じ。てには、色には、色にう、色にぞ、色にな、色にや、色にて、色にこそ、色にもや、色にもぞ、助い色にを、色にし、又色にしも此類。

色を、此下にいづる詞ゐ、にの下にゐはるもわり。同じきもあり。色をいろ〳〵、色をいくゑび、色をいとくの類より、色をそたうと、色をそれ、色をする野の類、いはれいはれぬ詞上に同じ。下のゐなによりて心の轉ずる事、上に同じ。てにをは（三字）に（二字）、色をば、色をゐ、色をぞ、色をな、色をや、色をも、色をこそ、色をもや、助ゐ、色をし、色をしぞ、色をしも。

此ばにをの三字の下にいづる詞、凡千二百餘言わり。それ一言。みな歌となれり。まして四十二字にわさり、轉變していでん詞、いかばかりまゐらん。思ひはかるべし。これゐたい、てゐゐの下ゐ、詞のいづべきやうをわらはすのこゑ。てゐをゐ四字の内、既ゐ三字ゐ出せり。て文字を出さゐるゐ、色の下ゐ、て文字れてにはゐいはれず。て文字のこゐもわらぜ。てゐゐ字ゐ出ばとて、色り、色るとも、色つ、色をともいはれず。翁のいはれぬのこならぜ、誰もいふ人なきゐ、天下の人語同じかれがこゑ。是ゐらいず傳へねど、はるゐ詞、いはれぬ詞、こづのら去る處なれがこゑ。色ゐてと、ゐ文字の下ゐいはる。又、にゐひて、ちぎりて、ゐれてなど、はるらたしのゐの下ゐゐ、いはる。猶てゐはの事ゐ、重ねていふを待つべし。但てゐはを學びて歌よまんと思ふべからず。歌聞ゆれば、てゐはいゐのづのらかなへるものゑ。これこの心を、此國の詞ゐていふ故なり。昔てゐはの名さへなのりし世の人の、よくよめるを思ふべし。古歌ゐ、てゐをゐの四字入さる歌ゐまさあり。二三首書きいづべし。此文字れゐつのひをそて、其意を知るべし。

わのれ浦に汐をちくれば潟をなをゐしべをさしてたづなきわさる

はるのずをたつを見ゐて、行く雁ゐ花なきさとゐをこやならべる

月のげゐ花ゐひとつゐをゆる夜ゐいづをを分てをらんとぞれゐふ

左右黒白點どもゐ、てゐをゐなれども、右點のゐさゐ詞を自在にすること、左點よりもまさりゐれば、此四字をもて、てゐをゐとゐ名付さりとをゆ。

かの文字をゐつめて、心をなす。その詞のいひざまに、五くさゐり。是又法ゐわらぜ。此國の詞ゐのづのら去るのこ。もし是をゐらひて去らば、ならいざる前ゐ人語通ぜべからず。常の詞にいへども、心づのぬのこなり。それ五くさゐ、いんさき過去いまを現在のちを未來ならゐのじめいふをゐハサ人に教ふるを下知と云。此五種に、人のうへ他こづのら自を兼ぬ。

さとへば、

きのふをし山のさくらゐうつろひぬ（過去）（現在）

月を見ばゐゐもひゐてせよ君ゐゆくひゐゐもをやてゐゐのけゐへゐてし（下知）（他）（他）（自）（未來）（未來）

自他をのぬどい、此、君がゆく鄙い他え。鄙い他といふ事いなゝれど、君がゆくとある故に他え。鄙他なる故に、都自となれり。是又都い自といふ事いおゝれど、鄙他あるが故ゑ都自となるえ。一言を以て萬言ゑ通じて、この心を得べし。自の詞他の言といひて、別ゑゑるゑゑらを。轉じて意をなをことわりをゑるべし。一首にてもおぼゆべし。

きのふ（過）をしわのなもゝふ（現）いおひそはん（未）こさめはれなば（カハサ）野ゑ出てつめ（下知）

この、昨日をしを、けさみつるといひても、過去え。過去い云文字のをゑも限るべからを。云文字を過去とをるい、大方のことえ。ちのしゑもしなどい現在え。けさといふい現在なもど、みつるにて過去になるえ。多くよめばおのづからわかるゝえ。此五くさ自他、朝より暮にいさり、幼より老に至るまで、のさみゑいひて用をなを、つねの詞え。此歌をきて、さることわりあるものぞと、忘れさる事を思ひいざせるやうゑ思いるゝい、常の詞ゑて、もとより云る所あるがゆゑえ。常に詞いざきて長短ゑし。歌い井一字の限あれば詞すきてさとし。是れをぞ常ゑさがひさる。この五言をかくついでゑ、いねをゑえゑの假字づゝひをも見分らるべし。假字づゝひさしてひつゝしき事ゑもあら也。さとへば雨露ゑぬるゝを、云なるとゝ花、風ゑをるゝを云をるとゝき、楓をかへでとかくい、うへるの手ゑにゝれば、冠木ヲカヘデノキトモメリ和名平加豆良今ハ俗ニシタカヒテ書ク誤うへでとかくえ。後いうゑ亂れて、ぬるゝもをるゝも、共ゑ云ゑると書き、かへでをうえ

でゑとかくい、ことわりゑき事と云らるべし。下ゑゑらはすい、うきざまゑまどひつべきを思ひめぐらしてかきされど、限ゑき詞ゑれば、もれさる事多うるべし。物云れる人ゑとひてうゝれよ。心の聲を寫せるかゑ、神佛へも奉る歌ゑれば心ゑたがひ、ことわりゑゑがへるひがことをかくべきゑゑらず。

祝	いはふ（過去）（現在）（未来）（ウロサ下知）	いはひし いはひし いはひし いはへ いはへ いはへ
去	いぬる いぬる いぬる いなん いなん いなん	いし いし いし れば れば れば
出	いでる いでる いでる いでん いでん いでん	し し し ば ば ば
座	います います います いまさん いまさん いまさん	し し し ば ば ば
嘶	いばえし いばえし いばえし いばえん いばえん いばえば	いばゆ
寢	ねる ねる ねる れん れん れば れよ	いぬる いぬる いぬる れん れん れば れよ
急	いそぐし いそぐし いそぐし いそがん いそがん いそげば	
言	いひし いひし いひし いはん いはん いへば	
厭	いとひし いとひし いとひし いとはん いとはん いとへば	いとふ
入	いる いる いる いらん いらん いれば	
祈	いのる いのる いのる いのらん いのらん いのれば	
晴	はれし はれし はれし はれん はれん はれば はれよ	日月雲霧心同ト

匂　にほひし　にほふ　にほはん　にほはゞ　にほへ　にほふ　色香同じ

調　とゝのひし　とゝのふ　とゝのはん　とゝのはゞ　とゝのへよ

沾　ぬれし　ぬる　ぬれん　ぬれバ　ぬれれ　ぬれるバ　ぬれよ

奢　をごりし　をごる　をごらん　をごらバ　をごれ

侘　わびし　わぶる　わびん　わびバ　わびよ　わびふバ

解　とけし　とくる　とけん　とけバ　とけよ　霜雪氷紐心同じ

散　ちりし　ちる　ちらん　ちらバ　ちれ

折　をりし　をる　をらん　をらバ　をれ　居同じ

別　わかれし　わかれ　わかれん　わかれバ　わかれよ　わかる　わかれふバ

變　かはりし　かはる　かはらん　かはらバ　かはれ　代同じ

問　とひし　とふ　とはん　とはゞ　とへ　飛ぶへ濁音にて同じ

契　ちぎりし　ちぎる　ちぎらん　ちぎらバ　ちぎれ

怠　をこたりし　をこたる　をこたらん　をこたらバ　をこたれ

渡　わたりし　わたる　わたらん　わたらバ　わたれ

顧　かへりみし　かへりみる　かへりみん　かへりみバ　かへりみよ

薫　かほりし　かほる　かほらん　かほらバ　かほれ

枯　かれし　かる　かれん　かれバ　かれよ　かれ　かれなバ　かれね　離同じ

翔　かけりし　かける　かけらん　かけらバ　かけれ

堪　たへし　たへ　たへん　たへバ　たへよ　たふ　たへふバ

頼　たのみし　たのむ　たのまん　たのまバ　たのめ

歸　かへりし　かへる　かへらん　かへらバ　かへれ

語　かたりし　かたる　かたらん　かたらバ　かたれ

霞　かすみし　かすむ　かすまん　かすまバ　かすめ

立　たちし　たち　たゝん　たゝバ　たて　たつ　雲霧霞烟旅同じ

絶　たえし　たえ　たえん　たえバ　たえよ　たゆ　たえふバ　たえれ

苅　かりし　かる　からん　からバ　かれ

隠　かくれし　かくれ　かくれん　かくれバ　かくれよ　かくる　かくれふバ　かくれれ

寄　よりし　よる　よらん　よらバ　よれ

尋　たづねし　たづね　たづねん　たづねバ　たづねよ

染　そめし　そめ　そめん　そめバ　そめよ　そむ　そめふバ　そめれ

仕 つかへし　つかへ　つかへん　つかへバ　つかへよ　つかふ　つかへなバ　つかへれ

流 ながれし　ながれ　ながれん　ながれバ　ながれよ　ながる

靡 なびきし　なびき　なびかん　なびかバ　なびけ　なびく

生 うまれし　うまれ　うまれん　うまれバ　うまれよ　うまる

老 おいし　おい　おいん　おいバ　おいよ　おゆ　おいなバ　おいれ

作 つくりし　つくり　つくらん　つくらバ　つくれ　つくる　田畑家同じ

馴 なれし　なれなる　なれん　なれバ　なれ　なれなバ　なれよ

報 むくいし　むくい　むくいん　むくいバ　むくいよ　むくゆ

植 うゑし　うゑ　うゑん　うゑバ　うゑよ　うう

生 おひし　おひ　おひん　おひバ　おひよ　おふ　おひなバ　おひれ

願 ねがひし　ねがひ　ねがはん　ねがはゞ　ねがへ　ねがふ　ねぐさも

鳴 なきし　なく　なかん　なかバ　なけ

掬 むすびし　むすぶ　むすばん　むすばゞ　むすべ　水氷紐組霜露糸契

移 うつりし　うつり　うつらん　うつらバ　うつれ　うつる

織 おりし　おり　おらん　おらバ　おれ　おる

落 おちし　おち　おちん　おちバ　おちよ　おつ

後 おくれし　おくれ　おくれん　おくれば　おくれよ　おくる　おくれなば　おくれれ

朽 くちし　くち　くちん　くちば　くちれ　くつ　くちなば　くちよ

宿 やどりし　やどり　やどらん　やどらば　やどれ　やどる

迷 まよひし　まよひ　まよはん　まよはば　まよへ　まよふ　まよひなば　まよひれ

追 おひし　おひ　おはん　おはゞ　おへ　おふ

贈 おくりし　おくり　おくらん　おくらば　おくれ　おくる　送同じ

曇 くもりし　くもり　くもらん　くもらば　くもれ　くもる

焼 やけし　やき　やけん　やけば　やけれ　やく　やけなで　やけよ

待 まちし　まち　またん　またば　まて　まつ　まちなば　まちれ

置 おきし　おき　おかん　おかば　おけ　おく

悔 くいし　くい　くいん　くいば　くいよ　くゆ　くいなば　くいれ

暮 くれし　くれ　くれん　くれば　くれれ　くる　くれなば　くれよ

紛 まぎれし　まぎれ　まぎれん　まぎれば　まぎれよ　まぎる　まぎれなば　まぎれれ

増 まさりし　まさり　まさん　まさば　まされ　まさる　まさらん　まさらバ

煙　けぶりし　けぶりけぶらん　けぶらざれ　なぶる

降　ふりし　ふりふらん　ふらば　ふる

古　ふりし　ふりふりん　ふりバ　ふりれ　ふるふりん　ふりバば　ふりぬ

吹　ふきし　ふかん　ふきれば　ふく　ふきぶん　ふきぶば　ふけ

更　ふけし　ふけけん　ふければ　ふく　ふけぶば　ふけよ

氷　こゝりし　こゝらん　こゝれ　こゝる　こゝらば

遊　あそびし　あそばん　あそべ　あそぶ

跪　あらひし　あらほん　あらへ　あらふ　あらほゞん

阿叡　日本紀　あえし　あえん　あえば　あえよ　あゆ　あえぶば　あえれ　順集にあゆさよめり

逢　あひし　あはん　あはゞ　あふ　あひぶば

囀　さへづりし　さへづらん　さへづれ　さへづる　さへづらば

顋　さわぎし　さわがん　さわげば　さわぐ

榮　さかえし　さかえん　さかえば　さかえれ　さかゆ　さかえなば　さかえよ

開　さきし　さかん　さけ　さく　さきぶば　さきれ

洒　さえし　さえん　さえば　さえよ　さゆ　さえぶば

消　きえし　きえん　きえば　きえれ　きゆ　きえぶば　きえよ

亂　みだれし　みだれん　みだれば　みだる　みだれぶば　みだれよ

知　ふりし　ふらん　ふれ　ふる　ふりぶば

茂　ひげりし　ひげらん　ひげれば　ひげる　ひげりぶば

時雨　ふぐれし　ふぐれん　ふぐれば　ふぐる　ふぐれぶば　ふぐれよ

敷　ふきし　ふかん　ふけば　ふく

拾　ひろひし　ひろはん　ひろへ　ひろふ

燎　もえし　もえん　もえれば　もゆ　もえぶば　もえよ

塞　せきし　せかん　せけば　せく

詞の五くさゝわゝるゝ事、かくの如し。いろはの順ゝよりて、常ゝ近く用ゆべきを思ひはゝりて書きいゞ。殘れる詞も、是ゝゝぞらへて書きゝべをらるべし。山川草木鳥獸虫魚器材の外、はさらぐ詞い、必ゞ五くさゝわかるゝもの也。其一くさ、ことゝく歌とゝるべき根なり。かくいひても猶心得ゞさゝめれバ、見ると、きくと、思ふと、行くと、住むとゝつけて、一言を一首ゝどゝのふるやうをこゝゝゝべし。

見　みし　過去　みる　現在　みん　未來　みよ　下知

是い大凡をいひさるゐて、此詞のゑ過去ゐあらず。ゑざりし、ゑゑん、ゑえゑん、みし　ゑえし、おどもを過去ゑ。但轉ぜる事あり。歌ゐよるゑ。ゑゑん、ゑえゑん、おど

自とも他ともあるあり。

二句を生　みし色よりもゐやひまされり　三句を添　このやどゐさゑる櫻いこぞのはる——

同　ともゐをしよの月ぞ戀しき　同　むりしべやわが父母とはらゑらと——

是も同じ。ゑる〳〵、ゑれ、ゑねゑ、ゑえ、ゑゆ、ゑえぞ、ゑぬ、數多ゐり。是又歌

ゑる　ゐよりて轉ぜべし。自他ゐわかるゝも上の如し。

同若木の梅のさゑりをぞゑる　同　うゑしよりいつゑと待し我宿の——

同みる〳〵西ゐかたぶくゐをし　同　もちくぐち盛過ゆく月ゑげの——

ゑざらん、ゑるべし、ゑえまし、ゑてまし、おど我未來あれど、上下ゐよりて、人

ゑん　のことゐある。ゑるらん、ゑらん、ゑざるらん、おど人の未來あれど、

上下ゐよりて我事ゐある。五くさの中ゐ、未來の詞い殊ゐ轉ぜる事多し。下もさ心

うべし。

三句を生　あすもゑんさゑりまざしき櫻花　二句を添　よれまのゑぜゐちるべくもあし

二句を生　よれまの雪のゑしきをぞゑん　三句を添　ゐきいでて有明の月の靜ある——

ゑば　是も、ゑあば、ゑらば、ゑざりせば、ゑざらばあどえ。是い自他通用の詞にて、

二句を生　未來あり。下ゑあゑの心うべし。　三句を添　ふみ分し雪のふること思ひいでん

をの〳〵山ぢのうの花をゑば　二句を添　ゐぬ人まづとふくる夜の月

三句を生　よそゐゑゑばさゑぞゐはれと思ふべし

是も、ゑよのし、ゑあゝん、ゑよや、ゑせゐん、ゑませ、ゑせよ、おどゐまゑる

ゑよ　べし。ゑあん、ゑせゐん、自他轉ぜる事多し。

同　いでてゑよ初ゐりぞねの聲をゐり　同　ゑぞ玉づさをゐけてゐゑると

二句を生　ゑよはつはゐのゐかぬ色香を　三句を添　我をとふこゝろなくとも尋ねきて

この五くさい、思へることを引いぞすべきいとぐちえ。此一言ゐより、二句をうゑ三句を

うゑ、そはゐ三句二句をそへて、連歌のやうゐゑゑて〳〵、初の一言はことゐり、五句卅一

字ゐいひとぢむべきやうをゑせ侍るえ。此一言ゐい、かくつくべしといふゐいわらず。人

毎ゐ心異あれば、百人作れば百首あぐらかはるべし。已達勘能の人あどい、詞毎ゐ奇異ゐ

やさしき歌ともありあん。是いいやしき翁の心は聲あれば、かうきたあげある歌とあれる

を、ゑづのらも云らぬゐゐらぬば、いゐでけぐゐく艶ゐよまばやと、千ゑびゐゑぶきくゐ

ぐへず思へど、ふつゐいでこぬい、ゑの垣根ゐゑりの細水ゐまりて、鯉をえてんと思へばあ

りと、思ひのへして、かゝる名もえらぬさいを浅とりて、叢ちする。これも大み國の魚のうちおれば、深く腹おなちはひて、生さゝんのち〳〵い、久方の中お生さる桂鮎、おぢかさの海おうく鯛をも、心のまゝおとりに給ふべし。凡心い風の如く、詞い波お似さり。風ふのぬお波れさつ事おく、心おあき詞いいづるものおあらぢ。下次お二句三句をそへお〻く。皆歌おえさつべなれど、さのそいとてやそぬるも、かのそへさる句お、句をそへて歌とおして、そ給へとおり。

聞　きゝし　きく　きゝん　きこの〻　きけ　如上

きゝし　きこのざりし、きゝなん、きこにし、きゝつる、れたぐひい、いくらもあるべし。

上下およりて又轉ぜべし。

郭公こゑきゝしより　きゝしおにさる波風　皆自他。

きく　きく〳〵、きけば、きくに、きこえ、きこゆ、きおえず、きこのぬ、いくらもあるべし。又轉ぜべし。

いまだきくいつのと待ちしゐりの聲　よものあらしを枕おだきく　同

きこのん　きこのばや、きくらん、きこえん、きこのざらん、きこえし、いくらもあるべし。又

轉ずべし。上そんの下おいふお同じ。

あもやきこのん入相の鐘　尋ねてきこのん　句をそへば自とも他ともおるべし。

きこの〻　きゝおば、きゝたらば、おどえ。自他通用おること、上お同じ。今出せ句も、人のうへにも我うへおもいはる。

ぎこの〻うあらん波風のこゑ　鹿の音きこの〻夢もむせばじ

きけ　きけうし、きゝてよ、きうおん、きこにより、いくらもあるべし。又轉ぜべし。きけば〻といへば、我事おおれり。又、よせくる波の音をこそきけ、といひても。

きけゆふつけの鳥のこゑ〳〵　ありそおよする波の音きけ　他ん。

思　おもひし　おもふ　おもへん　おもへ

おもひし　おもいざりし、おもひなん、おもいざりなん、いくらもあるべし。轉ずること上お同じ。

れもひしまゝに萩をうゑつる　思ひし人のあらずおりゆく　共お自。

おもふ　思ひ、思いぬ、思ふよ、思いね、ものをこそ思へ。おもへい下知おれど、うくい

はなよりも月をぞおもふ　自　去のぶる中の人めをぞおもふ（なやおもふとすれば他なり）　自
おもはん　思ふらん、思へじ、思へらん、思はめ、思ふべし、おどろかまさるべし。上下
　ふよりて又轉ぜべし。上ふいふゞ如し。自他を分てるべし。
　はおいわりとも月をおもいん　自　思はん人のつれおろらおん　他
おもいゞ　思ひせば、思ひおば、おもはれば、の類、自他通用。こゝも自他をわく。
かくしのゝ思いゞ色ゐ出ぬべし　自　神かけていへ我をおもいゞ　他
おもへ　おもへかし、おもへよ、おもふお、おどの類。上ゐ同じ。是も思へばといへば、
　自ゐ轉ず。又物をこそ思へも同じ。
おもへこぬ夜のひとりねの床　おもへどがよもいろさの月　共ゐ他
行（ゆきし　ゆく　ゆらん　ゆらば　ゆけ　以下ミな上ゐ同じ例を以て見合すべし）　いもがり行し　自
ゆきし　霜ゐゝゆるゐ　他　川そひのゝち　自
　さゞゆきし跡　分々ゆく末ゐ
ゆく　波ぢてきゆく　他　花ぞゐやへる　自
わまを舟

ゆらん　分ゆらん野の　三句をそへゞ自他　浪のぜさつな
　末ぞはるけき　ゆらん鹽ぢゐ　ゆらるべし
ゆらば　々ふゆらば おやちり　わもゆらば々ふまで　自他通用
　のこる花もゝし　のこる花もゝし
ゆけ　道さどくし　草わ々てゆけ　ゆけゞは自
　月まちてゆけ　ふるの中ゝち
住（ゝまし　ゝむ　ゝまん　ゝまば　ゝめ　澄も心ゐりて詞同じ）
ゝまし　住しいやりい　自　あれしいやりい　他
　あれゐ々り　自　ゝがゝましあと
ゝむ　すむ人いろゐ　他　ゝむゝれらや　自
　寂しろるらん　人のとひこぬ
ゝまん　ゝまんあさりゐ　他　ゆきてぞすまん　自
　すまんとぞ思ふ　自　ゝまよしの里

をまがいづくも　　をまがいづくも
ねあらにをまが　　ひげやどかし　　自他通用
物うるべし　　たへてをめ山も　　よのうきこと
よの中い人おと　　をめ　　もきかでこそ
をげし山おをめ　　うきよの外ならぜ　　すめい自と

この一言おそへさる句のことわりきこえば、つねの詞おる事あらいるべし。さておん歌い大八洲のを國ぶりおて、殊更お習ふべきおあらぬ事をも去らるべし。

此を國おうまれとうまるゝ者、歌をもて用をおをものをおあらぜ。身を殺さめ家をとゝのへ、人をさとし誠をあらいも、言語の大道にて、昔い毛の末ばうりもさはる事おうりしを、末の世とおりて、詞の上のことのをと思ひて、さくをにおづみ艶おおげれて、自見の好悪をさて、拙能先達の名をかり、大道いにばらからさちを植て、ゆきゝをさゝへしより、大道せばまりて、艱險の細路とおり、からさちはびこりて、大法とおりて年久しゝれば、別お習ふべきことのあらんぜるやうお、思ひさげへるるを。たゝいおしへおのへるべし。

いおしへおかへらんこといを非人のもとの心のをちの一をち

丙辰春洛東圖南亭お筆をとる　　蘆　　菴

さいつ頃、童べおいふとて、かゝるも此のいをてしが、文の中ふさゝまれて殘れるを、元長をつゞて、梓おして、うひまおびの文のもとめお物せんと、せちふこはるゝお、いおぶべきほどのも此おられば、ゆらがとてやりつ。老耄のをさび、ひがおと多からんのし。

ふりふけ髪 終

藤簍册子序

林にあそぶ鳥のやどりところえて生ひ榮ゆる木草の花人の友垣の語らひもおのれ〳〵が好めるにひかれて心ゝゆくめり父母に別れたいまつりての世ゐゝうからはらから頼みつべきが多かめるわも思ふをわかしうさ嬉しさを語りなぐさむなむいとはしきたゞまがりねぢけだにせずゝかのぞむき〳〵をわざいかさまにもあれな今や老らくの世にかへりきれがこゝの入江の蘆がちる夕風心さむらにおやし去めりしをも大方にさいだてたりしに只一人世にとゞまれるゝ上田の翁なり我ゐゝ齢五つばかりおくれ給へど萬に心さとく兄ともおしゆづるべかめる常に國ぶりの歌をよみて獨たのしとせる其下がきめくものわまたつゝら箱につみ入れ我まへにもてきて是なむ年月に刈りつみし磯廻の藻屑なりもとより蘆原の去げゝき小屋におひ出てひぢりこにそみたるあやしの言草ゝ久方の仰ぎ望む御あたりにゝ天彦のよびつたふまじく又同じ民草の中にゝはむともおとしむとも何心してと思へバ一つものに耳過しつゝ年ゝへにけり君と我土を

つみて城をかまへ竹にまたがりてかけ走りし昔より何のたがふふしなくて相れいの今迄ゆきかひ問ひかはしぬるにゝ歌よませたまはずともかれがひが心をゝられまゐらすゐゝ見せたいまつりて一言をだにをかしと思はれなむいとうれしき見をへて後にはし一くだりゐても書き加へてよと聞ゆゐなわづらはしとゝ思ふ〳〵百たらずの年波よせかへりて交らひし人の爲ゐゝ國つ罪こそかしこけれ我犯さぬ天つ罪を老がやせ骨いたきまでふはせらるゝともとてなむかしら髮禿なる筆に此こととうちいでこそすれ歌や文や露ばかりも學ばぬ道ゝ三吉野のよしともあしがらねのあしかるともゐかなていいふべくもあらぬを古言の葉にならひてぞ世人さだめよ世人定めよといふ享和二年の秋ふなきはふ堀江のわたなべの岸なる生島の里ゑるす

附　言

一此集ゝ、翁時々のわはゑゐつき、且事ゐ臨みて口すさばれし、歌や文や、物語道ゆきぶりを、紙のはし、ものゝ裏などにかいつけられしを、取つどへて、えらぶとゝなしゐついでられたる也。ゑの頃かたり給はく、思はずよ、七十といふ齢ゆかぞへつめるゝ、うつゝ乃夢路のたどりとやいふべき。いでや、今歳を老ゐ世の限ゐ、打亂りし事ども皆ゑをへ、筆とるわざも、かしてきゑゐら、獲麟のためしに、今日より後ゝ、きのふの我ゐゝわらで、みどり子のわきまへゑらぬあそびして、世をのどかゐも終らゞやとて、それの御寺ゐれきつき所をさゞし、ゐつ柩をさへつくらせて、此ふみ等をも、ゑゑ書のまゝに納めてんと、うち〳〵ふきて聞ゆ。れのゑ、翁ゐゑゑしく交り遊ぶゐべゐ、はし〳〵讀見し事のゐれゞ、翁ゆゑれる人々と心合せて、是を櫻木ゐさのをべくとてゐん、御寺ゐまゐりて、はかりごとをを、翁聞つけて、うたて、をてわざをるゐゐ、世ゐはひをたらんほどゝ、必しも有まじきゑわざ也と制せらる。ひゐや、此ぬしいをでゐ世を見はてゝ、今ゝゐはさゑとて捨聞つれ。我もの顔ゐのたまへる、いとわやしきと云。翁打もだして、我刀ゐ疵のうむれるゝとて、長き息つぎつゝ、ゐざり入り給ひぬ。

一ふゑの名此由ゝ、常ゐ机のかたはらゐ、ゐさらゐるつゞらでをかいふき、人來たれゞ見

せじとをろまへらるゝを、もいの翁のつゝらでよと、ねたくいひあへりしもて、今ゝ呼ぶ事となりき。

一歌や文や、翁此齢ゐしてゝいと少おきゝ、ひろくておはせし昔ゝ、よろづうちたはれがちゐまめ〳〵しき道ゐ志もわらざりき。四十といふ年より、よみ書きならひしといふ物語、べちゐまち文を題せられし一卷ゐるを、おゝ恥ある事どもありとてゆるしおし。さゝ四十を初めの手習此、それもら黄岐の術のいとまを偸みたる遊びおれば、うべも多のるまじく、大方ゝをるしもとゞめられざりしを、七十をかぎりのわざゐ、つゞらでの中、又こし方かゝる事のありきなど、むかし今、前をりへなく書きなめつゝ、猶それの所の障子ゐかゝるを見し。誰屋の壁ゐなど、友垣の告げ聞ゆるをもかきあつめつゝ、六まきとなりき。翁、此道ゐ門をひらきて、をるをゝらぬをいざなふゐあらねば、よしやゐしやのはめそしりをも厭はれぬもて、其人がらをも世の人見給へゐし。

一木ゐのぼをまじき卷々猶多かれど、ゆるしなきゐゝ、題號をだも書きあらはさゞ。翁の常言ゐ、命ゝのぎりあり。知るゝ涯おし。のぎりあるをもて、のぎりおきゐをたおふゝ危しといふ古ことををんじ給へる。うべことゞりとゝ聞つる也。

文化紀元三月是此日、昇道杜多、岡崎の竹間裏ゐをるし侍る。

自序

古人云。文章窮而後工。非窮之能工也。窮則門庭冷落。無車塵馬足之嘲。事務簡約。無簿書酬應之繁。親友斷絶。無徵逐遊宴之忙。生計羞澁。無求田問舍之勞。終日閉門兀坐與書爲仇。欲其不工不可得已。不獨此也。貧文勝富。賤文勝貴。冷曹之文勝於要津。失路之文勝於登第。不過以本領省而心計間耳。到聖人。拘囚演易。窮厄作經。常變如一。樂天安土。又不當一例論也。適有此語。聊足以暢間情焉。頃一夜夢。垢面短髮之老翁來云。兄也薄命不過去鄉土離六親。無居無產。自恣爲狂歟。而乘間作文。然句々吐寒酸憂愁。世塗之人誰不以蔽目哉。夫前人慷慨之言。各自愛才舞文。解悶發憤者異。兄也不然。居常讀書有感。將以安不遇乎。抑亦遇不遇。共天地間之動物。人票之性。不可以爲如何已。故來懇問云。覺後思之。冷落失路。爲之窮厄。即不可樂。爲之命祿。則何以憂耶。余之薄命。及老而無居無產。惟是愚言淺識之歎。終日閉門兀坐乘筆。雖不勝富勝貴之文。聊以爲消間之策耳。享和壬戌晩春。鴨塘頭乞丐翁鶉無常居士拭盲眼書之。

藤簍册子

題云藻屑

上田秋成

すみの江の浦の濱藻のよる時々なる言草どもを荷田の信よしの家の屏風にえらぶとゝなしにかいすさめる歌

都べゝちまたの柳そのゝ梅かへり見ゐはき春になりにけり
大原や春日の神もゆるさなむねの日の松ゝもりの玄たくさ
我宿の梅の花さけり宮ぴとのかざし求むとつかひ來むかも
折らばやとたちよる梅に鶯のゆるさぬ聲をおどろかすかな
とのゐ人よるををがらの梅ゞ香の頻りに薫る明やちかけむ
思ふひと來むといふまに梅の花けさの嵐にちりそめにけり
花林臘月　櫻さく春のはやしゝひさかたの月のかつらも花ぐもりして
禪林寺ゐて　櫻さくこの山かげの夕ぐもりそらさへ花のいろにまがひて
高砂のをのへにたてる櫻花はやもあらしのさそひやゝせむ

夕日かげかゞやく谿の櫻ばなけふもながめて暮るゝ庵かな

大田南畝子の東ゐかへらるゝを送る

風あらき木曾山ざくらおほ春ゝ君ぞ過してちらば散らなむ
わはの山尾上の櫻たづねきて伊勢までと誰も思ひてゆらむ
故里を荒るやとゝへば蓬草もみうくもあらぬ垣ねなりけり
吉野川かはづ妻よぶ夕ぐれにやどかる我もひとり寐にして
宮のうちゝ男をみなも白栲のころもゆゝしみ夏たちにけり
郭公夕かけていつも朝づまの片やまぎしになくといふなり
曇り日のゐはせの森の時鳥あなゐまなきてうとむともきく
たち花のみえりの里の時鳥ぬかぬたまなるねをもなくかな
鶯のふるすの谷ゐこはりとけいつか青葉のかげとなりにき
かぐ山の尾上にたちて見渡せば大和國ばらさなへとるなり
さ苗とる時にゐなりぬ少女らぞ難波すが笠ひもゐつけてむ
五月雨ゐふるともゆかな墨江のみと代小田のさ苗とる見に
山彦のこたへて悲し我岡のともしのねらひあやまたぬかも

けふもまたよそにと見しを上都かろもまもなき夕立はあめ
あすか川嵐ふきそふゆふだちにたぎち流るゝ淵瀬ゝなしゐ
撫子の花のさかりの久しきに初あきかぜも吹くといふなり
藤原のゑ井の清水ゝむすばなむ天のかぐ山かげも見えゝり
初秋の朝けの風を身に去めて思ふにかなふ頃ゐもあるかな
女郎花さが野の原ふはりつれてたが宮つこぞ夕いそぎする
尾花ならぬ方こそなけれ大原や野中ふる道わけまよひてゐ
大ぞらに光みちぬる秋の夜も月のところゝさやけかりけり
紀の海の南のはての空見れば去はけにくもる秋のよのつき

河内の國くさかの里にありし時

生駒山かげまゞ峯にわかれぬを浪花のうみゝ月になりけり
いでている山のあなたの遠近に身をし分ても月を見てしが
天の原秋の夜わたりてる月のひかりをさまるあかつきの空
芦がちる秋の入江の夕やみにひかりとぼしく飛ぶはたる哉
此夕べ雁なきわたる山城のふしみのわさ田かりやそめけむ

信濃路を迎へてしよりあら駒のあらき心もなれもおそすれ
御狩野ゝさはふとすぎし草村にいゴちのがれてなく鶉かな
袖たれて秋のと山をながむれば紅葉にけりな時雨せぬまに
津は國のこや野をゆけば露霜に小草花さき葉ゝもみぢせり
峯にたつ鹿の八聲のひまゝたゝ紅葉ふきれろす風の音かな
秋よりもゑぐれ〳〵て木枯のふゆにうつろふ雲のたちまひ
松ゞ崎にて　時雨の雨早くもふりく大比枝や小ひえふかゝる雲と見しまに

奈良に遊びし時

春日野の時雨の後のけふなれや山ゝみゐがら紅葉去にけり
高雄山　ふく山の岩垣紅葉このごろゝおした霜れきゆふべ散りかふ
枯かゴらたぐもばたゆる百濟野の萩の古枝の眞柴ゆふとて
はふり子が清むる跡に木葉ちりて神のみたらし氷ゐにけり
枯草原晨露　此あさけ茅生も薄もかれふして霜の原野ゝ見るべかりけり
田舍住せし時　寒き夜をあかしかねてぞけさ見まば生駒ゞ嶽に雪の積れる
舟きやふ音もきこえぞ堀江川かきくらしふる雪のゆふべゝ

こやの野に宿りてましを夕つけてふる雪悲しねなのふし原

雪峯寒月

有明のつきの光ゝうゴもれて峯ゑろたへのゆきのふりゝも

ゐ幸まちて野山の神もつかふらし鳥立もらさぬ朝かりの場

ひろ澤の水にうきねてをし鳥の羽根きる音をきく夜寒しも

田上の河べのゝへに宿からむあじろの波に千どりゑばなく

やどりもる宇治の橋本さよ更けて中の河洲になくゝ千鳥か

數ふれば年ゝあまたにつみつるを猶をさなきゝ心なりけり

風

闕思へども思ひやゝえむ色に香にひだりの櫻みぎのたちばな

都

いにしへの高津の宮にたつ民ゝ萬代までとつくりけむかも

舊

九重にとなりてすめる里人ゝ宮なれてしものゝいふなり

里

貴公子

よき人のながき心ゝ初春のうら〳〵てらす日かげなりけり

武士

ゆゑ矢ねひいざ駒なめて武夫の花見がてらゐ鳥かりする岡

僧

墨染にさちぬふゑざもなくもがな憂世の門ゝあけずあらまし

市

賈

歌火山木末にさわぐあさ鳥のさきゐむれたつ輕のいちびと

散

人

花鳥の色ゐもねゐもはだされて暇ある身のいとまなきかな

松

足びきの遠山松を見さくれゞあらしにたへて年もへにけり

浪にふし岩ねゐたてる松の盤須磨のうら山の陰りくだりに

風をいたむ渚の松に波かけて去た葉の紅葉沖にいでにけり

古葉ふち霜ゐゝまざき凋まねゞ秋こそ松のさかりなりけれ

春歌

立春

ひさかたのはてなき空に朝霞たなびきわたり春たつらしも

はる霞立野の野邊の神やしろむかふ朝日ゝけふをはじめに

去年よりも姿を見せてけさぞなくたけのはやしの鶯のこゑ

立春霞

風はやき山ゝけしき殘たちかへて横川のすぎに霞たなびく

我こそゝ面がはりもれ春がすみいつも伊駒の山にたちけり

迎春東郊

東の野にいでて見れゞにしおりの近き里からけさゝ霞める

田舍住せし時春のあしたに

のどかなる日影ゝもれて笹竹にこもれる庵も春ゝきにけり

春盤に五穀を盛りて加へし歌

うけ持の神代ながらの田なつもの年の初に見るがたのしさ

元日に子日ありし年垂水の神岡に松ひきて遊びし歌　祇園在本國豐島郡

あら玉の年のあしたに、めづらしき初子のけふを、空しくも宿ふいわら
じと、新草のもゆる野こえて、岩そゝぐ垂水の神の、岡のべに登りて見
れば、遠山ゝ霞に匂ふ、朝雲に鶴なきわたり、遠ところき三國の川に、舟
よばふ人しも見えき、瑞垣の下ゆく水の、音さびみ衣を寒み、刀自も我
も五十ぢの上の、百たらぬ老にしわれば、我爲に生ふる小松の、根笹はへ
て千本榮ゆる、ひきつれて去るしもあれやと、菅の根は永き日ぐらし、
夕雲の雪をさそへば、風さえて衣をうすみ、肌さびみ家路を遠し、かへ
らなむいざ、

反歌

子日する野邊の小松にふる雪の白髮つくまで年ゝへなゝむ

元日宴

けふよりぞ事たつはるの位山つぎ〳〵賜ふ千代のさかづき

白馬節會

今ぞひく馬の司のあゆみまであなおもしろの駒といふあり

賭弓

ま手つかふ弦音高し的かたのうらめづらしき春のあさには

早春歌

水無瀨川さゝれゐ雪のふりつみて春の水花去たかよふらし

梅

春きてもとけぬ汀の岩むらにいつ浪かけてこはりいにけむ

春の雪あがきにくざき信濃なる菅のあら野の駒いさむなり

雪とけし岩田は小野の春日影みちゆき人もとか榮つむらし

仇まもる飛火絶えにし春日野にたゞ新草のもゆるをぞ見る

一夜きて旅ねうれしき故郷のわれしかきねにもゆる若くさ

柳もえ芦つのぐみて津は國のながらのつゝみ人のいきかふ

此里ゝ梅の林にこめられて薫るものとも去らずぞありける

江を渡る梅の追風香をとめて花のところにふねゝよせなむ

ふなじくゝ梅の木本とめてまし埋みぞまどふ春のたきもの

梅のはな香にかをらずば霞こめ雪にうもれて春もすぎなむ

かべしきるよるの衣に去める香ゝ君がてふに似たる梅哉

雪わけて昔の友をとひくれば吉野のさとにうめも咲きけり

くもり日ゝことゝあぞ匂ふ梅の花風ふきとづる深きかすみに

霞のなきからしたる朽めよりたち枝うれしきうめのはつ花

野鶯の羽ぶきの風にちらされし名殘のえだの梅かをるなり

空さえて香ぐめに風の送りくる雪と梅とをわきて見なまし

梅の花峯をくだりの林ゐいさとにいでしとうぐひすの鳴く

わゐ岡のはやしの梅を宮人は酒ゐうかべてわれゐたまはす

山賤のくだく薪にゆるされて立枝ゐまたのをかのべのうめ

梅のはな風にちるごと鶯のかさとられたるこゝちやいする

高圓の野邊見にくれば新草にふる草まじりうぐひす鳴くも

鶯

かげろふのもゆる春日の小まつ原鶯ゐそぶえだうつりして

宿ゑめてねよげゐもゐるか鶯のうめのこ枕われゐかさなむ

柳

春の野のもずの草ぐきたゑ見ねどれどろきがはゐ鶯のなく

鶯いまくらの窓にかげ見えてはる日なぐさむ竹はゑたいは

大寺のかどべにたてる古柳つちはくまでに枝いたれゐけり

九重もちかくやなりぬ道ひろきゆくてにもゆる春の青やぎ

紅

一葉よりうかべならひし川舟をつなぐ岸根の玉のをやなぎ

梅

此殿の八重のくみ垣えだこえてくれなゐ深き梅のさかりい

いさらぎや八重さく梅の紅にうたて灰さす野邊はわくた火

春雨

こち風のけぬるき空に雲ゐひて木芽はるさめ今ぞふりくる

けふ幾日はれぬ雲間ゐ長閑なる日かげをこめて春雨ぞふる

面しろく雨ふるからに春の夜をみじかしと思ふ始ゐりゝり

春雨にきゐらし衣かたしきて柴のれき火をうづみかねつも

庵春雨

霞にとふ人をやどして春雨のよるをすがらに語るいはかな

春雨枕に雫す

春の夜の雨もる山にやどりして枕ゐちかき去づくをぞ聞く

春月

三吉野の花ゐそげなる年だにも河瀬ゐぼろに月いかすめる

三島江や玉江の水もにごるなりかすみてうつる春の夜の月

えらま弓はりてかけたる月かげいみつれど幾夜はれぬ霞か

桃花

春の水ゐさくながるゝ片岸いもゝのはやしの山もとのさと

咲る花にゐなじ色なるゐら染のゐさらの衣まくり手にして

春日遊墨江

蘆原のみづ穂の國を、中にゐきて外ゆく波の、千重波のゆたのさゆたに、

五百津舟千舟をのせて、神代より天のさぐめの、跡とめて入りくる舟い、

玉はやす武庫山風を、追風に夕べいなして、あけたてゞ伊駒高ねを、吹

きゐろす嵐此風に、朝びらき漕さてぞ出る、大伴のみつの濱べに、あり

たゝき神の御前の、住江のいつゝあれども、春の海奈呉の浦べに、家わすれ拾へる玉を、くゝつもつ手たゆきまでに、少女等が裳の裾ぬらし、みつ汐の夕さりくれば、あはと見し淡路の島も、霞こめやのにも見えぜ、あし鶴のかへる蘆べゝ、汐さゐに騒ぐいり江を、漕ぎたみてゆくてふ舟ゝ、海人ならぬ難波少女の、家路ゆく舟、

反歌

奈呉の海の名殘の玉藻我からむ汐みちくとも沖にをれなみ

櫻花

いつはらぬ春の日かずを數へきて山の櫻ゝさきそめわけり

まきむくの檜原杉むら霞みけりほれに櫻のいろにてゐれて

ひな曇る櫻がもとをたちくれば みどりの空にかをる春かぜ

思ふことあらぬ枕に花の香のあさらかをる春のあけぼの

ふたばしとてたゝずむ花に逢坂の關ゝ夕べの戸ざしせしかな

櫻花さけるを見れば かはよ人ころもに通るひかりなりけり

櫻戸をおしあけがたの空見れば けさも尾上の花ぐもりして

山路花

かくれむとおひこし人にあはぬかな心そらなる花の山ぶみ

舟うけて誰ものゝねを遊ぶらむあらしの山の花のこがくれ

海邊花

夜にかくるあひにし人に花山の道にゆきあふかもなしや我

須磨の浦の磯山櫻さきにけり波こゝもとにたちくとや見む

風まちてとまりする舟いそ山に咲きちる花の日數へしかな

雨中花

汐おれし生田のもりの櫻ばおはるの千鳥もなきてかよへる

うちむれてきのふゝ見しを櫻花あめ靜なるかげとなりにき

櫻花うれしくもあるか此夕べあらしにかへて小雨そぼふる

客來問吉野之花時、答、登山兩回、山水最奇絶、其多花之處、坂幢開豁、人跡絡繹、可謂清雅之矣、思夫上古飛鳥藤原之世々、春秋屢行幸、美其山河之美、而隙水營宮雖見田獵捕魚之御遊、更無望雲踏雪之轍、故好古士到于那處、則懷古以永言也、又問、翁嘗咏花、專用那處者如何、答、凡題詠春花秋月、采摘其地、以調風姿、猶之生旦上場、雖使人歡娛悲淚、比之良人世態動靡、則取感固淺矣、春花粉飾、殊子遇雨、忽失其美焉、那處山水最奇絶、但遊以花時者俗士耳、今敢道以數言、其歌、

空にみつ大和島根の、國原ゆ雲井に見ゆる、三吉野にうちこえくれば、

遠白き河音さやけし、舟よばふ六田の岸の、柳原風になびける、河のべ

を登りてくれば、花ぐはし雲にうゴめる、麓邊は秋津の小野の、岩村の中さりとはし、ゆく河ゝ瀬々にむせびて、たぎちあふ水のまに〳〵、棹とりて下す筏の、岩にふりみだるをあやな、遠近の岸にたゞずみ、我見れば水にかげある、山吹のかさねの衣、とき洗ひはもひとまなみ、山風に櫻ふきまき、帶にせる象の小川の、水沫なし河瀬にみちて、瀧浪にみだるゝ見れば、風のみわちりやゝまがふ、古のかたりにつたふ、とつ宮いてゝとし聞けば、三舟山常ねる雲を、ふりさけてみつゝ去ぬべる、夏み川よどめる末ゝ、ゆふ花のぬさの手向か、さなくだり瀬おりつ姫の、河社とゝろ〳〵に、ひゞきあふ水のたぎちも、廣き瀬に流れてゆたに、淺花田深みどりなし、木綿疊千ひちの絹ゝ、天にまたくはた姫の、神わざか妻よびかねて、夕川に蛙とよめり、よき人のよしと見ましゝ、三名し野の名しのゝ山ゝ、峯高み川とは白し、昔見し春のさかりを、ふるはゆるかも、

反歌八首

芳野川かはくま毎に水泡なしよどめる花をむかし見しかな

櫻花うきてながるゝなと見れば象の小河ゝまあとさやけし

白くもゝわしたにはれて三舟山ゆふゐる峯のかぜの靜けさ

夏見川よど瀬なからしさし下す筏がこゑのはやゝかすめる

河かみの國栖の里人春こずばとはれぬ宿とおもひたらまし

大瀧をくだけてかつる白波の音ゝあらしのたえまなきかな

夕蝦秋をさかりのこゑあらばたのめて又もわれかへりこひ

宿かさぬよし里あらば秋つのゝいはがね枕夜をさむくとも

題吉野宮

名ぐはし吉野の國ゝ、山つみのもりてませれば、山あみは宜しき國ぞ、よき人のよしと見ましゝ、瀧つ瀬ゝ清き河内ぞ、去かれこそ大宮人ゝ、春花のさきのをゝりに、鶯は聲をとめつゝ、秋霧のはれぬ迷に、蝦なく瀬々をとゝもしみ、いきかひて見れどもあかず、遊せし秋つの小野の、とこ宮ゝとこにゝあらで、夏見川流るゝ水の、たちやがへらぬ、

反歌

御舟山つねねる雲のつねならば瀧の宮おゝいまもあらぬか

禁庭花

山ざとにあらぬ色香の櫻ばなかよりかくよりそふひかり哉

御かは水花ぞながるゝ大みやの内ゐも春ゝとまらざりけり

花頂山のふもとにすみそめし春

すまで我みやゐさだめむ粟田山あはさつくもゐ櫻なりけり

花下遊　石川のこまのたはれ男花に遊びぬしある人の帶なとらしそ

嵐山花三章　たには路をくだる筏の岩ゐふり幾瀬くだけて花ゐ見るらむ

大井川くだす筏のあとたえてゆふべの波にはな散りうかぶ

ふはね川きしの櫻のかげくれて月になりぬる波のひかりゐ

老木花　年ふかき櫻がえだゐ苔むして松をともなるよはひをや經む

山寺花　かつらぎや高まの山の峯の寺さむき日かげに花もさきけり

あはと見て歸るぞはかな少女らが門ゆるされぬてらの櫻ゐ

谷わたる道ゐあらねどいとふりし寺こそ見ゆれ花に籠りて

古墳花　ゑめはへし苗代小田にかげみにて年ふる塚の花もさきけり

瓶花　瓶にさす花ゐ昨日の山ごとをとひきて人のけふも見はやも

山里花　山ざとゐ夕ぐれさむし櫻花ちりゐそめぬとゐはひゑめりて

愛花篇　うちなびく春さりくれば、百鳥のさまよふ野邊ゐ、新草のもゆる垣ねを、

誰ゑめてすむ人たのし、足引の山のいはりに、むらぎもの心すませば、

語らはむ人とゐしきを、庭もせに櫻花さけり、ふゝむよりちりはつるま

で、風をいとひ雨をぞうらむ、春ごとゐ我ゑたのめて、あけたてば、閨

戸ぶそしと、夕闇ゐはのに見えつゝ、言とひを我ゐすなり、花ぐはし

櫻のめでと、古の遠つ飛鳥の、すめらきの言あげませし、にぎたへの衣

とはりて、にはは世る神のみことの、ゑまひゐもくらべ劣らぬ、花妻の

あれをたのめる、里にいでば人戀よらめ、家にあらば人とひくべみ、山

口に守部やすゑむと、岩波の千々にくだけて、思ひをぞする、よしゑや

し戀ゐよるとも、袖はへてとひも來べきを、朝されば霞かくりて、夕つ

けば霧のまがきの、妻ごめに面ゐもみせじ、かにかくに遊つ飛鳥の、す

めらぎの言擧させし、花ぐはし櫻ぬめでの、姫神の色香ふもはゆ、庭も

せの我花妻よ、ちりてなゆめ、

反歌　櫻花わかぬゐぐきをわがすれど一夜の風にちるがさぶしも

長かれとたのみてそせね櫻花ひと夜の風にちらむものかゐ

落花　ちるまでと頼めし庭の花にうきゐかつきゞたのむら雨の音

櫻ちる木のもと見れば久かたの星のはやしに我ゐきにけり

とめてゝな花ゐ初瀬のやま風春もはげしきならひなりせゐ

山風のふくといなしに玉だれの外面ゐ花のけさいちりくる
龍田彦風をまもりの神山におのがときとや散るさくらばな
朝鳥のこゆる羽風に色ながら尾上のさくら散りそめゐけり
吉野山岩のかゞみち春ゆけばたぎつかふちゐ花ちりうかぶ
ゆきくれて獨のみ見る春のよの月に花ちる志賀のやまぢえ
時鳥なくべくなりぬ花いみなちらせし雨のなごりあるそら
さくら花ちるを心のはてにして殘る日かずの春いはるかい
根にかへる花としいへば頼まるゝ又くる春も木末ゐぞ見む
花ぶそき櫻ぶのもとをとめくれば青根がみねの外陰なりけり
けふと暮るゝ日數にもれてみ山ゐい遲げゐもあらぬ花咲ゐけり
はな櫻かさねてにはふ袖の色に春をとゞむる雲のうへびと
草　あすもてむ菫花さく春の野の芝生がくれにきゞすなくゐり
雲雀　春の野い雲雀の床とおもひしをそらにやどりの夕暗のこゑ
賀茂の翁のよめるし
霞たつ春野のひばり何しかも思ひあがりてねをやなくらむ

是につきて　冬の野い枯生にまじる草の床ゐいつたつ空と雲雀なくらむ
翁もれもひありげなり我も去がりとや人聞くらむかし
蛙　夕されば かはづなくゐり飛鳥川瀬々ふむ石のころび聲して
躑躅花　三吉野い青葉にかはる岩かげに山去たてらしつゝじ花さく
藤花　神松にかゝれる藤もていふれむいでやひくてふ大幣にして
春と夏こなたかなたに咲く藤の花やいづゑゐ靡くなるらむ
大原野の春日の社ゐ詣でべりし時ふぢの花の松にいとおもしろくかゝりさるを我ずさの童の何の心もなくて折りつみければ里の子らがそれい神の木なりたゝりやあらむといふに驚きて泣き悲しむをとりてふと前にさゝげ詠みて奉れる
折ると見ば罪いかしこし大直日見なはしたまへ幣の手向に
牡丹を人々とよめる
色ゐてそ物思はすれゐはけなく國かたむけに咲ける花かい
楊太妃一捻紅を
いさゝめの色にそみても其君の面かげ見する花の名ぞてに
淺紅　信美

花にそむ人は心のふかみぐさうまくれなゐの色ゐにはへど　布濟

白

めでたくも咲きみてる哉ゑらがさね粧けだかき花の君ゐて　默軒

白帶紅

わけ布のゝ薄花ざくら忘れめやぶたにの色に匂はざりせば　敬儀

深紅

呉藍の色ゆるされしふかみ草あてなる種にいかでゐひけめ　益

朱砂紅

ませの中に朱なる玉やゑきたると見えて花さく深見草かな　問齋

紫

ときめける濃き紫の一もとにうべも貴盛しき花とこそみれ

夏歌

更衣

わた殿をいきかふ裾も輕げなり夏たつけふのきぬの追かぜ

人妻のこれやう月のなつ衣なるれば更ふるならひある世に

新樹

奥深くわけしがへさの山ぐちゝ青葉ゑげりて夏たちにけり

いと早も蟬なく陰ときゝつるゝ青葉にこもる瀧のみづおと

加茂祭

けふてへば高き賤しきゐふひ草かけて神世を忍びつるかも

加茂山の神のおまへの駿河舞そでにかつらの風もかをれる

かきつばた

身にゐはぬ司のいろの杜若きぬにすりつゝれもひでに着む

時鳥

時鳥まつをならひと夕かけて山のいはりにながゐせしかな

まちまたぬ宿をわきてやゑのびねにさよ時鳥なきて渡れる

たちばなの島のみ門ゐとのゐしてやま時鳥きかぬ夜もなし

世をすてゝ思ふてとなきゐかつきに山時鳥なきてもぐなり

てゝぐなく里ゐゐもめど時鳥はつねゐいつも嬉しとぞきく

わゐ宿をいつ過しけむ時鳥あり明のつきにをちかへりなく

人やどすてゝいいはりぞ時鳥このゐかつきの聲なをしみそ

我そでにかけて拔うれし時鳥うの花やまのゐかつきのつゆ

時鳥またぬとなりもきゝやせし人は心はひのゑのゝめの空

夏の夜の月にゐくれていでぬれどやま時鳥をちかへるこゑ

旅にしてさよ時鳥きくわれをゑのびて妹がいねがてぬかも
高野やま眞木の木立の時鳥このゆふ暮もわはれとぞおもふ
時鳥をしまぬ聲をいまぞなくかのがさつきの五月雨のそら
大荒木のもりにやどりてたかく〳〵といむ事なげになく時鳥
うゑはてし山田のをさが門に來てゑて時鳥なにを鳴くらむ
花の枝のわを葉たちくぎゑのごろゝ時鳥なく志賀の山ごえ
五月雨ゝ夜中にはれて月になくわはれ其とりわはれその鳥
高砂のをのへかちくる時鳥きくやひゝきのなだわたるふね
信濃路ゝ野をあまたなり時鳥すがの荒野を名のりてぞなく

夏草

伊吹山させもぐ草のゑげなればうち散る霧も雨とふりつゝ
山里ゝかきはのひまの荒ければ内外もわらずゑげる夏くさ
むなわけてゆくやを鹿の跡もなく茂りにゝりな夏草のはら
故里の長柯の沼のわやめぐさうべしも長き根をばひくてふ

あやめ

あやめふく例たえねば都邊に花さきうづむぬまもありけり

競馬

駒きそふ神のみ庭にたつ人も我かたをかのかたをこそひけ

棟花

されば とてかげ頼まれぬ隣かなあふち花さく窓ぬくらきに

蚊遣火

風もなき蚊遣の烟なびきあひて暮なはわつき里のなかみち
玉だれのすげきにもれて香に薫るうすき烟や蚊遣なるらむ

五月雨

難波人芦荷ふもげにこぐふねのつくきしもなき五月雨の頃
五月雨に須磨の苫屋の蘆簾たれこめてけふもくれぬとぞ見る
うとからぬ隣ながらも蘆垣ぬまどはになりぬ五月雨のころ

早苗

五月雨を思のまゝにせきいれて小田のますらをさ苗とる也
五月雨ゝつぎてふらねば近江の海磯わのさ苗植ぞ足らしつ

夏月

松風のふとはの山をこえくれば夏ならぬ夜の月すみわたる
夏河ふひかりを見せて飛ぶ魚の音するかさに月ゝすみけり

夏夜

あつゝたゝよるなき里と思ひけりたちのいそぎの草の枕に
すゝみ

入りつどふ手船のひまを漕ぎ出て夕すゞみする浪花人かも
水音ゝたえし名こそその瀧殿にゆふべもゝしき風もふきけり
とやあをば夜ごめゝあいでて朝日山あさ風涼し宇治の川づら

螢

蘆ゑげみ葉うらにもがる夏虫のかくれてもほのみゆる光ゝ

わた殿の下ふく風のひやかゐてせきいれし水に螢とびかふ
此夕べひきやゐすもし螢火ゑひかりに見ゆる門のいたばし
わけぬれゞゐふち花さく葉がくれにやめゞつゞるゝ蜩の聲
なく蟬のやどりの松の木の本にもぬけの衣の風に吹かるゝ
夏山のともしの篝うちえめり雨うちそゝぐあけゞのゝそら
宵のまの月ゐかくるゝ雨もよにともし雲やくえがらぎの峰
夏ならぬ繪かきもさべるゐはほりのそれも涼しき花の種々

蟬

照射

扇

鵜飼

御舟近く波をてがせる篝火ゐ鵜のとる魚のかずも見えけり
夕ごとに峯なす雲ゐくゞをるゝ花にゐゑごのゐらき山かぜ
旅人のいくゑびひでてむすぶらむ泉のかはの夏ゑわたり瀨
かきにごし岩こす波もやがてゑむ清瀧川のゆふぐちのゐめ
ゆふだちの軒のやどりを始ゐてうれしき老が友もとめけり
湊いりの五手の船ゐはやきかも漕ぎそゝてくる沖の夕だち
風早み鞭さすかたに雲ゐちて我こまいばふ野路のゆふだち
秋にまた色ゐならはぬ葛の葉のうらふきかへす夕立のかぜ

夕顔

撫子

たそがれにほの見し花ゐえらぐゝと有明の月の影に殘れる
朝寐髪かきなでしこの花の上に露の暫しもめかれずぞ見む

藤原の宇萬伎ぬしの手向を洛陽三條の三寶寺の御墓に烟ゐあげて奉れる歌

鳥がなく東の國の、武藏の海大江の水戸に、高殿をたかえりまして、天の下まをしゐづかり、ためろぎのみことのまゝに、民草を靡けたまへゞ、物部の八十氏人ゐ、夜の守晝のまもりと、かしゑみて仕へまつれり、國つちをたひらの宮の、大城ゐゐみことも人、わりすゑて外のへ守らひ、すめろぎの日々のみことを、はゆましてまをしたまへり、中のへゐ千々の軍を、こめゑきて弓とりえばり、千はや人さはわざやすと、夜の守ひるのまもりに、召くはふ天のかゑ機、足玉も手玉もゆらに、神の織る衣づ屋のうしゐ、卯花ゑうきゑとともなく、いでてこし道の空より、わづらひの神やつきけむ、手束弓杖につきつゝ、中ゑ重ゐざもらひしさへ、時鳥きなく五月の、五月雨ゑはるゝ日もなく、末つひにうちこやしぬれ、さね床の夜をすがらに、故里ゑ家をゞ忍ぶ、晝ゐもよ息づきくらし、水無月のてる日をやみに、ゆく水のをぎて空しき、あら玉の來經ゆく年を、

手を折りてかき數ふれば、十あまり三年になりぬ、すべもなくねのみしなかゆ、かきつき處、

反歌

夏　歌　古をけふにむかへて忍ぶともいや年さかるあすの日よりハ

秋　唐崎のみそぎハはてゝたが里に袂すゞしくこぎかへるふね

大ぬさの柵かけてとゞむとも流るゝなつのゆふばらひかな

秋歌

初秋　紀國のむろの早稲田のほむきより今朝ふきわたる西の秋風

晴砌風梧脱　軒ふかき玉の砌のこけの上に夜のまのあきの桐のひと葉ハ

七夕　天の川ふねさす棹のさはれば月のかつらの花ちりみだる

天の川かは波たかし夜ごもりに歸すハすべな明けば面なし

殘暑　朝顔の凋まぬほどにふりはれて雨よりのちの秋ぞあつさハ

くれなゐと頼めし秋の空見れば風ふきとゞる西の八重ぐも

秋蝦　秋されば下のやしろのみたらしわ人まをまちて蛙なくなり

稲妻　秋たちて幾日もあらぬに風をいたむ窓よりもるゝ背の稲妻

稲妻の光ならずばくれはてゝ野なかの松をそこと見ましや

秋　風　吉野山紀の路に通ふみちゆけば笹わくる野の秋のゆふかぜ

村雨のはるゝ淺茅の露はらにぬれてや秋のかぜハふくらむ

初秋十七夜三井寺の高きに登りて月を見る

てる月の影ハ波なくぐけども光ハうみをひさるなりけり

あしさ湖上の樓に遊ぶ

白雲に心をのせてゆくらくら秋のうなばらかもひわたらむ

秋　野　君が家の壁草かりに野に出れば花ざかりなる秋ぞもある哉

萩　花　朝なゝ露に花にかもきぬ萩が枝の末ふすまでに雨のふれゝば

朝露ハまだき下葉にきえのこる野寺のにはの秋はぎのはな

萩が枝の末ハさゝれぬ流れぬひて波も花なる野路の玉がは

女郎花を植ゑて孫思邈を思ふ

あまたうゑて人や妬める女郎花老をやしなふ色香とを見よ

花毎に露をむすべる女郎花こゝろこまかに見るべかりけり

槿　花　一日てふそれも榮をわさ露のひるまをまたぬ野邊の貌ばな

藤袴　花々にいろゝまけぬる藤袴野ゝみおがらの香にゝほひけり
　　香にめでぬ人こそなけれ藤袴たれにゆるして花のひもとく

鳴頭草　月草にもらまく衣をめうつしにわやな千種の色にまよへる

紫苑　我ならぬわだ名もよしや玄こ草の玄こちし人もなき世なりせば

苅萱　風わたる野路の苅萱下をれて穂に出し秋のかひやなからむ

虫　秋の日の峯にいるさをまちかねて草むら毎にすだく虫の音
　　虫のねの多かるかたに露わけて野路の棚橋いくつこえけむ
　　矢田の野の淺茅にすだく松虫のなくねをとめて我たち惑ふ
　　こにこむる友を玄れびて松虫の野にさそふとや諸聲になく
　　庭くさになきにしものを蟋うさて夜さむのとおにちかよる

虫聲非一といふことを
　　つゝりさせ我機ぶらむ百きの野にいとまをなみの虫の聲々

秋　夕　思ふ事ありといなしに悲しきゝ秋のならひの夕ぐれのそら

傷岡雄之亡妻歌
　　夏すぎて秋ゝきぬらし、ふく風のめにし見えねば、朝かげをすゝしと人の、夕ぐれゝさびしかりけり、荻の葉の音ゝさやぎて、蟋蟀のおく聲きけば、古の人のおはれと、いひつぎし時にゝ成ぬ、其秋のおはれちふことを、我のみの身にしおふかゝ、妹なねゝ秋たづ空の、すゝろゐもよみ、ちに國を、何しかもふるさとのごと、立ていにし空しき牀に、とゝまりていかゐせよとか、男じもの腋ばさみたる、はらからの緑兒と共に、泣兒なす玄たひなゆかひ、こひまろび足摺玄つゝ、まどふらむ人こそゐはれ、明日よりゝいかにせましや、年月を長くともひて、語らひしことの悔しき、妹おねゝよみちふ國ゐ、先立しうなゐはなりに、相見つゝ手携はりて、遊ぶらむ俤茂ざに、見まくほり枕によれど、いねおてに夢もむすばず、荻の葉に秋風さやぎ、こほろぎのなく宵々の、さね床ぞわはれ、

霧
　　みかの原夕こえくれゞ泉がはいづゐわたりもみえぬ秋ぎり
　　朝ぎりの海の玉藻と見しゝこのふもとに玄げき杉のむら立
　　おぼつかな濱名のわたり霧こめて引馬の驛ゐさだちかぬる
河内の國ゐ人をとぶらひし時道の空ゐてよめる

伊駒根のくもゐ嵐にふきおちてふもとの里をこむるあま霧

河内のくさのといふ里に宿りてある程

月　歌

我すめど門たゝくべき人もなしこの山寺のあきの夜のつき

山のはにさし出る月の影みれば西をはじめの秋ならなくに

我すれる花田の衣のつき草は色おるそらおつぎすみわたる

千里までてらせる影とゆふ波の汐はたゝへに月さしのぼる

秋の月仰ぎてのみもありがてゐふでの林をわけぞわづらふ

世のうさを昔になして月見ればあきを盛とながむばかりぞ

山　月　かぞへきく秋てふ秋の聲たえて月かげ高く夜ゐふけゐつゝ

峯　月　ひとへ山へだつ都ゐ秋のよの月をにぎはひ見るものにして

田　家　月　世にいづる道ゐさえにし山住の月のあはれゐ秋ばかりかゐ

故　郷　月　ねさむれば比良の高ねに月おちて殘る夜くらし志賀の海面

秋夜遊墨江歌　程もなくうつりしゆけば長岡のふる里さむく月ゐてるらし

にぎはやひ神のみことの、翅なし漕こし舟ゆ、空ゐみつ大和島根の、青

柳のかつらぎ山も、生駒峯も常ゐる雲ゐ、秋風にいぶき拂ひて、月よみの出ましの空ゐ、夕霧のたちものぼらぎ、住の江の敷津にたてば、あからひく入日の影ゐ、沖見れば網引き網ひく、磯ゐゐゐ小舟つりする、秋の葉の風のみだれに、岸見ればゐゐ松原、よる波に根毎さらせり、白鷺のねぐらをほのに、夕闇のくるゝと見しを、月讃の神の尊の、出ましのみさきをはらふ、秋風も身にしをまねば、汐みつる清き濱邊に、秋の夜のふくるを知らに、あそびを我ゐ、

反　歌

伊駒峯にいざよふ月を波の上の中空までも見つゝあそばむ

てる月にあられ松原ひま見れば桂のはなのつちに散りしく

月前述懷

秋風に月をむよはの知ら雲をはらへどかゝる我こゝろかな

宵々に月ゐいでぬかなぐさまぬ心のくまをてらをばかりに

田舍住せし時

たゝならぬ雲のけしきに門たてゝをゐされこそ野分ふく風

詣八幡山放生會歌

秋風ゐ日にけにふきぬ、知ら露ゐ朝に夕べに、淺ち原玉と見るまで、れ

さそふと人の語れば、空蟬の世わたるわざの、いとまあらばいきて見まし

と、思ふ空安からなくも、たまさかに立ちいでけらし、堀江川舟さはひつゝ、夕川のみをさかのぼり、濁ぎゆけゞ秋ゝも中の、十日あまり四日の夜よしと、月影ゝ高くさしいでぬ、伊駒山常ゐる雲ゝ、秋風に晴みくもりみ、岸つたふ水陰草に、なく虫の聲をしきゝゞ、かにかくに秋ぞ悲しき、衣手に露ゝそぼちて、渡ぢ路遠く來にけり、ぬば玉の夜さへふけぬれ、月よみの光のさやに、みさくれゞ我志ざす、八幡山神さびたてり、此夜らや神いさめすと、宮つこらまゐりつどひて、白妙の袖ふりはへつゝ、須賣神の出ましの道ゝ、岩がねのこりしく道ぞ、級たてるさかしきみ坂、たびらゝく歩み行めり、神遊ぢ三くさの笛ゝ、春鳥の百千の聲を、うちならす鼓の音ゝ、天雲のよそにとゞろく、神のゐとのぢに聞えて、諸人の心ぞすめる、かけまくも畏けれども、いはまくゝ尊かりけり、不知火の筑紫の蚊田に、あれましゝそが跡とめて、里の名を宇綱とたゝへて、永き世にあれつぎけらく、大神の大御心ゝ、遠ぢろき河内の國の、輕島のわきらの宮に、天の下治め給へゞ、たく衾ぢら伎の國も、言さやぐ百濟も高麗も、草木なす風に靡きて、年のはに八十船うけて、貢もの奉る

なべゐ、もろこしの賢き道の、ふみどもをよみて聞ゆと、唐人もつかへまつれゞ、萬世の今のをつゝに、傳へ來て大御代ぢとの、もめみまの神ながらしも、みはかりに撰びとらして、國民を治め給へゞ、そが法に天のます人、益もさかゆく事ゝ、此神の大御心ぢ、いはまくも畏かりけり、かけまくも尊きろかも、ぢぬのめはぢはがら〳〵と、天の原朝霧こもり、出づる日ゝ此いつきます、もめ神の遠つみ親と、わがめます大日靈女の、神なぐら天てらしまず、御かげぢとわく世もわらず、拜みつるかも、

雁

てる月にかりの稀人なきわたる我まつ友ゝこよひ來なくに

とぶ雁のゆくへゝ霧に埋もれて鳥羽田の千町夕ぐれわけり

擣衣

たが衣かりぎぬ寒くなくなべに月見し庵も戸ざしせるかな

里ゝまぎねぬ聲すなりゝら衣うつの山邊をこえて來つれゞ

何くれと語りつゝけて芦垣のとなり隔てずころもうつなり

里ゝあれて尾花つゆちる夕暮に秋をうづらのころもうつ音

人やりの我ふる衣うつふとをふもとの家にきく夜さむしも

寐よとつく鐘より後に音ふけて人まちがてらころもうつ也

小鷹狩　武藏野の尾花高がやふみをり小鷹手にもゐゆく人やたれ

鹿　月かゝる木末の紅葉ちりはてゝを鹿のたちどあらは也けり

霜の上におきふしゐげさを鹿のなく聲毎に我もねざめて

時雨してやどりやゝせしさ夜中にれどろく軒の鹿の一こゑ

ゐかりとてわはせし夢か野に獨妬きをおのと恨むばかりぞ

聲のみやひとり月見る窓の前に尾上の鹿のかげもおちくる

奈良に遊びし時

紅葉　もみぢ葉をとめつゝ來れば春日野の男鹿の床に我も宿れり

朝戸あけて宿りの野邊を見渡せばちるき林にもみぢ色づく

大原や里のなか道あきゆけば青葉まじりにもみぢ散りゐく

とめてしをかひなくぞ見る山寺の早き戸ざしの庭のもみぢ葉

九重のあきゝ西より東よりもみぢかざしてかへるみやびと

庭の面にみだれて遊ぶ沓ふとのわりやと見しもちる紅葉哉

荒乳山せきぢの北のもみぢ葉に雪かゐぐれか雲のたちまふ

大あらきの森の下草時雨ゐも霜ゐもわはでもみづるやなぞ

遊箕面山歌　山ざとの稻はす賤の門むしろゐぐれぬけふゝ紅葉ちりゐく

神代よりひひつぎけらく、天地の始の時ゆ、もちわきて大山つみの、な

しませし何處ゝあれど、雨にきるみのふの山の、谷間ゆく清き河内ゝ、

眞榊の枝ゐとりかけし、鏡なもそこひもまめり、此山に鎭もる神の、に

ぎ魂と見てやもぎなむ、槇たてる峯此岩がね、きりとはしれちくる瀧ゝ、

天の原はろにふみあたす、いかづちの音にまがへれ、此山をうしはく神

の、あらみ魂かも、

瀧の肩に紅葉一木たてり

うつせども影ゝとゞめぞおちたぎつ岩垣もみぢ色深きさへ

秋のはて　秋も早二十日みそかと手を折りて山の紅葉を思ふころかな

人かたの天の河原もかげきえて秋の夜くらく雁なきわたる

豐年のにひなめまつる神の前に幣をちらして秋ゝいぬめり

秋はつる日信よしの家に庚申をまつらるゝにいきわひて歌よめといふによめる

枕ゐゝよらぬならひの今宵しもあきの別をかねてをしまむ

かへし　信美

たが宿も枕によらぬ今宵とてゆく秋さへもとまらざりけり

冬歌

霜

世の事ゝきこえぬ冬の山ざとにけふも時雨の音づれぞする

音たつる時雨もさらで稲こきの夜聲にぞはふ冬のやまざと

古あげて夜のほど見れば友船のそなたさぐれて波騷ぐなり

霜にのみ心づくしのきせわたにうたてさぐるゝわき菊の花

片岡のもりて日かげゝさしながら木葉をさそふ夕時雨かな

蘆庵時雨のやどりして其あした傘もたせこされしにいひやる

むら時雨ふるにとあれる笠の山かさでぞ君を留めましもの

落葉

森ふかき神のやしろの古熊すかきにとまるかぜのおち葉ゝ

ちりはてゝ其木ともなき冬枯に一葉なごりの色ゝ見えけり

有馬やま落葉に道ゝうづもれぬ君がみゆきの跡たえしより

遊佐保山歌

神無月時雨の常に、佐保の内ゝ露霜さむみ、こゝにきて往しへもへば、草木すらさなえうらびぬ、鞆おへる伴の男廣き、大伴のますらたけをが、

家居せし山路にけふゝ、袖ぬらすかも、

霜

ふき渡す霜の絶間となりにけり今朝ゝおちたる野路の柵橋

氷

夜の程にふりしや雨の庭たづみ落葉をとぢてけさゝ氷れる

信濃路のかしこきみ坂こえくれば氷をわたる海もありけり

霰

宮木ひく杣がかりねの板ぶきに霰おときくさ夜のねざめゝ

雪

ときぞふり夜のふけゆけば有馬山出湯の室に人のともせぬ

紀ぐら江の堤を冬ゆく　三章

風わたる枯葉にあさの霜きえてあしの穂白し淀のおほさは

何にこの莖葉といめし花はちす浪もこぞめの色に見えしを

冬月

さゝなみの志賀の海面月さえて氷になみのたつかとも見ゆ

雪ふると見し夜の雲ゝ名殘なく晴てふけゆく月のさやけさ

池の面にとづるとぞ見し月影ゝ空にさやけく氷るわかつき

さらさなや姨捨やまのうぜさえて田おとに氷る冬の夜の月

神無月の頃宇治の橋本に宿りしあしさ

風もなき朝たつ霧のそれをさへ流れてはやき宇治の川なみ

冬

枯　冬がれてあれのみまさる菅原や伏見も西のみやこなりしを

ちりはて丶寒げに靡く枝ごとに芽はりて見ゆるかど柳かな

かつまたの池の蓮のかれ莖にかぜ吹きわたるあ丶た寒しも

千鳥なく須磨山かげの濱つゝら浦つたひしも冬がれゐけり

故郷ゝいかにふりつむけふならん奈良の飛鳥の寺のはつ雪

一年のむかしにたえし山里をけふとはずゞど雪ふみまよふ

大原のをかのふもとがふらす雪やまと國ばら道もなきかな

杉がゝを雲ゝはしりて吉野なる樫の尾上にはだれゆきふる

大ぞらをうち傾けてふるゆきに天の河原ゝあせにけむかも

誰が繼の絶の夜かれとなりぬらむけぬが上ふる雪のみち芝

たには路に打越くれゞ野も山もてる日ながらにはだれ雪ふる

鯨よる浦やま松につもるゆき波にけたれてまたふりつもる

まびかはす聲を便に夕こゆる山路をゑらずゆきのふれゝゞ

雪淺し　いつしかとまたれし雪を朝日さす松の雫に見るがわびしさ

雪深し　聞きしより思ひしよりも冬深き雪のゑたなるこしの旅寐ゝ

故里のなにはは江ゝかに寒からむかもの河原に雪のふれゝゞ

根芹ふふ田井の水澁の色ながら氷れるうへに雪のつもれる

但馬なる雪のゑち濱かぜさゆてなほふりつもる雪の白はま

冬深みゆきふりつゞみ越路の松のこずゑゝ道のゑばくさ

つむ雪のとゝろに崩る山かげゝ朝戸をゐそき里のかど〳〵

感　懷

九重に八重ふりつめるゑら雪の下にうもれて老やくちなむ

沫雪のあはれゝ老がゐもふことつむとゝすれどゑた崩して

狩　大君のみ鷹あはすと狩る杖のかとたかしもよ野路のふし原

水　鳥

巨椋のいり江の小舟てげゞゝちかへれゞうかぶをし鳬の聲

風ならゞ閨戸ふきくを靜なるそらにあらしのあぢのむら鳥

池のゑま松のさ枝にゐるをしの妻よびかねて波の上におう

翠池浮鴨

れのが名の青波たて丶冬のいけにて丶だ浮べる鴨といふ舟

千鳥浦つたふ　須磨の山の松ふく風や送るらむ生田がうらに千鳥なくなり

網　大井がは冬ゝあらしの山松のかげをる淵あちどりなくなり

代　夜舟こゞ宇治の川浪騒ぐらし網代あかゝる氷魚のみざれゝ

うちかけし波さへ氷る網代木をもりあかすらむ宇治の里人

冬の梅

こぬ春にあらぬ物からまつ程をうめゝ心にまかせてぞさく

なには江や西ふく冬の浦風ゐそむけてひらく梅のはつはな

枯芦にてもれる沼の岸見れば花さむげなるうめのひともと

ひらくやと冬の北窓あけ見ればふゝめる梅ゐ雪のかゝれる

佛名

聲清くとなふるに名を頼まれて身ゝ罪なしと思ひこそなれ

に名とおふ夜ゐの法師があけ衣あけていづくも誰か咎めむ

追儺

年毎にやらへど鬼のまうでくる都ゝひとのすむべかりける

歳暮

谷水の音羽の川もこはりゐてよどめど年ゝとまらざりけり

老らくゝ安きことなり年月のくるとあくとの跡につきてゝ

田舍にありし時

世中にさはらで年もくれゐけり八重葎さへかれしかきねゝ

年の暮に荷田信郷とひ來てめづらしく都の春を迎へらるゝおとよ客中此歳暮よみて聞かせ給へ翌まうでひとていぬ試みらるゝにやと僻こゝろもるに日くれて信美の來られしに筆とりてよとてつゝめきし歌

空蟬の世ゝ海ゐかも、我ゝもよ柵なし小舟、沖邊ゆかば風をいたみか、

澳つかひとりかてぬかも、ありそべゝ波のさわげば、邊つ櫂もとりにぬ

かもや、人皆ゝをかにゝあらじを、我ゝもよ世のをれ人ぞ、難波江の芦

の八重葺、ひまもなく物をぞ思ふ、心からすみか定めず、草枕さびとあ

はれと、都人のみらくをやさし、水無月の暑き盡ゝも、夏虫ぬはむしの衣、

一重おそよき、夜半もよ露にぬれつゝ、秋されば日ごそまされ、天の

河ゐふきて見れば、月影ゝ満ちてぞかくる、我齡我世もをかぞ、長月の

夜寒になれば、雁がねのれはふ翅に、もる霜ゐはだへ氷れど、冬ぎぬの

神も守らず、やれくたつ時雨の雨の、古衣身にとりまとひ、ぬる夜稀に

わびつゝぞある、をかゝわれど世ゝ海なれば、大船に眞楫をゝぬき、わ

たりする人のうけきも、喜も我ゝをらずに、み冬つき春ゝ近けど、西の

市にたちも走らず、東の市ゐもいでず、足ひきの山邊の家に、庭雀うす

ぎまりをりかた鹽をとりつゝしろひ、さす鍋に湯わかしくみて、あら玉

の來へゆく年を、迎ふとやきく、

右寛政五年六月漂然來三京師一玆歳冬十二月廿八日夜賦之

歳晩夜坐感懐

此年や何ぞの年ぞ、此夜らやいかなる夜らぞ、荒玉は來へゆく月日、老が身にたへぬ重荷を、弱車かりて去のべば、古いうなきが中に、喜もありへしことを、白波のあとなきかたに、すでし來ていまの現の、よろこびゐうけきがそふい、我のみか豊蘆原の、久方の天の益人、ふのが世のよけきにあかねば、悲しびをむかひの岡の、櫻花さきのをゝりに、ぬばたまの一夜の風に、ちりかすぎなむ、其花のみ盛のおと、八隅ゑし國のはたてに、仰ぎ見て阿部橋の、とこ宮と思ひたのみて、夜の守畫のまもりの、少女らが赤裳ひきはへ、神はでとつかへませしを、此年ゝ何ぞの年ぞ、新玉は來へゆく月日、くれはて、月もかくれぬ、其月のいりぬるがごと、闇夜なを黒き御車、といろかしよみちふ國に、いでましの御供の人も、鶴ばみのにぶ色衣、にふ、にぞゐゆみやつかると、をろがみの心もわちねば、弱車ひかれもいでず、葬生の門さしこめて、此夜らをもりてぞあかす、かけまくもかしこけれども、玉きはる命なにせむ、老が身にわをを春とも、ふもはえずわはれ〳〵と、此夜らを歎きてあかす、かしおろれども、

反歌

たちさへしよもつ平坂岩くえてとはらふ道といつかなりけむ

よわ車とはらふ道ぞたのまゝ老がこゆべきよもつひら坂

右國母御葬送之大路與二富居一相近因有二斯作一

年かへりてむ月の公でといふ皆といめさせ給ふが二月朔日を始に御ためし去さし行はせ給ふとも聞たいまつりて

客舍感懐

年きりと思ひし花も咲にけりにはひおくれて見ゆる物から

年といへば月日數多に、春霞秋たつさ霧、時鳥なくや五月の、さゝざれのけふを幾日と、長きけにいぶせくもあるか、神無月時雨の雨の、はれ曇り雪に籠れる、頃迄を久しとをいへ、其年を十はた三十、四十ちふ老の始も、いつのまに遠ざかりぬれ、百たらずへぬる齢ゝ、海にあるものとしきく物、天雲はよそゐゐあらで、ふのが身につみつるやなぞ、山河の七瀬よどまず、此年もくれはてぬめり、何すとか世ゐゐありけむ、うつし身と我思はねば、花のごと榮ゆる人の、今迄も世ゐゐあらじと、住の江の濱によるちふ、白玉の忘をてぞある、宿さへもはるをやさしみ、松の戸をさなしかためて、釘さしていれじとぞすまふ、此戸ひらくな、

こゝにある子よ、

反歌

浦島に箱ゆたなびく白くもの天ゐもゆかなかいにかいてい

其二

年てへゞわくる暮るゝと、一年を一日のごとに、いひつゝもすぐるを惜しみ、新らしき春をむかふと、よき人此家のためしに、清まはりゆまはりをつゝ、神にねぎことはさきして、うからやからにきびゆきかひ、たぬしきをへめとぐ祝ふ、内日さす宮のとのへの、水鳥の鴨の堤に、草枕かりほゐゐれど、六年までおきゐふしゐれ、世の人のなすわざをらぎ、鹿じもの獨ゐる子も、打たのむせなに別れて、ぬば玉の衣さまどひ、ひたゐるに後の世たのむ、すべのすべなさ、

反歌

生死のふたつの海の中つ瀬ゐかゝりてゐまた年もへにけり

雜歌

天

八百萬千よろづ神のかみごとも天まづなりて後とこそきけ

日

人かたの日のたてぬきに春秋をゐやに織りなすたく機の神

星

闇だゐも忍ぶさはりとさやけきゐ天のかゝせをゐしき神也

雲

はれ曇る人の心にくらぶれゞ雲のまよひゐかごとなりけり

曉雲

吉野山雲にまがへる花さけゞ花ゐもまがふゐかつきのくも

雲有歸山情

まがはじと花に別れて小初瀨ゐ夕べゐかへる春のうきくも

青鷺

淺みどり我まづそめて春の色を野山に見する朝がすみかな

煙霧

ゆふぐれの霧のまがきの島松ゐ煙にたてるましばとも見ゆ

雨

三吉野の山にいりにし人とへゞ花ゐも雨ゐさはらざりけり

露

白露にきえゐおくれぬあだものゝ命を人ゐゐのむなりけり

風

まき向の檜原さやぎてふくかぜに初瀨少女のそでかへる見ゆ

思ひつゝけふもくれぬる都邊に山風さえていでゐてにする

山

二荒山吾妻の空ときゝつるを茂きみ蔭ゐこゝにしゐりけり

阿褥多羅わがたつ杣を始ゐて比枝の山びこよばぬ日もなし

萬代の國のゐづめの富士のねをゐふげゞ空にうつしみの神

田子の浦や千尋此そこゐ走出の富士ゐ仰ぎて高きのみかい

高嶺こそ時雨もゐらぬ春されゞ青ゐばやまにかすみ棚びく

きえてふる雪かちりけむみな月の富士の裾野の夕立のあめ